

昭和集団羞辱史

ちよんの間
売春編 女護ヶ島



濠門長恭



Acrobat Reader で見開き表示を縦書きに合わせるには

「編集」→「デフォルトの読み上げ方向」で『右から左へ』を選択して「OK」
いったん Acrobat Reader を閉じて、ファイルを開き直してください。

巻頭言

「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した昭和三十一年。所得倍増計画が発表された昭和三十五年。時代は高度経済成長に突入していた。

進学率が半数に達していなかった当時、停滞する一次産業地域の新卒者の多くは、急成長を続ける工業と商業へと、就職していった。地方から大都市へ新卒者を運ぶ『集団就職列車』が仕立てられたほどだった。

しかし。華やかで豊かな生活への憧れと希望とを胸に巣立つ若者たちばかりではなかった。意に染まぬものの、さまざまな事情で、都会の汚濁に身を投げ込まざるを得なかった少年少女もいた。

このシリーズでは、高度経済成長の影で泣いた——主として少女たちの足跡を追ってみたいと思う。

なお、本シリーズでは、昭和三十年代に普通に使われていた名称を敢えて使い、現代風には書き換えない。ソープランド（トルコ風呂）が出現するのは昭和六十年になってからであるし、昭和五十年代後半までニューハーフ（オカマ）という言葉は知られていなかった

た。ビジネスガールは娼売女の意味を持たなかった。

時代劇の中で、経済とか軍事力といった言葉に違和感を覚えるのと同じ理由で、筆者は右の方針を採るものである。

本シリーズの設定は、作者の少年時代の記憶を土台にして、あるいは時間軸をずらし、またはネットで得た知識に基づいて想像や虚構を大幅に交えたものであるが、登場する人物・年齢・団体・地名などはすべてフィクションである。また特定の思想などを賛美もしくは誹謗するものでもない。本文中に述べられる作者の見解についても、論説などではないことをお断わりしておく。

本編について

本シリーズで扱うテーマに売春は通底しているのだが、たとえば現在のソープランドでは本番必須であるのに対してトルコ風呂の当時はおスぺやダブルといったサービスもあった。そういった意味で、本編を『売春編』とした次第である。

他に適当なタイトルが無かったという事情もある。『宿屋編』も考えたが『ちよんの間』は飲食店を隠れ蓑にしているので適切ではない。『泊食』という言葉はあるが、特定の状況でしか使われない（素泊まり幾ら、食事は幾らというのが泊食分離である）。

なお、『立ちんぼ』も当然本番百パーセントであるが、本シリーズで扱うかどうかは未定である。扱うとしたら『物売編』に入れるであろう。

目次

巻頭言

目次

ちよんの間

特別幹旋

職業指導

接客見学

不評判

縄見世

娼売繁昌

爪はじき

役割交換

S M 風俗

女護ヶ島

夏祭の夜

淫放少女

積極志願

仕事初め

売れっ娘

初の絶頂

駆け落ち	270
幕間本気	290
公開折檻	309
徹夜木馬	357
甘い地獄	363
後書き	372

ちよんの間

昭和三十一年に売春防止法が施行されて以来、売春は違法な行為となった。ただし売春行為そのものは（違法ではあるが）処罰されず、売春のための場所の提供や売春の勧誘が処罰対象にされている。売春の実行者はむしろ性的搾取の被害者と見做されるからである。ただし、売春婦が自分で客を引くと勧誘行為を伴うので処罰されるから、念のため。

現在における実質的な売春は、接客において女子従業員が男性客と恋に落ちて、店とは関係なく自由恋愛行為を行なう——という詭弁のうえに成立している。パチンコ景品の三点方式による換金も、ソープが料金を入浴料とサービス料とに分けているのも、根っ子は同じなのである。

なお、手コキ、口内発射、素股、アナルセックスなどは男性器を女性器に挿入する行為ではないので、金銭の授受があっても売春ではない。ただし、どこかの国の革命指導者や無国籍大手通販業者と同じように、この解釈は『伸び縮みする物差し』（ソフトに言い換えるなら現状に適合した柔軟な運用）なので、法改悪することなく突如として取り締まり対象になる懸念もあるから、起業を志す読者諸兄は注意されたい。

それはともかく。実質的な売春施設の代表は個室浴場（ソープ）であるが、かつての遊郭が飲食業の看板を掲げて営業を続けている例も多い。提供される食事（？）は煎餅であ

ったり、せいぜい瓶ビールとツマミくらいであるが。

なお、遊郭というと、豪華な宴席やお大尽遊びのイメージがあるが、それは江戸時代の一時期の、ごく限られた富裕層向けのサービスである。現代の感覚でいえば、超高級ソープとキャバクラが一体化した施設を借り切って嬢全員を侍らすようなものだろうか。売春の最大顧客層は庶民であり、することだけをすればそれで満足。疑似恋愛も遊女との駆け引きも煩わしいだけ。

そういった意味では『ちよんの間』こそ遊郭の伝統を正しく受け継いでいると、筆者は思うのである。

特別幹旋

「明日の放課後に、特に困窮している家庭の女子生徒を対象にした就職説明会を開きます」担任ではなく、校長がわざわざ教室まで出向いて来て、そう告げた。いつものような堂々とした物言いではなく、口ごもっているような印象が、ますます生徒をざわつかせた。

「紹介する職業は、大学卒業者の初任給よりも高収入ですし、支度金も支給されます。それだけに仕事はきつく、病気に罹る危険もあります。説明会への参加は任意ですが、ご両親ともよく相談をして、覚悟を決めてからにしてください」

校長が姿を消すと、教室のざわめきはいつそう大きくなった。

「あれって、水商売のことだよな」

「ホステスとかじゃなくて。昔で言えば赤線だろ」

「百合っぺが就職するんだったら、俺、給料はたいて買いくわ」

喋っているのは男子ばかり。女子は、意味がわからずにポカンとしている者、頬を染めながらも他人事然と澄ましている者、深刻そうに机とにらめっこをしている者。一様に押し黙っていた。

小島明美は、にらめっこ組のひとりだった。すでに、心は定まっている。

明美の下には弟が二人と妹も一人。祖母も健在で一家七人。農閑期に父は自動車工場へ出稼ぎに行っているが、特に困窮しているわけではない。しかし、明美はもちろん。男子だけでも進学させるほどのゆとりはない。それが、もどかしかった。秀一——上の弟は、名前のとおり村一番の秀才だった。学問を修めれば、旧い言い方だが、末は博士か大臣か。家族の欲目ではない。学校の先生も口をそろえて言ってくれる。ことに主要教科の先生たちの口癖は——

「通知表は5段階評価だが、秀一くんには6をつけてあげたいくらいだ」だった。

帰宅すると、明美は両親に決心を告げた。

「なにを馬鹿なこと、言ってるんだ」

「お女郎さんに身売りするなんて、とんでもない」

当然だが、大反対された。

「だいたい、なにをするかわかっているのか」

学校で教わる性に関する知識は、オシベとメシベがどうこうという内容にとどまり、あ

とは主として女子生徒に観念的な純潔教育をお説教する。そういった時代にあつては、父親の懸念は当然でもあつた。

「わかつてるわ。男の人と女の人が抱き合つて寝るんですよ。でも、きちんとヒニン処置をすれば赤ちゃんはできないのよね。それくらい、知っています」

夜這いの美風が廃れたのは近年のことであるし、今でも祭りの夜には境内の暗がりでは結ばれる男女も少なくない。すでに性熟の階きざはしを半ば登っている明美にひと通りの知識があつたとしても不思議ではなかつたのだが。父親は娘の言葉をそれ以上に解釈してしまった。「いつの間に……そこまでふしだらな娘とは思わなかつた。好きにしろ」

明美も父がなにかしら誤解しているらしいと気づいたが、弁解はしなかつた。好きにしたいと許してもらつたのだ。月々きちんと仕送りをしていけば、きつと見直してくれる。

自分が特殊な仕事に就こうとしていることよりも、両親が自分をどう思っているかのほうが、はるかに大事に思える明美だつた。

職業指導

都会への集団就職組が旅立つて一週間も過ぎた三月二十八日。小島明美は近在の村から集まつた四人の少女とともに、即日採用社の今里という若い男に引率されて、夜行列車で故郷を後にした。学校の教師や後輩たちや親戚一同の見送りもない、もの悲しい旅立ちだつた。見送りに来ていたのは、津田佳恵という小柄な美人の両親と、新卒ではないらしい

大芝加奈という娘の母親——三人だけだった。明美は、面と向かつて言われたわけではないが、就職を決めてからは両親に縁切りをされた雰囲気が続いていた。

汽車の中で女の子が五人もひと塊りになっっているが、お喋りに花が咲くこともなく、今里が差し入れてくれた駅弁を黙々と食べ、お通夜（田舎のそれは、けっこう賑やかだ）よりも湿気った空気の中で夜が更けていき、やがて浅い微睡みに引きずり込まれていった。それも、ときおりの汽笛や停車駅でのガタンゴトンで何度も破られたのだけれど。

ターミナル駅では、特別就職説明会に来ていた四十歳過ぎの林課長が出迎えてくれた。そこに、山幡という今里より二つ三つ歳上の男に引率された三人の娘が合流した。

就職する女子は総勢八名。そのうちの二人は、遠方の就職先から雇い主が迎えに来ていて、すぐに分かれた。明美は汽車でも一緒だった田端朋子という、ちよつとぼつちやりおつとりした子とともに、今里に就職先まで連れて行ってもらった。

都心と近郊とを結ぶ電車で小一時間。降りたところは、たまに家族で奮発して出かけていた街が田舎に思えるほどの都会だった。さらに三十分ほど歩く。駅前の賑わいがすこし落ち着いた街並みに変わって、そこから何度か道を曲がると、ひどく雑然とした印象のアーケード街に行きついた。

「昼にはちよつと早いが、田端さんの紹介先はすぐそこだから。先に昼飯を食っておこう」
二人を小奇麗な食堂へ案内する。

小奇麗というのは今里の言葉だったが、明美にしてみれば（おそらく朋子にとっても）デパートの食堂よりもよほど豪華に見えた。店頭の蠟細工見本だけでも——カレーライス、ハヤシライス、ビフカツ定食、赤や白のスパゲッティ、酢豚定食、中華ソバ、又焼麺、炒

飯、焼き魚定食、刺身定食、カツ丼、天丼、親子丼、天婦羅蕎麦にスタミナうどん。和洋中が一堂に会している。二人とも、五分以上ショーケースを呆然と眺めて。

「なんだ、決められないのか。それじゃ、俺が決めてやるから。さあ、突っ立ってちや営業妨害だぞ」

今里に尻を叩かれる始末。それくらいは学校でも日常茶飯なので、悲鳴をあげたり文句をつけたりはしない。

「晴れの門出だ。ビフカツ定食を三つ。それと、ビール。グラスは三つな」

明美たちとたいして歳の違わない女店員が、遠慮がちに言う。

「あのう……未成年の人にお酒は出せない決まりになってるんです」

朋子も明美もセーラー服を着ていた。この時代、制服以外に外出着を持っているのは、それなりに裕福な階層の子弟に限られていた。朋子も同じだろうが明美も、支度金というには多すぎる金額をすでもらっている。明美の場合でいえば十万円。新卒者の年間給与にも匹敵する額だが、それはすべて学資として弟名義の郵便貯金にしてきた。だから財布の中には、家に帰る汽車賃すら無かった。それは自分に対する不退転の決意表明でもあったのだが。

「ややこしいことを言うなよ。この二人は、今日から特飲街で働くんだぜ。ビールの一杯も飲めずに、男の相手ができるわけねえだろ」

ことさらに伝法な調子で、女子店員をやりこめる今里。店員は奥を振り返ってから。

「わかりました。しばらくお待ちください」

言われたとおりにビールの大瓶とコップを三つ運んできた。

今里が、泡があふれるまでコップにビールを注ぐ。

（飲めるかしら？）

泡を舐めただけでとまではいわないが、コップに三分の一もビールを飲むと、顔が火照って頭がポワンとしてくる。酔っ払って就職先に連れて行かれて、失礼な振る舞いをしないだろうかと、それが気がかりだった。

「それじゃ、乾杯。頑張って稼げよ」

今里の調子に巻き込まれて、コップをひと息に明けてしまった。

やがて料理が運ばれてきて。お子様ランチを卒業してからも、ハヤシライス（カレーは辛くて苦手）か玉子丼くらいしか食べたことのない明美は、ビフカツのサクサクした食感に驚くと同時に、一気にオトナの仲間入りをした気分になった。もともと、皿の縁に盛られていた粒々の黄色を辛子と気づかず塗りに過ぎてしまつて、それに炭酸ガスがお腹の中で膨れたので、半分以上は持て余してしまつた。もちろん、食事を残すなんてもつたないことはできない。どうしようかと悩んでいると、今里が助け舟を出してくれた。

「おおい、姉ちゃん。二人とも量が多くて食いきれねえとさ。折に詰めてくれよ」

たちまち皿が下げられて、すぐに小ぢんまりとした折詰がテーブルに乗せられた。

「晩飯が浮いたな。と言っても、明美ちゃんのほうは、賄い付きだったか」

完全個室制の飲食店に仲居として住み込みで働くというのが、表向きの触れ込みだった。

いや、表も裏も無い。仲居がお客様と寝るのは、あくまでも自由恋愛であると——これは、就職説明会のときにも念を押されている。もっとも、自由恋愛をしなければ寮費も払えないのだけだ。

こればかりは奮発したポストンバッグの上に折詰を入れて店から出ようとすると、数人の客に声をかけられた。

「お姉ちゃんたち、どこで働くの？」

「ずいぶんと若いね。集団就職ってやつかい」

どう答えようか、そもそも勤め先を教えていいものだろうかと迷う間もなく、今里が気楽に受け応える。

「こっちのぼっちゃりさんはピンサロの『ヨルメーナ』、ツインテちゃんは『新奇楼』さ。どうぞご最真に」

初めて聞く言葉だが、ツインテとはツインテールのことだと、すぐにわかった。在学中はずっと三つ編みにしていたのだが、それではあまりに子供っぽいと思って、ほどいて付け根をリボンでまとめて左右に垂らしている。さすがに、まだお化粧はしていない。

「どっちも、ずいぶんと高い店だな。まあ、これだけ若くて可愛けりや当然か」

アルコールで足元をふらかせている二人を左右に抱えて、今里が店を出る。

そのまましばらく進んで、なにか目印があったのか、裏道へ曲がる。

「明美ちゃんは、ちよいと待っててな」

みすばらしいドアを開けて、今里と朋子が中へはいった。

表通りは極彩色の看板が並んでいかにも華やかだったが、路地裏はくすんでいる。だけでなく、ドブの臭いやゴミ箱からあふれた腐臭が煙草の臭いに入り混じっていた。壁に寄りかかっても、そこらへんの木箱に座っても服が汚れそうで——明美はじっと立って待っていた。というのは、彼女の意識で。実際には、酔いが上体をゆっくりと揺すぶっていた。

十分くらいで、今里がひとりで戻ってきた。

「お待たせ。さあ、行こう」

しばらく歩くうちに看板が減って、住宅街のような雰囲気になった。『御休憩』という看板が目立ち始めた。そのひとつの下で、今里が立ち止まった。追いついた明美の腰に手を回して、入口をくぐった。

そこがこれからの仕事場なのだと思て疑わなかった明美だが。

「先方との約束まで、まだ三時間ばかりある。ひと休みしていこう」

三時間もあれば酔いも覚めるだろうと、まだ軽く考えている。夜になっていないのに、布団が延べられているのが気になった。それも、二人なののひとつ。

座卓の前に座って。仲居さんが来る気配もないし、魔法瓶と急須は目の前に置かれている。お茶でも入れようと伸ばした手を、後ろから押さえられた。

「明美ちゃんは、ずいぶんと割り切っているけど。ほんとうにわかっているよね？」

肩を抱かれて、耳元でささやかれた。

「あの……わかっているって、なにがですか？」

「だから。これから明美ちゃんがする仕事のことだよ。経験は、あるの？」

そんなの、経験がなくなっちゃんとできる。

「男の人とわたしが、抱き合ってひとつの布団で寝るんですよ。そしたら赤ちゃんができるけど、男の人はヒニンの仕方を知ってるそうだから……」

「抱き合うって、どういうふうに？ もっと具体的に言える？」

「え……？ ふつうは正面を向き合って、男の人が上になって。あ、でも……わたしがう

つ伏せになって、男の人が背中に覆いかぶさることもあるみたいですね」

今里が溜め息を吐いた。まさかとは思っていたけど——そうつぶやいた。

「それじゃ、今からそれをするけど、いいね。言ってみれば職業訓練みたいなものだ」

「え、今ですか？」

ああそうか。だから布団が敷いてあったんだと、妙に納得する明美。

「そうだ。キミは根本的な勘違いをしているように思う」

「そんなこと、ないと思いますけど……職業訓練なら、きちんと習っておかないといけませんね」

「そういうこと。まずは、スカートとパンツを脱いで」

セーラー服のまま寝るなんてお行儀の悪いことは、もちろんしない。でも、パンツまで脱ぐなんて。男女で寝るときのお作法なんだろうか。戸惑いながらも、明美は言われたとおりにした。両手を股間に重ねて、つぎの指図を待つ。

「ちよんの間ではキスはしないんだけど、最初からそれじゃ味気ないだろ」

意味のわからないことを言いながら、今里が顔を近づけてくる。両肩をつかまれて、逃げるに逃げられない。逃げようとも思わなかった。男女が抱き合う前にはキスをするのが自然な流れだと、おませな子から聞いた覚えもあった。

むにゅっと唇と唇とが重なって、なんだか生ぬるいお刺身を押し当てられているような感触だった。誰と誰がキスをしたとか噂話で盛り上がったこともあったけど、気持ち悪いばかりでちっとも胸がときめかない。そんな思ひは、唇を割って舌が口の中に侵入してきて、それどころではなくなかった。

「んんー、んんん」

舌を絡ませられ、頬の内側を舐められて、それが驚愕の始まりだった。

身を振りほどいたりしたらいけないんだろうなと考えているうちに――

ざらつと尻を撫でられた。スカートの上からなら、男の子に悪戯されたこともあったけれど、直接肌に触れる掌はまるで感触が違っていた。粘っこいくすぐったさが波のように広がっていく。

肩を押されて布団の上に押し倒されたときは、むしろホッとした。ここからが『お仕事』のいちばん大切な部分だと、気を引き締めたのだが。

今里は抱きついてこずに、上体を起こし気味にして股間に手を這わせてきた。内腿を撫であげて――蛞蝓が這っているような気持ち悪さと、さっき以上の粘っこいくすぐったさ。

「ひゃああっ……!!」

明美は悲鳴をあげて、今里を突き飛ばしていた。まったく思いもかけない部分を――絶対に誰にも見せたり触らせたりしてはいけないと、小さいときから母親に教えられてきた部分に触れられるどころか、指先でくじられたのだ。

「変なことは、やめてください」

今里が苦笑した。なにを思ったか、立ち上がってズボンを脱いだ。だけでなく、パンツまで脱いだ。

「きゃ……!!」

男の股間にでろんと垂れた棒を見て、あわてて明美は両手で目をふさいだ。男の人のオチンチンを見てはいけなくとも、母に騷けられている。けれど、好奇心もあって――指の

隙間から覗き見してしまう。父の股間に垂れているものと同じで、先のほうが丸くなっている。棒の裏側から垂れているはずのキンタマが、子供のそれみたいに縮んでいる。

「いいか。男と女が寝るといのは——こいつを」

今里が、垂れている肉棒を右手で支えて水平にした。

「明美ちゃんの股の間にある穴に挿れて、穴と棒とを擦り合わせることを言うんだよ」

「穴なんて……」

空いてませんと言いかけて。でも、オシッコが出るんだから穴はあるのかな。でも、あんな太い棒がオシッコの穴に入るとも思えない。

今里が、股間を剥き出しにしたままのしかかってくる。

「口で説明するより、身体で覚えるほうが早い。いずれは、一日に何人もの男としなければならぬことなんだからね」

そう言われると、また突き飛ばす気にはなれない。自分は『仕事』のことを勘違いしていたのかもしれないけれど——だからといって、逃げ帰るわけにはいかない。秀一を上を学校へやるためにも、頑張らなければならない。

「わかりました……よろしくお願いします」

今里が、また苦笑した。

「俺も処女を相手にするのは初めてだが……よろしくお願いされるとは、思ってもいなかったよ」

明美には、今里が笑っている理由がわからない。とにかく。これが『仕事』なのだから、きちんと教えてもらおう。そんなふうに考えている。と同時に——男と女とがひとつにな

って寝ることと、禁忌にされてきた股間を男に触れられることが、頭の中でようやく結びつこうとしていた。

成り行きで、明美は両手で目をふさいだまま仰臥している。両脚は軽く開いて投げ出している。男の人がそこを触ろうとしているのだから、閉じるのは不作法だと、ぼんやり考えていた。しかし、積極的に開く必要があるとは思ってもよらない。

今里の指が、割れ目に沿って動く。『お仕事』なんだからという思いが、気色の悪さを我慢させる。が、粘っこいくすぐったさだけはどうしようもない。自然と腰がひくついてもう。

指が割れ目の中に押し入ってきた。ずにゆうつと身体の中にめり込んでくる。

（え……こんなところに、穴が？）

あつたんだと思う前に。ナイフで切り裂かれるような痛みを感じた。

「痛い……!!」

職業訓練とか、そういったことを忘れて、布団の上で後じさった。が、肩を押さえ付けられた。

「ごめん。ちょっとだけ我慢してな。できるだけ、優しくするから」

そう囁かれては、我慢するしかない。この人は、私を虐めているんじゃない。何も知らなかったわたしが、ちゃんと『お仕事』ができるように教えてくれているんだ。

指の動きが優しくなったとは感じられないが、痛みはずっと小さくなった。

指が引き抜かれて、またすぐに挿れられた。

「痛い……」

呻いてしまった。なんだか太くなったようにも感じられた。

「だいぶん、こなれてきたね。ぬかるんてるよ」

言われてみると、身体の芯で指が滑っているような感覚があった。これまでも、不意に割れ目の奥が熱く感じたりすることがあった。そんなときは、なぜかパンツが粘く染みていたりしたのだが――それは、こういうことだったのかと、なにがこ、う、い、う、ことか頭ではよくわからないけど、身体が納得しているという実感があった。

やがて、指が引き抜かれて。今里の顔が正面に来了。ああ、そうか。これから、男の人のオチンチンがわたしの穴の中に挿入^{はい}してくるんだと、本能的に悟ったのだが。

すぐには、そうならなかった。デロンとした肉棒を明美の股間にこすりつけている。かと思うと。上体を起こし気味にして、両手で乳房をつかんだ。

もにゅもにゅと揉まれて、肉をつねられる痛さに、股間が冷めていくのがわかった。

「どうもな……ちっちゃな子を虐めているみたいで、こいつがその気になってくれない」
肉棒を手荒くこすりながら、顔に焦燥を浮かべている。

「あの……？」

明美は不安に駆られた。この人は『職業訓練』としてわたしを抱こうとしているのに、自分に女としての魅力がないから、その気になれないのではないか――そう思った。いやや宿題をやるようなものだ。もしもそうだとしたら、『お仕事』をする資格が自分にはないのかもしれない。

「あの……なにか、お手伝いできることはありませんか？」

なにがなんでも、この人に（正しい意味で）抱いてもらわないと、女としての面目が立

たない。そんな気分になっていた。

今里が顔を上げて——ハッと何事かを思いついたようだった。

「あの……これからお願いすることは、けっして本番ではする必要はないからね。それだけは、わかっておいてほしいんだが……」

そう念を押してから、今里はとんでもないことを明美に求めた。

「その……口で、こいつをしゃぶってほしいんだ。フェラチオといって、ほんとうは心中立てをした男にしか許してはいけない——娼婦と客の間では、してはいけないことなんだけど……」

オシッコが出るところをしゃぶるなんて、とんでもない。そうは思ったけれど、就職先まで来て不合格の烙印を捺されて引き返すなんて、できない。自分の不名誉ではなく、弟の将来にもかかわる。そう覚悟を定めると——余計な知識が無いだけに、禁忌感を克服するのは容易たやすかった。

明美は布団の上に起き直って、今里の股間に顔を近寄せた。

男性の器官を生まれて初めて間近に眺めて——すごく単純な構造だと思った。密林の中にちんまりした丸太が転がっている。先端が丸まっていると思っていたが、よく見ると傘の開いていない松茸のような形をしている。松茸と違って、頂点には細長い小さな溝があった。そこがオシッコの出る穴なのだろう。そして、もう一点。松茸の土臭い匂いとは違って、ひどく生臭い。汗を搔いたときの腋の下の臭いに似ている。

「頼むよ」

今里が手を添えて丸太を斜めに起こした。

明美は覚悟を決めて口を開け、丸太をばくと啞えた。ちよつとしよつぱくて、舌に触れた感じは、空気が抜けた水風船を連想した。

「厚かましいお願いなんだけど……もつと、こう、なんていうか。ペロペロとしゃぶつてくれないか？」

毒を食らわば皿まで。そんな心境で、明美はふにやつとした肉棒に舌を這わせた。なんだか、すごく羞ずかしい。遠慮がちに頼まれると、いかにも二人でいけないことをしている。そんな気持ちになる。いっそのこと。もつと堂々と、図々しいくらいの勢いで命令してくれれば——しているんじゃないくて、させられているほうが、まだ羞ずかしくない。そんなふうと思う。

口中の肉棒は明美の屈折した思いとは関係なく、太く硬く長くなっていく。フニヤツとした感じがキュロンとした感じになって、さらにゴツゴツした感触に変わっていった。

（うわあ……?!）

明美は勃起という生理現象をまったく知らなかった。自分がそれを舐めたせいで短時間にこれだけの激変を引き起こしたのだと理解して、なんだか誇らしい気持ちになった。しかし、指の何倍（印象としては数十倍）も太くて長い物体が自分の股間に空いているらしい穴に突っ込まれると思うと……

（無理！ 絶対に無理！）

としか思えない。

「よし、いけるぞ」

今里が腰を引いて、あらためて明美を押し倒した。

「あ、あの……こんなの、わたしの中に、は、はいるんですか？」

尋ねる明美の声は引き攣っていた。

「ん？ ああ。だいじょうぶ。最初は痛いけど、我慢してくれ。二度目からはそんなに痛くないし、キミもだんだん気持ち良くなってくるから」

また萎えないうちに、今里は明美の脚を大きく開かせて、その間に腰を割り入れてくる。

もしも今里に処女を相手にした経験があったなら。もっと時間をかけて膣口をもみほぐすとか、腰の下に枕をあてがって挿入しやすい角度に調整するとか——とにかく時間をかけてあれこれと工夫をしていただろうが。玄人妓しか知らない二十五歳の青年にそれを求めるのは無理な注文ではあった。

明美は、熱くて太いなか股間の割れ目を押し開くのを感じた。そのつぎの瞬間。指で穿たれるのとは桁違いの鋭い激痛が股間に奔った。

「い、いいいい……!!」

痛いという叫びが言葉にならない。明美は布団を両手でつかんで、両脚を突っ張った。ずりつと、身体の下で布団が滑った。一瞬だけ痛みがやわらいで、すぐ前に倍する激痛が甦る。明美がずり上がって、それを今里が追いかけた結果だった。

それを何度か繰り返して、ついに今里が強引な手段に出た。

「おとなしくしないキミが悪いんだからな」

明美は足首をつかまれて、肩の向こう側まで脚を折り曲げられた。今里が上体を起こし気味にしたので、目の前にあった顔が遠のいた。

そして、股間から臍の上まで真つ二つに切り裂かれるような衝撃が背骨を貫いた。

「きいっ………！」

食いしばった歯の間から、くぐもった悲鳴が押し出される。

「痛い、痛い、痛い……やめて……」

ひと呼吸を置いて、弱々しく訴えた。声を出せるくらいに、痛みは軽くなっていた。訴えないではいられないほどの痛みが、股間にわだかまっていた。

「やったぞ。これで、明美ちゃんも一人前の女だ」

素人娘の処女を奪った感激に、今里の声がうわずっていた。

肩の上で畳に押しつけている明美の足首に両手を突っ張って、今里が抽挿を始める。

「痛いッ……痛い、痛い痛い痛い……」

今里が腰を動かすたびに、明美の中で激痛が律動した。しかし、貫かれた一瞬のことを思えば、すすり泣きながらも耐えられる痛みだった。

（そうか。これが、女になるということなんだ）

痛みに耐えながら、今里の言葉を内心で反芻して。しみじみとした思いが込み上げてきた。

すうっと、痛みが軽くなった。

今里が中腰になって抜去していた。血まみれの勃起を満足そうに見下ろしてから、枕元に置かれている桜紙で汚れを拭う。が、明美の股間はそのままに。

「もうちょっとだけ、我慢して……そうだ、これも知らないんだろ？」

座卓の上の盆から小さな紙包みを取り上げて、明美に見せた。

明美は首を横に振った。

「これが、コンドームというものだ。帽子とかゴムとか、そういう言い方もある」

紙包みから輪ゴムに膜を張ったような物を取り出して勃起の先端にかぶせ、輪ゴムを巻き下げていく。

「この先っぽの部分に精液が溜まる。それと、性病の予防にもなる」

明美がキョトンとしているのを見て、今里はイチからの性教育をしなければならなかった。男は射精することで性欲を満足させるとか、その精液が子宮まで届いて妊娠するとか。性器同士の接触で梅毒とか淋病とかの性病が伝染^{うつ}る。しかし戦後に抗生物質が発明されてからは、そんなに恐ろしい病気ではなくなっている。彼の知識もいい加減なものだったが、大筋は間違っていない。

明美は講釈を聞きながら、自分の無知を恥じていた。

「というわけで。今度は最後まで――射精するまで続けるよ」

いろんな体位を教えてあげようと言って、今里は明美を四つん這いにさせた。

（あ……これだったんだ）

背後からのしかかられて、二匹の犬がそういう姿で重なっていたのを思い出した。今里が言っていたように、最初に比べると痛みはずっと軽くなっていた。

しかし、今里は自身の欲望は抑えて（生娘に羞ずかしい所作をさせるといふ愉しみは貪って）、明美が上になるように要求した。

仰臥する今里をまたいで、自分の指で割れ目を広げながら、ゴムで包まれた勃起の上に腰を落としていく。今里と目が合って、突然に羞恥の感情が噴き上がった。SEXは羞ず

かしい行為なのだと、ようやくに明美は実感した。

さらには背面騎乗位まで仕込まれて。男の上で腰を振る仕種も教えられた。もともと、明美の覚えたての稚拙な技巧では男を射精に導くことはできず、最後は仰臥した明美が脚を開いて膝を立てるといふ、もともと基本的な体位で職業指導は終わつただけだ。

（だんだん痛くはなくなってきた。でも……）

ちつとも、気持ち良くなかなかつた。それを不満に思ったが、すぐに反省した。これは『お仕事』なのだ。畑仕事だつて、しんどい。ラヂオドラマだと、サラリーマンの仕事は農家よりもつらいらしい。いっぱい働いて汗みずくになつた肌を風に曝す爽快さもないし、収穫を積み上げて誇らしい気分にも浸ることもない。朝から晩まで机に向かつて帳面を付けたら、工場で延々と同じ部品を組み立てたり。それがどうしてお給料、つまりお金になるのか、社会科で教わつたけど、いまひとつ仕組がわからない。

それに比べたら。明美の『お仕事』は、ずっとわかりやすい。お客に自分の身体を使つたサービスをして、そのお礼をもらう。お祖母ちゃんの肩を叩いてお駄賃をもらうのと、根本的には同じだと思ふのだつた。

——明美は、自分が連れ込まれたのは木賃宿のたぐいだと思つていたが。共同風呂場はないという。そのかわり、隣の部屋との間にシャワー室があつた。そこで明美は、丹念に股間を洗つた。そして。壁に掛けてあつた鏡で（片脚を横に高く上げて壁に突つ張るといふ珍妙な格好で）生まれて初めて、自身の女性器を観察した。

（うへえ……？）というのが、明美の感想だつた。男性器に比べると、欧州情勢みたいに複雑怪奇（なぜか、国語の時間に教わつた）な外見だつた。割れ目から鶏冠のような肉が

はみ出ているし、その頂点に小さな突起も見えた。しかも、この鶏冠の奥に男性器を受け挿れる穴が隠れている。その位置を探ろうとしてみたが、指を挿れるとまだすこし痛いので、やめておいた。

少し出血が続いていたので、シャワーから出ると、今里に見られながらシュミーズだけの羞ずかしい姿でバッグの底から生理用品を取り出して、ゴム引きの生理ショーツに穿き替えた。こんな物を学校で男子生徒に見つかつたら、気の弱い子は泣き出すくらいにかわれるのだが――さすがに今里はオトナの分別をはたらかせてくれて、そつぽを向いて煙草を吸っていた。

二時間ほどで部屋を出て、来た道を引き返し、アーケード街をさらに奥まで進む。そして、やたらと入口ばかりが並んでいる一面にたどり着いた。建物の幅が狭かったり、間口を二つに分けてそれぞれに店を出している。

（お店……？）

売り物は並べられていない。提灯や垂れ幕、あるいは和洋折衷みたいな生け花が横に飾られていて、正面には綺麗な女性が座っている。その横に年輩の地味な女性が座って、通りすぎる男たちに手を振ったり声をかけている。

「口開けだよ、まっさらだよ」

「お兄さん。一発抜いてきなよ。お兄さんは様子がいいから二割引きだって、カレンも言ってるよ」

「こらあ。素通りするなよ」

ああそうか。正面に座っている女の人が『売り物』なんだと、さすがに明美も気づく。

通りの右も左も、そんな店ばかりがずらっと並んでいる。小さな旅館かと思うような地味な店もあれば、電飾看板が夕日と競り合っている店もあった。

そして突き当りに大きな建物が立ちはだかつていた。道は建物の手前で左右に分かれている。木造の二階建てで、まわりのどれよりも大きい。二階の欄干がくすんだ（古ぼけた？）朱色に塗られていて、間口ごとに立っている束柱には擬宝珠が施されている。ずいぶんと由緒ある旅館のようにも見えるのだが、一階は紛れもなく『お店』だった。広い間口が三つに分割されている。左端は、土産物屋でもパン屋でもおかしくない、現代的だが地味な店構え。まん中は大きな提灯とひととき大きな暖簾に囲まれて、威風堂々とか古式床しいといった形容がぴったり。そして右端の店は、両側に半裸のマネキン人形が飾られて洋画にでも出てきそうな派手派手しい飾り付け。てんでバラバラな三店だが、庇の下に掲げられた看板だけは同じ体裁の、長方形に二文字が縦に書かれた——ベニヤでもブリキでもない一枚物の板だった。

店の名は、左から『一新』『縁奇』『江楼』。

「格式つちや格式だが。昔の夢を忘れられない——おっと、こんなことを言っちゃ駄目だぞ」

看板の下の文字を左から右に読むと『新奇楼』。かつての遊郭の名前だと、今里が教えてくれた。

「上の文字はただの体裁だが、右のはコウロウじゃなくてエロだな」

店に客が揚がって、空になった展示場（顔見世という言葉をも明美は知らない）に新しい女性が座るところだったのだが——通りから丸見えだというのに、肌が透けて見えるもの

すごく短いスリッパしか身に着けていない。しかも、ノーパンらしい。

あらためて明美は、他の二つの店を女性を見比べた。『一新』は、B G 然とした簡素な洋装。胸をすこしはだけて、スカートから膝頭が覗いているけれど。まん中の『縁奇』は、柄が派手な和装。街を歩いていたら目立つだろうけど、華やかな宴席ならむしろふさわしい程度でしかない。

「三つの店の経営者は同じだ。女の子は日替わりで店を掛け持ちするそうだから——明美も、三日のうちにはエロい姿をお披露目するんだぜ」

呼び捨てにされて、明美はすこし嬉しくなった。初めてを（問答無用だったけれど）奉げた男性に『明美ちゃん』、まして『小島さん』なんて他人行儀に呼ばれたらむしろ悲しい。

「いつまでも突っ立ってちゃ、営業妨害だ。行こう」

三叉路を右へ折れて、建物に沿って裏口へまわった。こちらにもドアが三つ。しかし中にはいると、横長の土間になっていた。

「ごめんください。『即日採用社』の今里と申します。小島明美を連れてまいりました」
すぐに若い男が現われた。今里が差し出した大きな封筒を受け取って奥へ消えて、五分ほどで戻って来る。今里が封筒の中の書類を改めてから。

「では、小島明美をよろしく願います」

そして明美に向き直って。

「それじゃ、頑張れよ」

明美に声をかけて、そのまま裏口から出て行った。

しよせんは、就職斡旋の担当者。一時間前の出来事も、ただの職業訓練。そう割り切る

しかない明美だった。

接客見学

男の案内で、奥まった和室に通された。正面に神棚が飾られて、その下には引き出しが幾つもある長方形の木箱。田舎の裕福な家庭では稀に生き残っている長火鉢だった。その後ろに座っているのは、長火鉢にはおよそ似合わないアロハシャツ姿の中年男。その横に、青藍無地柄の着物をシャンと着付けた四十くらいの女性。

「こちらにいらつしやるのが、樓主さんと女将さん。店の者はオトウサン、オカアサンと呼ばせてもらっている」

「失礼します」

部屋に入って正座して、きちんと挨拶をする明美。

「ここで働かせていただくことになった、小島明美です。よろしくお願いします」

「うんうん。まだ未通女おほこなんだってね。よくぞ決心したものだ」

「あの……いえ……」

いきなり露骨なことを言われて、戸惑う明美だったが。漢字は知らないがオボコという言葉は知っている。また職業指導をされたらたまらないといった思惑もはたらいて、正直に打ち明けた。

「さきほど、幹旋の人からいろいろと体験させてもらいました。ですから……」

「ヘッ。手の早い野郎だな」

明美を案内してきた男が、これは廊下に座ったまま半畳を入れた。その背中をぺチンと叩いた者がいた。

「あんたがとろくさいだけよ。女に恥をかかせやがって」

セーラー服姿の少女だった。座敷に揚がりこんで、女将の横に座った。

「初めまして。あたいは、ここの娘——と言うと、誤解されるわね。この夫婦の子供」

「つまり、お嬢さんてことだ。みんな、歳には関係なくオネエサンと呼ばせてもらっている」

若い男が説明した。

「もつとも、別の意味でもここの娘だけだね。あたいの源氏名はリイ。ほんとと理非知らずの理非だけど、呼びづらいでしょ」

「え、あの……はい」

明美は頭が混乱して、挨拶も忘れている。

これは、朋輩から聞いたり本人から教えられたりして追々にわかってくることだが。この少女の本名は大和田勝江。ひとり娘で、いずれは婿を取ってこの店を継ぐ。しかし、娼売経験のない若い女が、すれっからしの妓どもを仕切り、ときとしては愚連隊めいた連中を向こうにまわして店を張っていけるはずもない——とは、勝江自身が言い出したことで。学業の合間に顔見世にも座っている。ちなみに、婿の目星もついていた。というか、既成事実になっている。勝江が自分のほうから夜這いを掛けた、この店に住み込んでいたただひとりの男性従業員である下村雄二。昔の遊郭でいうところの牛太郎——早い話が、明美

を案内した男だった。

「ひと通りの説明は聞いていると思うが、キッチリと店の仕組を説明しておきます」

楼主が、あらためて明美と向き合った。

「勤務時間は、平日が午後四時から深夜ゼロ時まで。旗日と土日は正午からの十二時間。ぶつ通しで勤めてもいいし、たとえば六時から十時までというふうに区切ってもかまいません。休みも自分の都合で決めなさい。まあ、人の遣り繰りで希望どおりにできないことも、たまにはあります」

生理の三、四日と合わせて、月に十日くらいは休む者が多い。住み込みで働いている者は平均より多く働いているし、通いの者は月の半分以上を休む者もある。もちろん、休めば稼ぎにならない。明美のように住み込む者は、寮費が持ち出しになる。

といつても、寮費は知れている。二日も働けば一か月分になる。

そして賃金は出来高の日払い。

他の店（有象無象という言い方を楼主はした）では十五分単位で四百円だが、ここは最低でも三十分。それで千円。ただし延長は十五分につき四百円。接客は着衣（下脱ぎ）が基本だが、オールヌードは三百円増し。接客の内容を詳しくいうと。

「女の穴を貸すくらいに思っていれば、どうということもない」

キスとか変態的な要求は拒否しないと、他の真面目な子の迷惑になる。

変態的な要求と曖昧に言われても——肛門でSEXしたいとか、女の子のオシッコを飲みたいなんて変態がいるとは、夢にも思わない明美だった。

「今言った金額の半分が、従業員の取り分です。実際には、そこから諸経費を一日三百円

天引きして、納税積立に一割をまわします。前借がある間、今言った手取の六割を返済に充ててもらいます」

「前借……ですか？」

支度金として渡した十万円が、それだという。きちんと雇用契約書に書いてあると説明されたが——小さな字でビッシリ書かれている書類は、実は詳しく読んでいない。

「今の説明をキチンと法律用語で書いてあるのが、この書類です。寝煙草で火事を出したり、契約期間の三年が経たないうちに辞めたりしなければ、問題はいいです」

なんて言われたら、ますます読む気はなくなる。この時代、正社員といえども辞令だけで雇われるのが常識だったから、逆に契約書まで書かされるとなると裏を勘ぐるべきだったかもしれないが、弁護士でもないかぎり、そこまで疑わない。

だいいち。十万円の『前借』を返済しているあいだでも破格の高収入なのだから、騙されたという気にはならない。

「三十分の接客をして、跡始末と休憩とで十分。それから顔見世が——キミみたいに若くてかわいい子なら、せいぜい五分かな」

四十五分で一回転だから、八時間なら十人。割り戻しは四千二百円にもなる。前借分を返済しても千六百円の日払い。大工のように手に職を持った人の二倍以上の日当だ。月に二十日働けば前借はたった二か月で完済する。

もちろん、それは休む間もなく客が着いたときの話だが、お茶を挽くなんて言葉を楼主が口にするはずもなかった。

「長々と話したが。得心してもらえたかね」

働いた日は千六百円。前借を返済後は四千円にもなる。それ以外の内容は、明美の頭を素通りしていた。

「はい。よろしく願います」

明美は、もう一度頭を下げた。

「それじゃあ、源氏名を決めようね」

女将が立って、壁に掛けてある二十枚ほどの木札を長火鉢の蓋の上に並べた。

「娼売をしているとき——だけでなく、この街にいる間は、小島明美という名前は忘れるんだよ。他人に本名を知られると、面倒に巻き込まれかねないからね」

女将の言葉が、いまひとつ理解できなかった。売春が法律に触れることだとはわきまえている。けれど——女将が堂々と就職説明会に乗り込んだきたなど前代未聞だったが。誰某は親が借金の連帯保証人になったばかりに身売りしたとか、短大の家政科まで約束されて県会議員のお妾さんになったとか、テレビの『のど自慢』に出て芸能事務所にスカウトされたとか。そういった噂はときおり聞こえてくる。都会は知らず、明美が住んでいた地方ではその程度の道徳観であつたし、売春婦も芸能人も生産に携わらず身体ひとつで稼ぐという意味では同列視されていたのだった。

（そうか。芸能人と同じなんだ）

そう考えると、気分が浮き立たないでもなかったのだが。木札に書かれた『源氏名』を見て、首をかしげた。

笠船、揚羽、松葉、芙蓉、燕、菊、しがらみ柵、かなえ鼎、流鏑馬、雁が音、一文字……。

女の子にふさわしい名前といえ、松葉、芙蓉、菊くらいだろうか。笠船とか一文字は、

どこかのお土産饅頭みたい。流鏑馬は神事にあつたんじゃないかしら。

それぞれが体位四十八手に由来する名前だとは、明美はもちろん、よほどの数寄者でもないかぎりわからないだろう。

明美は食堂で迷ったのとは逆の意味で迷った挙句『揚羽』を選んだ。アゲハチョウの『揚羽』なら、平凡な『菊』なんかより、ずっと可愛らしい。

「それじゃ、たつた今から、おまえは揚羽だよ。もちろん、税金とかのお役所関係に出す書類は本名だけだね」

「はい、よろしく願います。オトウサン、オカアサン」

そうやってこの世界の言葉を使うと、なんだか一人前になったみたいな気分だった。

奥座敷から裏口へ戻る途中で、廊下が十字路のように分かれている。その左右が女性の住込従業員たちの部屋だ。表から向かって右は四畳半の個室。かつては売れっ娘たちの部屋だった。左は下級女郎たちの雑魚寝部屋を区切った三畳ひと間。今は稼ぎではなく在籍の長さに応じて割り振られている。揚羽こと明美は、いちばん隅っこの三畳部屋をあてがわれた。

「荷物を片したら、朋輩への挨拶に引き回してやるよ」

三つに分かれているのは顔見世の場だけでなく、裏手の控室も各々に区切られている。雄二に連れられてその三つをまわり、先輩たちに挨拶をした。明美の感覚では全員がセンパイなのだが、この世界では年齢も経験も関係なく、同僚を意味するホウバイというのだと教えられた。

この日に出勤していたのは、洋装の『一新』が十年選手の本駒とトランジスタグラマーの鳴門。かつては遣手婆と呼ばれていた客引き（今では営業係というのだと、これも雄二に教えられた）がカヨ。遊郭の雰囲気を色濃く残している『縁奇』が、和装だから目立たないものの、「鳴門より三つ若くて目方は二割増し」の茶臼と、これまでは最年少だった花菱。営業係がミツコ。エロではなく『江楼』はアパートに二人で一部屋を借りている浮橋と牡丹。歳だけなら本駒の上をいく石清水。営業係はマツ。その他に通いで網代と巴がいて、夜になってから出勤の予定。住込みにはもう一人、棕鳥がいるが生理休み。彼女の三畳部屋にも挨拶に寄ったが、窓にレースのカーテンを掛けて壁には西洋の古城を描いた絵画が額に入れて飾られていた。少女漫画のヒロインみたいな美少女なのだが、なんとなく線が細い印象を受けた。

その他にも、月に一週間だけ働いている窓月と日曜日だけのひょしゃ鴨がいるという。

挨拶回りが終わると、雄二は勝江とバトンタッチした。

「お女郎と牛太郎がひとつ部屋にこもっちゃあ、さすがに拙いからな」
「余計なことを言わなくていい」

勝江が不機嫌そうな言葉を雄二にぶつけた。が、明美を振り返ったときは悪戯っぽい表情に変わっていた。

「初体験はすませたと言ってたけど、男と女が普通にすることを体験しただけでしょ。お客を迎えてから送り出すまで、いろいろと恋愛とは違うことも多いよ。百聞は一見に如かずでいきましょ」

勝江は明美の手を引いて『江楼』の控室に連れて行った。顔見世の場との仕切り壁には

何方所か小さな窓があつて、表から見ると花束やポスターで巧妙に隠されている。

すぐに男が店にはいつてきて、遣手婆と短く言葉を交わしてからうなずいた。

男が靴を脱いで揚がると、ビキニ水着姿の若い女性（浮橋だと、勝江が小声で教えてくれた）がしなだれかかつて、横の階段から二階へ姿を消した。女が男に買われたというよりも、女が男を捕まえた。そんなふうに明美には見えた。

二人が姿を消すと三十秒もしないうちに、髪を短く切つてボーイッシュな印象の女性が現われたのだけれど。

「ま……」

驚きの声をあげかけて、勝江に口をふさがれた。浮橋よりすこし細身の牡丹は、男物の海水パンツを穿いていたのだ。横座りになって、小ぶりの乳房を片手で隠した。

「さっきの浮橋と夫婦ゴッコをしてるのさ。あいつがタチで、浮橋はネコ。二人とも、男は仕事と割り切ってるのね」

（……………？）

勝江の言葉の半分もわからなかったが、夫婦ゴッコというのが幼児のオママゴトとは違つていらしいと、それはいつそうひそめた声から見当がついた。といつても、その二人がどんなふうに夫婦ゴッコをしているのかまでは想像の埒外だったけれど。

三分ほどで浮橋だけが階段を下りてきた。

「はい、三十分。それとオールヌード」

五百円札三枚を遣手婆のマツに渡して、百円札二枚を受け取る。部屋の隅にある棚から茶菓子を取り出して、目覚まし時計と一緒に盆に乗せた。それを置台に戻して。控室の入

口まで引つ込む。

棚から小さなチューブを取り出すと中身を指に押し出して、明美が見ているのもかわらず股間をこねくった。

「ゼリーだよ。いちいち自前で濡らしてちや疲れるからね」

最初のとき今里の指でくじられて、なんだか妙に湿っていたなと思ひ出す。

「ゴム無しでやらせろって、ほんとにしつこいんだから」

勝江に愚痴をこぼしてから、浮橋は階段を上がっていった。

「あの……ゴム無しって、赤ちゃんがでちやいますよね？」

「ん？ まあ、方法はあるけどな。後で教えてあげる」

料金に定めてはいないが、自分の裁量でゴム無しを許す従業員も何人かはいると、勝江は言う。相場は千円から三千円。店には内緒ということで、全額が従業員の取り分になる。

「妊娠は避けられても病気はねえ。進行すれば見分けがつくんだけど、本人に症状が出ない場合もあるし。そうなると店の信用問題だから、完治するまで就業禁止。長い目で見ると本人も店も大損だよ」

だから、お金に釣られてではなくて、馴染になつて根負けしてという場合が多い。特飲街組合の申し合わせで男子従業員が客と接触することは禁じられているから、いざとなつたら怖いお兄さんが出てくる——わけにもいかない。それが、この街を警察が黙認している理由のひとつでもあった。

客に押し切られて——明美は、まっさきに椋鳥の顔を思い浮かべていた。

「じゃ、つぎ行こうか。最初から裸も同然じゃ、接客の手順もあったものじゃないものね」

二人は裏へ戻って、こちらからはひとつきりの階段で二階へ上がった。

「つぎは雲仙にお願いね」

勝江が『縁奇』の階段から身を乗り出して遣手婆に声をかけた。

二階は十文字の廊下に沿って、十二部屋が配されている。そのうち実際に使っているのは九部屋。一店舗あたり三部屋で、有象無象の店よりも部屋数は多い。それでも余った三つの部屋は控室と同じように覗き窓を設けて、新人の研修に活用している。

「他にも使い道はあるんだけど……」

隣の部屋にひとの気配がして、勝江が人差し指を立てて唇に当てた。小窓を指差して、覗けと身振りで伝える。

紗の飾り布の向こうで、客が六畳間の座敷にはいつてくる。その後から花菱。襖を閉めて三つ指を突いて。

「ようこそ、いらつしやいました」

それから、立っている客にしなだれかかって座らせて。

「ちよんの間で遊びます？ それとも、延長なさいますか。最初から延長に決めると四百円が三百円になって、お得ですよ」

花菱は客の横に密着して座って、太腿に手を置いている。夫婦でさえもそんな甘えた仕種は——すくなくとも、明美は自分の両親がそうしている姿を思い描くことは困難だった。

「ちよんの間たつて、ここは三十分だろ。じゅうぶんだよ」

「はい。でしたら、お会計を先に」

両手を重ねて客の前に突き出して。客が財布を取り出すあいだは、その手を膝の上に置

いていた。

「はい、たしかにいただきました。それじゃ、お洋服を脱いで待っててくださいね」

花菱は座敷を出て。階段を下りて遣手婆にお金を渡して、茶菓子と目覚まし時計を持って帰ってくる。そのあいだに、客はパンツ一枚になって、部屋の奥の方に延べてある布団をはぐって、肘枕で横臥していた。

「あら、ま。気が早い」

「そうじゃないよ。こんなふうに女の子を見上げるなんて、そうそうできないからね」

「やだあ。いつも、布団の上の女の子を見下ろしてるんだ」

くくつと小さく笑って。花菱は客の枕元に突っ立って尋ねる。

「もつと眺めていますか？ それとも、やっちゃう？」

露骨な言い方に、むしろ明美は感心した。いちいち羞ずかしがっているのは、娼売にならないのだろう。

「両方だね。そこで、昆布巻きを作ってくれよ」

昆布巻きとは、和服を脱ぐことなく裾をたくし上げていたことをいう。帯を巻いたままなのを、料理の昆布巻きに見立てての謂である。

「やだあ。エッチ……」

花菱は笑いを含んだまま、腰巻もろとも裾をまくり上げた。下半身を剥き出しにして、着物の裾を帯に挟み込んだ。

「これで、いい？」

「うむ……絶景かな、絶景かな」

客が身を起こして、顔を下半身に近づける。顎を突き出すようにして股間を舐めようとしたが。

「そんなのは、駄目」

駄目と言いながら、一瞬腰を突き出して客の顔に押しつけた。

「そういう変態的なことは、しないの。あちき、これでも身持ちは固いんだから」

お金のために股を開いて身持ちもなにもあったものじゃないとは思うが——今里がフェラチオを要求したときのことを思い出すと、花菱の言葉も納得できるような気がした。

花菱は枕元の小簾からゴムを取り出して。

「パンツも脱いでね。これ、着けたげる」

すでに鋭角に聳え立っている男性器に、くるとゴムを装着した。

実はサービスではないのだと、あとで勝江が教えてくれた。ちよっときつく握ったり乱暴にしごいたりして、男が痛がるようなら病氣持ちを疑うべきで。絶対に性器や唇を触らせてはいけないし、跡始末のときも手指までアルコールで消毒する。追い返すという選択肢を、勝江は示さなかった。そうしようとしてもトラブルになるのはわかりきっている。

ゴムを着け終えると、花菱は男の横で四つん這いになった。

「昆布巻きなら、なんといってもこれよね」

「へええ。ワンワン・スタイルは変態じゃないんだ」

からかいながら、客は花菱の挑発に乗った。膝立ちになって花菱の腰をつかむとグイと腰を突き出して——簡単に挿入を果たした。

客がゆっくりと腰を前後に揺らし始めた。狭い穴に自身の肉体の一部が出入りする感触

を愉しんでいると、明美にもわかる動かし方だった。

「上手い人だと、あれで女をジワジワと追い上げていくんだけどね」

前戯も無しに挿入したから、気を遣らすのは三十分でも足りないだろうと、勝江が耳打ちする。

気を遣うという感覚がわからない明美だが。今里が射精するまで、そんなにはかかっていなかったと思い出す。男の人は簡単に気持ち良くなれて、女は痛いのを我慢しなければならぬ。だから、男から女にお金を払うのだと、そういうふうに理解した。

五分もしないうちに、男の動きが激しくなった。上体を起こし気味にして、腰を激しく浮橋の尻に打ちつける。

パンパン、パンパン……

乾いた音が、はつきり聞こえる。

「あんあん、あんあん……」

男の動きに合わせて、花菱が喘ぎ声を漏らす。鼻に抜けるような声だった。

（今里さんの言ってた「だんだん気持ち良くなってくる」というのは、これだろうか）

そう思ったとき、花菱が顔をねじって明美のほうを見て、ペロツと舌を出した。彼女は、自分が見られていることを知っている。

「お芝居でいいから、男に挿れられたら善がつてみせるの」

勝江が耳元でささやいた。

そうか。花菱さんみたいなベテランでも、SEXで気持ち良くなるのは難しいんだ——明美はまたひとつ、間違った性知識を重ねてしまった。

パンパン、パンパン……

「あんあん、ああんっ……」

男の動きがいつそう激しくなり、花菱の喘ぎ声も切迫して聞こえる。そして。

「うっ……」

客は膝立ちのまま伸びあがるような姿勢で動きを止めて、腰をぶるると震わせた。

「若いだけあって、締まりがきついや」

照れ笑いみたいな表情で腰を落とした。

花菱が枕元の桜紙を手にとって、四つん這いのまま股間を拭った。それから客に向き直って男性器を桜紙に包んでからゴムを抜き取った。汚れを手早く拭き取って、ゴムの端を結んで屑籠に捨てた。

「すこし時間が余ってるわ。おビールでも飲む？」

「どうせ、おかきくらいしかないんだろ。赤提灯で飲むわ。ガソリン入れて、また戻ってくるかな」

言っているうちにも、男は身支度を整えている。花菱も上着を着せかけたりして甲斐甲斐しく手伝う（ふりをしているだけだと、明美にもわかった）。

男が先に立って部屋を出て、花菱は後ろからついていく。部屋にはいったときのようないちやつきはない。

「あとは『素敵だったわ』とか『またいらしてね』と笑顔で送り出しておしまい」

男性従業員らしい中年の男が座敷にはいつてきて後片付けを始めたところで、二人は裏

の階段から下へおりた。

「最初からきっちりとはできないだろうけど、それはかまわない。できるだけ若い子を集めてるうちでも、揚羽は断トツに若いんだから。最初のうちは、ヘマをしても初々しいとか思ってくれるさ。それに甘えてちゃ駄目だけどね」

「はい。頑張ります。いろいろと教えてくださって、ありがとうございました」

自分の部屋に戻って。明美は一時間ほども放心していた。これもそれもあれもどれも、一度に詰め込まれて頭がパンクしそうだった。身体を売るといいう一大決心は、この新しい世界の中では取るに足りないことのようにさえ思えた。

不評判

翌日から明美は飲食店（？）の仲居として働き始めた。

「最初は無難に『一新』に出てもらおうかしら」

普通の服装で、ボタンをはずすとスカートを短く詰めるとか、ちよつとだけお色気を出す、ろくに着付けもできない和装や裸同然の姿を通行人に曝すよりはとつつきやすい。しかし、別の羞恥が待っていた。

「せっかくセーラー服を持っているんだから、それにしなさい」

「警察の目とか面倒なんじゃないか」

楼主は難色を示したのだが。

「もう卒業したんだから、問題はないわよ。うちらは素っ堅気なんだ。筋者は寄せ付けないし、クスリも御法度。昔みたいに拐かどわかしてきた子を買ったりもしてないからね」

所轄署だけでなく上層部にまで盆暮の付け届けを欠かさないのが、一番の理由なのだが。それはともかく。

入学のときにはダブダブだった制服も、すっかりツンツルテンになっているし、擦れて黒光りならまだしも、あちこちに継ぎが当たっている。それでも在学中なら平気でお葬式でも結婚式でも着て行けたけど、『社会人』としてはあまりに惨めだった。

それでも、女将の目論見は図に当たったようだった。

明美が顔見世に座って十秒と経たないうちに、二人の男が足を止めたのだった。

「この娘は先日卒業したばかり。正真正銘、これが初見世だよ。しかも、まだ男は一人しか知らないときてる」

指導を兼ねて、遣手婆の席には女将が座っていた。その口上を聞きつけてさらに三人が加わり、狭い店の前で押しくらまんじゅうが始まるありさま。

「よし、こうなりや競り市だ。ちよんの間三十分千円だけど、二千円でもいいってやつだけ残りな」

残るどころか、五人が十人に膨れ上がる。

「三千円でもいいって粹人は……いるねえ。四千円なら、どうだい」

「一万円！」

押しくらまんじゅうの中から大声があがった。大卒の初任給が一万円ちよつとの時代である。さすがに、ざわめきがピタツと止まった。

「おや。どこのお大尽様かね。決まりだ。皆さんも文句はないね」

人垣を掻き分けて明美——いや揚羽の前に立ったのは、ニッカボッカ姿の若い男だった。同じような姿の若者が三人、人垣の向こうに見える。鳶職の兄貴分が弟分たちに恰好いいところを見せようといったところか。

「おいよ」

尻ポケットの財布から一万円札を抜き出して女将に渡す。

女将は紙幣を外の明かりにかざして透かしを確かめてから、胸元にしまい込んだ。

「んじや、三十分だったな」

「いえ、延長されても……」

「そりやあ、ないぜ。二番手でも五千円は張り込む覚悟を決めてんだからな」

同じような声が数人からあがった。

「そういうことですので、三十分でお願いしますよ」

客に愛想笑いをしてから、明美に耳打ちする。

「オールヌードでもキスでも、求められたらサービスしな。まあ、ゴム無しだけは御法度だけどね」

明美は、いきなりのお金に驚愕冷めやらぬまま、ぼんやりとうなずいた。

「すっかりおし。お客さんは遊び慣れてないみたいだから、あんたが仕切るんだよ」

それにも曖昧にうなずいて、明美は立ち上がった。なんだか雲を踏んでいるみたいだった。

「揚羽……」

女将に手を引かれて、控室まで戻る。

「ゼリーを塗つとかないと痛いよ。そのうち、要らなくなるだろうけどさ」

勝江の差し出す小さなチューブを受け取って、絞り出したゼリーを指に取ると、自分で割れ目の内側に塗り込んだ。

「もつと奥まで塗りなさい」

スカートをたくし上げパンツの中に突っ込んだ指の動きを見て、女将がアドバイスする。指で穴を探り当てて——それだけで、すこし痛かった。けれど、頭がシャキツとした。いよいよ『お仕事』なのだ。

顔見世の間に待たせていた客にしなだれかかる——というよりも、しがみつく。

「それじゃ、こちらへ……」

落ち着きを取り戻したつもりだったが、まだ足は雲を踏んでいるようだった。女将が気を利かして茶菓と目覚まし時計を盆に乗せて、二人の後から座敷までついて来てくれた。

客を部屋に揚げて昨日学んだとおりに入口で正座する明美。の横に、女将も並んだ。

「この妓を水揚げしていただき、まことにありがとうございます。なにしろ、まったく初めてのことですので、至らぬ点多々ございましょうが、そこはなにとぞご勘弁のほどをお願いします」

女将が目覚まし時計を三十分後にセットしてから立ち去った。

（そうだ。『お仕事』をしなくちゃ）

明美は立って、客の斜め横で向かい合う。

「お洋服を脱いでください」

「ん……それよりも、キミを脱がしていいかな？」

いきなり、昨日の『お手本』とは違う展開に戸惑う明美。これも、オカアサンの言うサ
ービスかなと。

「……はい」

客が正面から迫ってきて。スカーフを抜き取った。そこで、指がセーラー服の上をさま
よう。

「ああ、これか」

指が左脇のチャックを探り当てて引き下ろした。そして、また戸惑う。

「あの……胸当てをはずしてから上に引き抜くんです」

胸当てのホックは、明美が自分ではずした。客が裾を上に取り上げようとするので。

「襟の後ろのほうを持って、まっすぐに引き上げてください」

ふええ……と、客が嘆息した。

「洋画みたいに恰好良くはいかねえな。なんだか破きそうで怖いや。やっぱり、自分で脱
いでくれよ」

「はい……」

このお客さんくらいの歳なら、この先ほ、んもの、のセーラー服を着た女の子を脱がすこと
もあるんじゃないかなと考えて、ゆっくり動作のひとつづつが見えやすいように脱いだ。
スカートは脇のホックをはずしてチャックを下げれば、勝手に脱げる。シュミーズは頭か
ら引き抜いて。ブラジャーは後ろ向きになってホックのはずし方を実演して。

ここで、明美は勝江に感謝した。どうせ先に脱ぐのだからと、あまり頓着せずに手持ち

の中では新しいズロースを選んだのだが。

「お客に見せるんだから、もっと色気のあるのにしなさい。といっても、女学生の清楚さを売りにするんだから……」

新品のパンツをくれたのだった。パンティと呼ぶほどエロチックでもないし、ズロースみたいに野暮ったくもない——水色の横縞で、股割りは浅いV字形をしていて、お尻の割れ目もぎりぎり隠れるウエストライン。

だから、安心してパンツ一枚の姿で布団に横たわれた。くたびれたズロースだったら、それを見られるのとオールヌードになると、どっちが羞ずかしくないか、お客の前で悩むところだった。

もちろん、パンツ一枚の裸身を男の目に曝すのもじゅうぶんに羞ずかしい。『職業指導』のときの仕種が自然に出て、両手で顔をおおった。

「あの……どうしたらいいか、よくわからないので……お兄さんの好きにしてください」
言ってから、しまったと思った。客は着衣のまま。当然、ゴムは着けていない。もしも、このまま挿れようとしてきたら——ちゃんと、お願いできるだろうか。

それは杞憂に終わった。

客は映画のコマ送りみたいな速さで服を脱いだのだが、パンツひとつになると手を止めて、明美に背を向けてコソコソと形容したくなるような仕種で最後の一枚をずり下ろした。そして、後ろ向きのまま枕元までにじり寄るとゴムの包みを手に取って、やはりコソコソと装着したのだった。

自分で着けるのが当然といったすれっからしの立ちんぼばかりを相手にしてきたのだろ

う——とは、明美の思い及ぶところではない。歳下のセーラー服を着た少女に、あるいは学生時代の初恋の相手を重ねていたのかもしれない、とも。

明美におおいかぶさってからは、俄然動きが性急になった。明美の視線が自分の下半身に向けられていないと確信したからだろう。

指で割れ目を通って、深々と突き挿れた。

「痛い……」

ビクツと指が引き抜かれた。

「ええっ……？ まさか、初めてじゃ？」

客の動揺が、明美にもわかった。

「まだ一回しか経験がないんです。でも、そのときは身体が裂けるんじゃないかと思ったくらい痛かったけど……今のは、そんなに痛くなかったです。我慢しますから……挿れてください」

「そうか。じゃあ、ごめんよ」

おっかなびっくりといった状態で、指が淫裂を穿った。

明美は客を委縮させないよう、治りかけの傷口を引っ搔かれる痛みには耐えている。実際、不意打ちでなければじゅうぶん我慢できる痛さだった。

指は中をあちこちとまさぐって膣口を探し当て、そこにも押し入ってきた。

「んん……？」

客が指を引き抜いて、親指の腹とこすりあわせる。

「なんだ。ちゃんと感じてるじゃないか」

濡れているイコール感じている。男にありがちな勘違いだった。しかも、ゼリーを塗り込めるところは見ていない。

「それじゃ、いくぜ」

明美の脚を大きく左右に割り広げて、その中に腰を落とし込む。両肘で体重を支えながら、腰をずり上げるようにして亀頭を淫裂にめり込ませて――ずぐうっと一気に貫いた。

「いいっ……」

呻き声が出てしまった。最初に比べると楽だったが、痛いことに変わりはなかった。

さらに、ずぬううっと押し入ってきて。性急な抽挿が始まった。

（く……）

我慢できる痛みだったが、我慢しなければならぬ行為ではあった。そして、こらえようとせば思うほど、痛みが意識の中心に居座る。善がる演技を忘れて、明美は苦行が終わるのを待った。

それは、すぐに訪れた。客の動きが止まって。ずるりと抜去される感覚が股間にあった。

「締め付けはすごいが、どうにも面白くねえな」

客は自分でゴムを抜き取って、すっかり萎えた淫茎を桜紙で拭った。ゴムとひとまとめに丸めて屑籠に放り込むと、そそくさと身支度を始めた。

客の雰囲気から、なにかしらが不首尾に終わったと、明美も気づいていた。演技をするとか客の脱ぎ着を手伝うとか思い出したが、もう遅い。せめてもと、布団をはずして正座した。

「行き届かなくてごめんなさい」

頭を下げると、なぜか涙がにじんだ。

「いや、俺も慣れてなくてさ……」

もももごと返して。座敷から出て行く。

「あ、待ってください」

見送りをしなければと思ったが、まさか裸で下へ行くわけにもいかない。跡始末もそこそこに、シュミーズは省略してセーラー服とスカートだけを身にまとい階段を下りた。ところを、女将に控室へ引き込まれた。

「しくじったね。お客はなにも言わなかったけど、埒を明けたって顔じゃなかったよ。時間も短かったから、半金は返しておいた」

一時間ほど休んで気を落ち着けると女将が言う。順番待ちの客にもそう告げて、とりあえず追い返したそうだ。

「わっちじや話しづらいこともあるだろうから、勝江が相談に乗ってやりな」

勝江にともなわれて、明美は自分の部屋へ戻った。

「要するに緊張のし過ぎだね」

勝江の断定に、明美はうなずくしかない。なにしろ、隣の座敷から一部始終を覗いていたというのだから。

「そりゃ、まあね。お嫁に行くまでは清い身体でいなさいって、ずっと純潔教育を受けてきたんだから、身体を売ってお金を稼ぐなんて、とんでもないことに思えるだろうけど」
性欲は食欲や睡眠欲と同じだと、勝江は言う。食欲はものを食べない限り満たされることとがない。性欲だつて同じだ。いちばん自然な性欲の満たし方は、男と女がまぐわ媾合うことだ。

相手がいない男性に女性が身体を提供するのは、料理を作れない男性に一膳飯屋が食事を提供するのと同じではないか。

「だから——威張る必要もないけど、もつと気楽に構えてりやいの」

なるほどと思うのだが。なにか違うような気もする。食事も睡眠も大っぴらにできるのに、SEXだけは秘め事とされている。

そう反発する一方で。食事とSEXに共通する点にも気づいた。赤ちゃんは、いきなり固形食を食べられない。自分には苦いだけのビールを、オトナはすぐおいしそうに飲む。訓練なのか、好みが変わるのか。だったら……

「今里さん、わたしに職業指導してくれた人ですけど。女の人もだんだん気持ち良くなるって、言っていました。でも、まだつらい——少し痛いだけなんです。どうしたら、気持ち良くなれるんでしょうか？」

むぶつと、勝江がしゃっくりのような息をした。しばらく宙に目を彷徨わせて。

「わたし、演技でもいいから善がれって言ったでしょ。覚えてる？」

「はい。つまり、ほんとうは気持ち良くないんですか？」

はああと、勝江が溜め息を吐いた。

「ちよつと待ってて」

中座して、すぐにコーラの瓶を三つ提げて戻ってきた。一本は空だった。明美に向き合って、スカートで胡座をかく。

「やっぱりねえ。こういうことを話すのは気恥ずかしいんだよね。あ、これ飲んで。あたいの奢りだから」

勝江が女だてらにラッパ飲みする。のを、明美も真似た。サイダーと違って、ひどく薬品臭かった。

勝江は煙草を取り出してマッチで火を点ける。ひとくち吸って、ケホケホとむせた。

「気持ちいいたって、段階があるわね。くすぐったいけど、ちよつと気持ちいいかなってあたりから、もうなにも考えられない、身体じゅうが快感の塊りになって最後には破裂しちゃうような凄まじいとこまで。それも、人それぞれ。結婚して何年経っても感じない人もいるし、ひと月かそこらでオーガズム、快感の絶頂ね、そこまで達する人もいる。揚羽は、さっきが二回目でしょ。すこしくらい痛くてあたりまえね」

ひと息にしゃべってから、ろくに吸っていない煙草を空き瓶に捨てた。

「それとね。先回りして忠告しとくけど。お客を相手にオーガズムを感じてちや、仕事にならないよ。男は出してスッキリだけど、女は十分も二十分も夢見心地が続く。それに体力もすぐ消耗するしね」

「はあ……」

たぶん、雄二さんにしても女将さんにしても、似たようなことを言うのだろうと、明美は思う。けれど、勝江の言葉はストンと胸に落ちた。歳が近いせいなのか、同じ『お仕事』をしている先輩だからなのか。

「追々に慣れてくるわよ。今は痛くてもつらくても我慢しなさい。と言っても……」

勝江はまた溜め息を吐いて、新しい煙草に火を点けた。

「あたいだって、この仕事を始めるまでに知っていたのは一人だけだったけど。そうねえ……三回はしてたね」

指折って数えて。

「それにこういう環境で育って馴染んでいたし、初体験の年齢だって揚羽よりひとつ上だったから。あたいの経験が、まんま揚羽に通じるとも思えないけど」

「そんなことないです。すごく参考になりました。今度は、お客さんに喜んでもらえるよう頑張ります」

とは決意したのだけれど。

気を取り直して顔見世に出ると、すでに三人の客が待っていた。

「初日のご祝儀を含めて、三十分で二千元。順番はジャンケンで決めとくれ」

競りにかけて値を吊り上げるのは得策でないと、女将は判断したのだろう。規定の料金を守らないと、不人気な妓の場合は値下げ交渉を拒絶しづらくなる。また、暴利を貪っていると同業者に思われたりしたら店の立場が悪くなる。明美自身だって、朋輩にやっかまれかねない。

ジャンケンに勝ったのは、ジャンパー姿の遊び人ふうの男だった。といっても明美には、背広を着てネクタイを締めていない男は、みんな遊び人に見えるのだけど。

（この人なら、うまくリードしてくれるかな）

（遊び慣れてるんだらうから、他の誰かと比べて笑われないようにしなくちゃ）

そんな相反する気持ちで二人目の客に着いたのだった。今度は、女将もついてこなかった。

座敷での挨拶からプレイ時間の確認と代金の授受までは無難にこなした。胸をドキドキ

させながらゴムもかぶせた。

そして布団に仰臥して。顔を隠すのはやっぱり失礼な気もして、無理に笑顔を浮かべた（つもりだった）。

「あの……どうぞ」

「お、おう……」

明美が脚を開いても、すぐにはのしかかってこなかった。

「おまえさん、ほんとに慣れてねえな」

客は腕を明美の膝をつかんで山形に折り曲げた。腰を浮かすように言って、下に枕をあてがった。そうして、あらためて大きく開脚させた。しげしげと股間を覗き込む。

「なるほどなあ。新品てのは、こういうふうになってるのか」

しきりに感心して。

「神々しいくらいに綺麗だなあ」

感極まったように言う。

（え……？）

昨日、連れ込み宿のシャワー室で自分の股間を鏡に映したときのことを思い出した。男性器に比べて複雑怪奇、醜いとさえ思った。

「おっと。いくら商売物でも、あまり覗かれちゃ羞ずかしいよな」

客は明美に添い寝する形になって、股間をまさぐり始めた。

今里も挿入の前に同じようなことをしていたと思い出す明美。

客の指が淫裂をなぞる。蛞蝓に這われているような粘っこいくすぐったさも、昨日と同

じだ。しかし。つぷつと穿たれて、ほとんど痛みは感じなかった。ただ、体の中を搔き回されているという思いが、嫌悪につながった。見知らぬ人間に口の中に指を突っ込まれたりしたら、すごく厭に思うだろう。しかも股間の穴は自分でも正確な位置を知らないし、どれくらいの大きさでどんな形をしているのかもよくわかっていない。自分も知らない秘密の部分を赤の他人に弄ばれている——こんなことをされて気持ちが悪くなるはずもないと明美は確信してしまった。

「ほう。ちゃんと準備はしてるんだな」

最初の客と同じように、明美の股間から掬い取った粘つきを指に広げて、それを桜紙で拭き取った。その動作が、汚物を拭い取っているように見えて、明美の嫌悪が屈折した。

「それじゃ、いくよ。最初のやつは、人形を相手にしてるみたいだと言っていたが。まあ、トーシロウに毛が生えて……は、いるなあ」

冗談のつもりか、客は明美の淫叢を撫で上げた。ぞわあっと、明美の背筋を嫌悪が奔った。

客がのしかかってきて、右手で怒張を固定して明美の股間に突き挿れた。

「ん……」

さつきよりも痛くなかった。しかし痛みが薄いぶん、気色の悪いくすぐったさを強く感じた。

「動かすぜ」

客は明美を気づかっただけ、声を掛けてから抽挿を始める。

ぬっぷ、ぬっぷ、ぬっぷと、腰の奥で男性器が出入りしているのがわかる。傷口を引っ

搔かれるような痛みはすこしあるが、気色の悪いくすぐったさが圧倒的だった。

「あん、あん、あん……」

感じているふりをしなくては——と、昨日の花菱の喘ぎ声を真似してみるが、どうにも嘘っぽく聞こえる。

ぺチンと頬を叩かれた。

「きやつ……」

学校でもらっていたビンタの半分も痛くなかったけど、全くの不意打ちだったので小さく悲鳴をあげてしまった。

「芝居はやめろや。萎えちまう。いっそのこと、生娘のふりをして痛がってくれたほうが、興奮するぜ」

「え……はい、ごめんなさい」

素直に謝りはしたが。大袈裟に痛みを訴えるのも演技になって、やはり客に見抜かれるだろう。

結局、明美は演技をやめて素を出すことにした。不快感や嫌悪感を押し殺して、客が増を明けてくれるのを耐え忍ぶ。

男が激しく腰を前後に動かし始めた。ごつんごつんと、下腹部をぶつけるような荒々しさだった。

（なんだか怒ってるみたい）

男の焦燥が、明美にはそんなふうに伝わってきた。

そうして十分も経っただろうか。

「やめた」

客は明美を突き放すようにして立ち上がった。跡始末もそこに服を着始める。

「あの……終わったんですか？」

「ああ！」

客は早くも座敷から出て行くとしてゐる。

「やめたんだよ。こちとら、南極一号を抱くほど飢えちゃあいないんだ」

言葉の意味がわからず、ぽかんとしている明美。ドスドスと階段を踏み鳴らす音が小さくなっていく。

（また、しくじった。なにがいけなかったんだろう……？）

悄然と跡始末をして衣服を整える。

女将が上がってきた。

「新卒の子なら人気が出るだろうと思ったんだけど、時代が違うのかねえ。わっちなんざ、あんたの歳頃にや留袖を着ていたものだけどねえ」

明美は遊郭における振袖新造と留袖新造との違いなど知らない。が、想像はついた。振袖は未婚の女性が着るのに対して留袖は既婚者のもの。つまり——明美には娼売女として留袖を着る資格がない。そういう意味だろうと思った。

「ごめんなさい……」

女将が溜め息を吐いた。勝江にそっくりの仕種だった。いや、母親の癖が娘に伝染（うつ）ったのだらうが。

「まあね。遊び慣れた男にや善がる振りは通用しないんだけどさ。けど、やりようがある

じゃないか。南極一号はいけないよ」

「あの……ナンキョクって、北極と南極のことですか？」

部屋の掃除に來た若い男を手ぶりで追いつ返して、女将は座卓の前に座った。自然と、美も向き合つて正座する。

「南極一号ってのはね……」

日本が南極に探検隊を派遣したとき、まさか女性を伴なうわけにもいかなかったので、使用可能なマネキン人形を正式の備品にしたという。

「いくら穴が開いてたつてお人形さんじゃねえ。まあ、男つてやつは蒔蕪でもかまわないつてのも多いけど」

女将は袂から煙草を取り出して、深々と一服した。

「高い金を払うんだからね。それなりの見返りを期待してるんだよ」

「じゃあ、わたし、どうすればいいんですか!？」

小さな声だったが、明美はほとんど叫んでいた。感じているふりをしたら叱られた。じつと我慢してたら愛想を尽かされた。どうしていいか、わからない。

灰皿の上の吸いさしをそのままに、女将が新しい煙草を取り出した。

「はあ……やつぱり、昔みたいにきちんと教育してから突き出すべきだったかしらねえ。まるっきりのネンネをいきなり修羅場に放り出したわっちにも責任があるね」

かつての遊郭でも、奴刑に墮とされた女を買い取つて女郎に仕立てたり、困窮してみずから身売りしてきた若妻をそのまま遊女として突き出すこともあったが、本筋としては女衒から買い取つた少女に禿かぶとして修行を積ませてから水揚げに出していた。そういった伝

統は近世において衰微していったものの、とどめを刺したのはやはり売春防止法だったかもしれない。勝江のように売春の裏も表も知り尽くしてみずから志願した者も、明美のように基本的な性知識すら持たない者も、同じように見世に出すのは――第二次産業が昭和末期までに見習工制度や自前の養成機関を廃して新卒者に即戦力を求めるようになったのと同様に、効率化を追求する陰に隠された不合理ではあるだろう。

そして、また。明美にとっては時代が悪かったともいえる。男は総じて若い女を好むが、それにも限度はある。その限度が、当時は現代よりも高かった。そして処女性も、結婚では絶対的に重視される一方で、男にとっては負担でもあった。なにしろ、不浄の出血を伴う。地方によっては、初潮を迎えた少女に破瓜をもたらすのは神職や総代、あるいは寄合で選出された男の『権利』ではなく『義務』であるという古い風習も残っていた。未性熟な少女に価値を見い出さない、ロリコンなどという言葉が知られる以前の健全な社会ではあった。

「あたいに任せてもらえないかな」

襖を開けて勝江がはいってきた。最初と同じように、隣の座敷から様子をうかがっていたのだろう。

「前にも言ってた、あれ。揚羽で試してみたいの」

女将は二本の煙草をまとめて揉み消して、三本目に火を点けた。

「いつまでも昔の格式にこだわってたなら、取り残されちゃうよ。現に、うちだって『江楼』みたいなのもやってるんだから」

女将は渋い顔をして、立て続けに煙草を吹かしている。

「このまま揚羽を出してたら、うちの評判ガタ落ちだよ。さっきの客の不満を聞いて、三人目は帰っちゃったし」

自分が稼げないだけでなく、店にも迷惑を掛ける。明美は、いたたまれない思いだった。「なにも、ずっとじゃないわよ。揚羽がふつうに接客できるようになったら、やめればいいんだから」

女将は三本目の煙草を根元まで吸いきった。

「それじゃ、こうしよう。今日のところは、揚羽も輪番で出す。それで不評が続くようなら、明日からしばらくは試してみな」

あれというのがなんなのか見当もつかなかったが、自分のことではあっても口をはさむべきではないと思う明美だった。

——かつての遊郭では娼妓が一斉に並んで顔見世をしていたが、ちよんの間では一度に見世に座るのは一人だけである。客がつかなくても、十分か十五分でつぎの女子従業員と交代する。だから客の方も通りを冷やかして歩いているうちに、同じ店でも別の敵娼あいかたを見繕える。

抜群に若くて男も一人しか知らない娘の初日。噂が広まるのも早いが、前評判が高かっただけに不評もあつという間に知れ渡った。つぎに揚羽が場に座ったとき、冷やかしはひつきりなしに見世を覗き込んだが、十五分のうちに揚羽を買った客はいなかった。

つぎの浮橋もそのつぎの牡丹も七、八分で客がついた。二人とも、先に述べた限度を超えない若さで容貌も平均以上であれば当然だった。

そして、ふたたび明美の輪番。

「ほお、たしかに若いね」

明美の噂を聞き付けた冷やかし組には違いなかったが、会社帰りのサラリーマンらしい中年男は、暖簾をくぐって女将と交渉を始めた。

「五千円とか二千円とか小耳にはさんだが？」

「いいええ。それは口開けだけの話ですよ。今は三十分千円ぼつきりです。お望みなら、オールヌードもおまけしますよ」

「馬鹿を言いなさい。セーラー服だから値打ちがあるんじゃないか」

この人には、わたしのぎこちなさが通用する。明美は本能的に察した。今度こそ、きちんと『お仕事』をして、お客様に満足してもらおう。明美は初心な女学生を演じることにした。演じるものにも——一回きりの『職業指導』を受けただけで、『お仕事』は二回もしくじっている。進学していないだけで、女学生そのものだ。

「あの……先にながってください」

女学生は男にしなだれかかるなんて淫らな真似はしない。お尻を向けるのも失礼だ。

男について二階に上がる姿を、勝江に控室から覗き見られていることに、明美は気づかなかった。

「へえ。やるじゃない」

もちろん、そんなつぶやき声も聞こえなかった。

挨拶をして、三十分の料金を受け取って、いったん下へ戻って女将に渡して。控室の手前でゼリーを股間に塗りこめたとき、勝江の姿はなかった。茶菓子と目覚まし時計を盆に乗せて座敷に戻る。

客がパンツひとつの姿で立ち上がった。

「キミは布団に寝ていなさい。パンティも脱がなくていい」

ゴムの紙包みを取って、客は自分で装着した。

明美の横に座り込んで、スカートをめくる。

初心な女学生なら、もつと羞ずかしがるだろうと気づいて、明美は両手で顔をおおった。

客の息遣いが荒くなったことで、自分の判断に自身を持った。しかし。

客がパンツの中に手を挿れてくる。指が淫裂を穿つ。

チツと小さな舌打ちが聞こえた。ゼリーのぬめりを淫水と勘違いしたのかもしれない。

パンツをずり下ろされ、脚から抜き取られた。しかし、なかなか客はのしかかってこない。明美が指の隙間から様子をうかがうと――客は、中途半端に勃起した男性器官を手でしごいていた。

（今里さんと同じだ）

自分には女としての魅力が足りないのだと、明美は悲しくなった。むしろ逆だとは思ってもよらない。遊びと割り切った相手とはガンガンできるくせに本命を相手にすると委縮してしまう。それは、今も昔も変わらない男の心理である。

「あの……フェラチオをしましょうか？」

客の顔に失望の色が浮かんた。

初心な女学生がそんなことを申し出るはずがないと気づいたが、手遅れだった。

「ああ、頼むよ」

怒ったような返事だった。客は布団の横に仁王立ちになった。

「さっさとしてくれ」

豹変ぶりに戸惑いながら、明美は身を起こして客の股間に顔を近づけた。獣じみた濃密な臭いにむせながら、口を開けて男性を頬張った。

（あ……）

ゴムを着けたままだった。中断してはざしたりしたら、もっと客の機嫌を損ねそうな気がして、そのまま舌を絡ませた。薄いゴム一枚があるだけなのに、なんだか無機質な感触だった。歯がゴムにすれて、きしきしと鳴った。

明美は、ごく初歩的なテクニクスの一端を仕込まれているに過ぎない。

清楚な女学生が懸命に奉仕してくれているという幻想を抱くか、下手くそなテクニクにしらせるか——それは人それぞれかもしれないが。この客はすでに身勝手な幻想が破れているのだから、後者になるに決まっていた。

五分ほど明美なりに懸命な奉仕を続けても、半勃起より硬くはならなかった。最後には客が焦れて、両手で頭をつかんで前後に揺すったり、膣に挿入するよりも激しく深く喉の奥まで突き插れたりしたが、ついには明美の肩を突き放した。

「もういい。こんな場所で女学生を抱けるなんて勘違いした俺が馬鹿だったよ」

「ごめんなさい……」

突き飛ばされて布団の上に横たわったまま、揚羽は泣きだしてしまった。

その姿を見て猛然と奮い立つ男もいるだろうが、この客はそうではなかった。そういう意味では、三人が三人、明美についた客が『ハズレ』だったとはいえるだろう。

客は身づくろいをする、小さくしゃくり上げる明美を残して足音荒く階段を下りて行

った。

縄見世

「簡単に言うと、エッチな『ごっこ遊び』ね」

明美の部屋で、勝江はそんなふうに説明した。見世に出るのはあくまでも明美だが、勝江が介添え役として一緒に座敷を務めるという。

「あたいが接客も受け持つから、揚羽は借金の形に拐われた商家のお嬢様。ひたすら怯えるお芝居をしてればいいの。あ、もちろん——本番のときは、ちよつとだけ抵抗してね。それもできなくて為すがまま、でもいいわ。でも、お客のすることにホイホイ協力しちゃ駄目。まあ、そこらはあたいがうまく仕切ってあげる」

つまり。明美は拐われたヒロインを演じて、客に犯されるという——現代ふうに言うなら本番有りのイメクラである。芝居に迫真性を持たせると同時に、明美が下手な演技をしないですむように、縄で縛るといふ。

そう聞かされて明美は驚き不安になると同時に、安心もした。すべてをベテランの勝江にまかせて、自分は縛られて身動きできない身体を弄ばれていればいい。苦しいけど楽チンかもしれないと思った。それに。悪人に捕らわれて縄で縛られるなんて、時代劇の女優さんみたい。

昨日の三度続けてのしくじりを挽回(※)するためにも頑張ろう。またしくじったら、

もうお店にいられない。その決意が表情に表われていたのだろう。

※「汚名挽回」が誤用であるという説は昭和五十年代以降に現われたものである。現代でも「疲労回復」という言葉に違和感を持つ読者は少ないと思う。

「あのね。気負うことはないの。一世一代の正念場なんかじゃないんだから。一年三百六十五日、これで稼いでくんだからね。あ、休みを取るから一年二百日くらいか」

キリキリシヤンとしている勝江さんでも冗談を言うんだな——と、肩の力が抜けた明美だったのだが。

午後四時になって娼売が始まって。いよいよ縛られる段になると、やはり緊張する。

こういった演出には、最初から半裸で見世にでる『江楼』が適しているだろうということになったのだが、勝江はどういう役柄なのか、『縁奇』でも見かけないほどきつちり和服を着付けて、それで右肩を抜いている。剥き出しの二の腕には、鯉の滝登りを描いたシールが貼られている。駄菓子屋で売っている転写シールだった。

一方の明美は赤の腰巻一枚きり。それも腰紐が無く、端を腰回りに折り込む昔風のものであった。

見世ごとに仕切られた控室。生理明けの椋鳥が、興味津々で勝江と明美を眺めている。小机の上に勝江が、半裸の女性モデルを表紙に使っている角背の雑誌を広げた。女性を縛る手順が図解されている。金物屋で売っているような細い綿ロープを手にして。

「両手を後ろにまわして手首を重ねて」

明美の手首に縄を巻いて結び留める。そして、長い縄尻を胸にまわした。乳房の上をひと巻きして、背中に戻した縄で手首を吊り上げた。

「痛かったら言ってね。でも、きついくらいは我慢して」

「……はい」

痛いときついのはどう違うのかと明美が判断に迷っているうちに、ロープは乳房の下も巻いた。勝江は二本目の綿ロープをほぐして、腋の下に通す。乳房の上下を巻く縄をひとまとめに絞った。

「あ……くうううう」

縄が乳房に食い込んできて、明美は痛みを覚えたのだが。なんだか心臓まで絞られているような、不思議な感覚が生じた。その感覚は、微妙に甘かった。と同時に、腰の奥でさざ波が揺れた。

腋の下を縛った縄が背中中でひとつにまとめられて、縄尻が長く余った。

「他人を縛るほうが簡単だわ」

勝江が小さくひとりごちた。明美は、その意味を深く考えなかった。

「それじゃ、お先に」

掠鳥に挨拶をして、勝江が縄尻を握った。

「そら、とっとと歩きな。親父の借金のせめて利息分くらいは、おまえの身体で稼いでもらうよ」

すでに『ごっこ』が始まっていた。

顔見世用の椅子は勝江が奥に片付けて、明美を板の間に横座りさせた。腰巻の裾を乱して、太腿まで露出させる。自分は、入口の脇にある椅子に座って、遣手婆も兼ねるつもりらしい。

人前どころか。開け放された入口の向こうは人（それも九割方は男性）がひっきりなしに行き交う往来なのだ。そんな場所で乳房を曝し太腿まで露出するなんて、男女ふたりきりの密室で全裸になるよりも羞ずかしい。お客に微笑みかけるなんて無理。自然とうつぶいてしまう。

足を止めて覗き込んでいた三人ほどが、板付き芝居の開幕と見て、さっそくに暖簾をくぐった。

「なんだか面白そうなことをしてるね」

「まさか、嫌がる子を無理矢理に——じゃ、ないだろうな」

勝江が答える前に、三人目が明美に尋ねかけた。

「これ、遊んでるんだよね？」

昔ながらに、拐われた女の子が無理強いに身体を売らされている。自由と平等の民主国家でそんな犯罪は行なわれていないだろうと思いつながら、まさかという疑いも拭いきれないのではないかと、明美は推測した。自分だって、即日採用社の林課長から詳しく話を聞くまでは、子供が拐われてサーカスに売られるなんて話まで、ありそうなことだと思っていたくらいだ。きちんと答えないと、またお店に迷惑を掛けてしまう。でも、冗談半分でこんな羞ずかしいことをしてるとも思われたくない。

「遊んでなんかいません」

明美はきっぱりと答えた。

「お仕事だから、やってるんです」

言ってから、すぐにしまったと思った。仕事だから嫌々やっているとこのうふうに聞こえな

かったらどうか。

「そうともさ。親父が博奕で作った借金を綺麗にするまでは、これがおめえの仕事なんだよ」

勝江が立ち上がって、床に伸びていた縄尻をぐいと引いた。

「あつ……」

つんのめって、男たちの前に身を投げ出す形になった。ますます腰巻が乱れて尻までめくれ上がった。

「さあ、おめえからも旦那衆にお願いしねえか。何十人にも弄ばれた薄汚れた身体を、どうか買ってくださいってな」

「おいおい。その子は昨日が御目見えだろ。いくら『ちよんの間』たって、ひと晩に何十人てのは勘定が合わない」

「やだなあ、お客さん。お芝居と現実をゴツチャにしないでよ」

「や、こりや参った。あまりに真に迫ってたもんでね」

「で、どうすんの？ 現実で言うとなね。この子、いろいろと不慣れだから、お座敷でもあたいが付き添うんだけどね。コーチ料を含めて、三十分千五百円。もちろん……」

まだ突っ伏している明美の腰巻を、へろんとめくった。

「きやつ……」

「オールヌードも込みだから、安いもんでしょ」

「面白いな」

三人ともに乗ってきたのだが。いちばん歳上らしい男が、とんでもないことを言い出す。

「けどさ。俺たち三人、ツレなんだよ。順番待ちしてりや一時間半だぜ。三人まとめてお願いできねえか」

「うーん、流石にそれはねえ。そこまで規則を破ると、あたいがお仕置きされちゃう」
数秒ほども考えてから、勝江がポンと手を拍った——のは芝居なのか、実際にその場で名案を思いついたのか。

「最初と最後のご挨拶とか省けば、よその店と同じ十五分で埒が明くよね。御座敷を二つにして、三人のうち二人はそっちで待っててもらうつてのは、どう？ 三人で四十五分。口開けサービス、二千円ポッキリ」

「決めた」

「輪姦すみたいで、可哀そうな気もするな。ほんとに、それでいいの？」

さつきも明美に尋ねた男が、わざわざしゃがみ込んで明美の目を見詰めた。

自分の返事でお客さんの気持ちが決まる。そう思ったときには、自分でも呆れるくらいにお芝居どっぶりの台詞を口にしていた。

「お願いします。わたしを買ってください。お兄さんたちに見限られたら、またお仕置きされます」

お仕置き云々は、もちろん勝江の言葉が頭に残っていたからだ。

「そうかい。じゃあ、お兄さんたちが助けてあげよう。もちろん、お礼は身体で返してもらうからね」

男たちも、勝江と明美の芝居に引きずり込まれたようだった。

「そうと決まったら、さあ、娼売娼売。さっさと立ちな」

いつの間に用意していたのか二尺の竹尺で、剥き出しになったままの尻をピシヤリと叩いた。その動きが見えていたので、

「ひい……ぶたないでください」

あまり痛くもないのに、哀れっぽく訴えて立ち上がった。

「そら、ついといで。お客さん方。立ち止まったりしたら、遠慮なく尻を叩いてやってくださいね」

勝江が先に立って、縄尻を股間から前へまわして引っ張った。

「きや……」

明美の悲鳴に、すこし本気が混じった。わざわざこんなことまでしなくてもいいのに。腰巻が縄でたくれるし、強く引っ張られると股間に食い込んで痛い——のだけれど。階段を一步上がるたびに、腰の奥がじいんと痺れる。それでも下を振り返って、顔見世には巴が薄いネグリジェ姿でしなを作って座り、勝江に変わってマツが遣手婆の席に就いているのを見て取るくらいには周囲のことにも気が回っていた。

六畳間の座敷も布団が延べであるし小さな座卓も置かれているしで、五人だと窮屈だった。

「それじゃ、支度をしてきますから。その間に順番を決めておいてくださいね。あ、湯文字は剥いじやってもいいけど、縄はそのままにお願いします。縛るのって、けっこう手間なんだから」

「それじゃ、ジャンケンだ。引っpegすのも、勝ったやつの権利な」

勝江が襖を閉じると同時にジャンケンが始まる。

明美は布団のへりに横座りになって、身の置き場に困っていた。もしこれが『ごっこ』じゃなかったら、わたしは逃げようとするんじゃないかな。まっすぐ襖めがけて突進したら逃げ出せる。そんなことを考えて、すぐに否定した。逃げ出しても、縛られているんだからすぐに捕まる。それに。逃げたりしたらお父つあんが——もうすこしで吹き出してしまふところだった。

（やだ。お父つあんだなんて。ヒロインになりきってる）

なんだか、昨日とは違つて心にゆとりがあつた。自分であれこれ段取りを考えたりせず、勝江と客たちに一切をまかせてしまふ。考えていた以上に気楽だった。

「アイコでしょ、ほい」

ジャンケンの決着がついて、勝つたのは年長の男だった。上着だけを脱いで。

「腰巻を取るぞ。いいんだな」

念を押したのは、追加料金を心配したのかもしれない。

（オールヌード込みの値段だつて言つてあるのに）

しかし、そんな野暮を返す必要はない。羞ずかしそうに身を縮めて顔をそむけていればいい。

客もそれ以上はなにも言わず、腰巻に手を掛けた。紐がないので、ちよつと引つ張つただけでハラリとほどけた。

「へええ。薄いな。ほんものの娼妓みたいだ」

売春防止法が施行されたのは五年前だから、この男はかつての遊郭を知っているのかも知れない。当時の娼妓は古くからの伝統を受け継いで、淫叢の手入れを怠らなかつた。実

はこの元『新奇楼』でも、女将の指導でそのようにしている女子従業員も何人かいるのだとは――じきに明美も知ることになるのだが。いずれにしても彼女の股間は、冬の田圃よりも叢が淡かった。

「おや。さっそくに可愛がってもらってるのかい」

勝江が戻ってきて、座卓に盆を置いた。

「それじゃ、先にこの妓の支度をすませますね」

縄で縛って裸に剥いて、これ以上の支度が必要なのかと訝る三人の客の目の前で、勝江はチューブからゼリーを絞り出した。

「そら。もっと股をおっ広げな」

横座りの膝をつかんで開かせる。

「……羞ずかしい」

明美のか細い訴えは演技ではない。思ったままを（この場にふさわしいセリフだからと思ったので）素直につぶやいただけだ。股縄で刺激された腰の奥の痺れが、膣口をこねくられる刺激で甦った。

「なるほど。それで、ここいらの女の子は最初から濡れてたわけだ」

明美の味方（？）をしてくれている男が、すこし醒めた声で感心する。

それを聞き付けたのか。勝江が明美の肩を芝居がかって突き飛ばす。明美は抵抗することなく、布団の上に転がった。

「それじゃ、時計をセットするからね。十五分でお願いしますよ。おっと、その前に」
上着を脱いでいる男の前にひざまずいてズボンとパンツをずり下ろす。

「この妓は手が使えないからね。特別サービスだよ」

軽く手でしごいて目いっぱい怒張させて、ゴムをかぶせた。

「それじゃ、お邪魔者は退散いたしますよ」

まだ服を着たまの二人を追い立てて座敷から出て行く勝江。

とたんに、客の雰囲気ガラリと変わった。

「へへへ。親父さんの借金を返すのを手伝ってやるぜ。ありがたく思えよ」

そんなことを言いながらのしかかってきて、一気に貫いた。

「あ……」

声は出したけれど――背中を重ねた手首に体重が掛かる痛みをやわらげようとして腰を浮かし気味にしていたのがよかったのかもしれない。膣を押し広げられ身体の中芯まで貫かれる痛みはほとんどなかった。そして、粘っこいくすぐったさが腰の奥の痺れと共振して、これまでに感じたことのない感覚を生み出していた。気持ちいいとは違う。いや、つたない快感なのかもしれない。けれど、ほんとうは夫婦の関係でなければいけないことをしているという、それでお金を稼ごうとしている罪の意識が、その感覚を苦いものにしていて。

明美は、客が早く射精してくれることだけを願って耐えている。けれど昨日とは違って、文句は言わない。

客は、借金の形に拐われた少女を犯しているという幻想に没入しているらしい。

「つらいか？ 恨むなら親父を恨めよ」

そんなことをつぶやいたり。

「そんなに男に抱かれるのが厭か。これならどうだ？」

腰は休みなく動かしながら右手を結合部に差し入れてきた。そして、男性器が出入りしているより上のほうを指でまさぐっていたが。

不意に、腰の浅いあたりでなにかが爆ぜた。

「ひゃああっ……！」

びくんと腰が跳ねた。男の指が動くたびに、得体の知れない感覚が立て続けに爆ぜる。

背骨まで衝撃が突き抜ける。

「ひゃああっ……ああっ、あっ、あっ……やめ……やめて！」

ほんとうはやめてほしくなかった。衝撃は、はつきりと甘美だった。それだけに怖かった。衝撃が繰り返されるたびに、身体が分解していくような錯覚があった。

「未通女殺しの豆とは、よく言ったもんだ」

客は手を引き抜いて、それまでまさぐっていたあたりに下腹部を押しつけてきた。指に替わって剛毛が、それまで衝撃を発生していた部分を刺激する。爆ぜるような凄まじさは消えたが、じゅうぶんに鋭い甘美が腰骨を揺すぶる。

「あっ、あっ、あっ……」

明美は切迫した声で喘いでいた。もしかすると、これが勝江さんの言っていたオーガズムというものかもしれない——ぼんやりと理解が生じた。けれど実際には、オーガズムの遥か手前、宙ぶらりんなままで明美は放り出された。

「ふう……安い買い物だったな」

男が立ち上がった。ゴムをはずして自分で跡始末をして。まだ目覚まし時計は鳴らない。

「跡始末をどうするか、聞いておくんだったな」

ズボンだけ穿いて上半身は裸のまま廊下に身を乗り出して、隣に声を掛ける。

「終わったけど、女の子はほっといていいのか？」

すぐに勝江が入ってきた。

「そのままでいいわよ。どうせゴムなんだから。それにしても、お客さん凄いわね。ちゃんと豆のことを知っていて、三日前まで処女だった子をあれだけ哭かすんだもの」

勝江の言葉はもちろんお世辞を交えているが、半ばは本心だったろう。この時代、クリトリスの存在を知らない男も少なくはない。知っていても、女性が苦痛を感じない繊細さで刺激できる男は、もっと少ない。

「あまり味を覚えられると、娼売がおろそかになって、それも困りもんだけどさ」

明美をうつ伏せにさせて、尻を高く突き上げた形に据える。

「ずっと同じ体位じゃ、とくに手首が痛いでしょ。つぎは、これでいこうか」

最初の客が身支度を調べて出て行くと、入れ替わりにつぎの客が姿を現わす。勝江のゴム装着サービスを受けて、最初の客以上に猛然と明美に襲いかかった。

客が興奮したのは、明美が縄で縛られているからだけではなかった。正常位以外の体位をすんなりと受け入れる女性は、娼婦も含めてそんなに多くはなかった。だからこそ、今里は明美が売れっ妓になれるようにと騎乗位まで仕込んだのだろうか。

二人目の客は明美におおいかぶさり、両手で乳房をこねくりながら猛然と荒腰を使って、五分以上を残して終わってしまった。

客は満足して帰ったが、『豆』をいじってもらえなかった明美は、なまじ快感を知ってし

まっただけに、憤懣やるかたない思いで客を見送ったのだった。

そして三人目は正常位に戻って。やはり明美を欲求不満に取り残して埒を明けたのだった。

三十分千円（オールヌードはサービス）のところ、勝江の介添え込みで千五百円。割り戻しは正規の料金分が明美、追加分は勝江の約束になっている。三人が四十五分で二千円の変則的な金額も同じ計算で、明美が六百七十円で勝江が三百三十円。実際のところ逆の比率に決められても、明美は不満に思わなかったろう。三人続けてしくじって、それを一気に挽回できたのだから。

その日は、午後四時から休憩を挟んで八時間を一杯に働いて五回転。ちょんの間にしては回数が少ないのは、緊縛のせいだった。勝江が「他人を縛るのは初めて」と言っていたとおり、必要以上に肌を締めつけがちで、一時間もすると鬱血してくる。そのたびに縄を解いて一時間は休んで、また縛られる。それでも、最初に三人まとめて『お仕事』をしただけでなく、常連の二人がかち合ったとき、客が互いに顔見知りだったこともあって、これは勝江からの提案で二人で四十分千八百円というのがあったから、五回転でも八人の相手ができた。

二日目にして、ようやくのデビューであった。これからも『お仕事』を続けていく自信もついた。

しかし、その二日目はまだ終わっていなかった。最後の関門が残っていた。

銭湯である。『新奇楼』にも三十年前までは内風呂があったが、戦時中に遊郭が営業禁止

となり、定期的に修繕が必要な風呂設備は廃されて、戦後に復活したときもそのままとなっていた。

農村では、よほど貧乏な家でなければ内風呂を備えている。明美は銭湯に慣れていない。女性ばかりとはいえ、見知らぬ他人に裸を曝すのは、男性の客に股間を覗き込まれるのは違う羞ずかしさがある。しかも、今日はただ裸というだけではない。縄で縛られた痕が、くつきりと刻み込まれている。

明美が勝江の背に隠れるようにして浴場にはいると、騒々しかった女湯が一瞬静まり返った。無数の視線が肌に突き刺さる。ヒソヒソ声が、すべて自分の噂をしているようだ。た。いや、しているようなのではなく、しているのだ。

「ほら、『江楼』の新趣向……」

「よくやるわよねえ」

そんな声も聞こえてくる。

「マッサージしてあげる」

勝江は明美を洗い場の隅に座らせて、熱めの湯に浸した手拭いで全身を強くこすつてくれた。

「いいです。自分でします」

「あたいが着けた痕なんだ。ちゃんと尻拭いしてあげるわよ」

そう言われては、重ねて断わるのも失礼だと思う。

十分ほどもマッサージしてもらって。それから化粧を落として髪と身体を洗って。勝江にうながされて湯船に浸かる。

場所柄だけに、入浴客は（身体を売る売らないはともかく）玄人筋が多い。勝江の素性を知っている者も何人かいるに決まっている。協業組合のまとめ役を父親に持つ娘を面と向かって悪し様に言う者はいない。それを本人も知っているから、堂々と明美を銭湯に連れて来たのだろう。

それは明美にもわかるから、勝江への信頼が厚くなり依存も生まれる。それでも、一日も早く『ごっこ遊び』をやめたいとは思うのだった。

しかし。

ふつうに接客できるようになったらやめるという約束だったが、そうもいかなかった。今日は順番がまわってきそうにないと判断した何人かの常連が、翌日とか三日後に予約を入れたのだった。『ちよんの間』で予約というのも珍しい話だったが、勝江が張り切ってその場で予約を受け付けてしまった。そうなると、断わるわけにもいかない。

「まったくねえ。あまり派手にやると、御上おかみがうるさいんだよ。うちは飲食店だよ。芝居小屋じゃないんだから」

茶菓子しか出さないし、形ばかりのメニューに書いてあるのはビールと清酒とウイスキーと乾き物と新発売のインスタントコーヒーくらいのもの。しかも、相場の倍以上の値段。それでも飲食店としてきちんと届け出をしているから、警察も保健所も売春の実態には目をつぶっている。

「いいじゃない。酒場にだって流しのギター弾きとか来るでしょ。同じことよ」

もしも勝江が跡取り娘としてふんぞり返っていれば、女将も雷を落とせただろうが。当人も身体を張っているのだから強くも言えない。

「しょうがないね。それじゃ、あと半月だけは許したげるよ。でも、予約なんか取るんじゃないよ」

やはり明美に意見を求めることもなく決まってしまった。もっとも明美としても、やめたいという思いとは別の部分で、段取りとかサービスとかを考えずに縛られて転がって男の好きなように馴られているだけのほうが楽かもしれないには思っている。そういった受け身の姿勢の奥に潜む自分の性向については、まだ気づいていなかった。

娼売繁昌

翌日の口開け前。勝江が明美の三畳間にやって来た。

「オカアサンは予約を取るなって言ってたけど、それだとまた店頭で競り市かジャンケンになるんじゃないかな」

（あ、またなにか考えてるんだ）

ほかの女子従業員とは顔を合わせたときの挨拶くらいしか交わしていないが、勝江とは昨日ずっと一緒だったようなもので、ずいぶんと性格もわかってきた。なにか企んでいる（といって悪ければ、新しいアイデアを考えついた）など、明美にはピンときた。

「両手に花ってことわざは知ってるよね。あれでいこうと思ってるんだけど、どう？」

「昨日みたいに、二人三人まとめて揚がってもらいますか」

「そうじゃなくて。ええとね……」

勝江はちよつと考えてから。

「あたいの先輩で、五人もの男性に襲われたっていうか、襲^いわせた人がいるの」
その言い方に、明美は『ごっこ遊び』を思い出した。

「どんなふうに姦^やられたと思う？」

下半身を剥き出しにして勃起にゴムを装着した男が四人、順番待ちの行列を作っている光景が頭に浮かんで、明美は自分に呆れてしまった。たった一日か二日で、とんでもなくエッチなことを考えるようになってしまった。

しかし勝江の話は、その上を行っていた。

「答えは、昨日と同じ。でも、女^メつて穴^{アナ}が三つもあるじゃない。一つしか使わせないなんて、リツが悪いと思わない？ 襲^いわれてるほうだって、疲れちゃうわよね。だから——最初^{はじめ}はオマツリとフェラチオ。勃^はたせるためじゃなくて射^だ精^{しやう}させるためだけだね」

最後のひと言は——昨日の明美を見ていて、そういう説明が必要だと判断したのだろう。

勝江も、明美についての理解を深めているのだった。

「三人のときは、それに加えてお釜も掘^ほられたの。こっちは、経験ないよね？」

「お釜^{かま}って、なんですか？」

勝江が頭を小さく横に振った。

「わからなけりや、まあいいわ。さすがに前後二本挿^さしは窮屈^{きやうくつ}で、男も楽しめないみたいだから。でも、オマツリとフェラチオを同時にさせると、男がすごく興奮するの」

文脈から、オマツリが男女の交合を意味するのは明白だった。つまり勝江のアイデアとは、明美と同時に二人ずつの相手をさせるというものだった。

とんでもない破廉恥なアイデアに、明美は驚愕したのだが。勝江は窮地を救ってくれた恩人だった。先輩のうちに、ただひとり親切にしてくれる人でもある。

「ですけど……相乗り（言葉にしてから、明美は内心羞恥に悶えた）なんて、お客さんが承知してくれるでしょうか」

昨日だって、わざわざ座敷を二つにして、明美が接客するときは対一だった。それも、連れ立って来た客と顔見知り同士に限ったことだった。勝江が考えているのは、そういうの関係なく二人をひとつの座敷に揚げて、明美が二人同時に相手をするということらしい。

「そこらへんは、あたいの腕の見せどころってやつ。それじゃ、承知ね」
押し切られてしまった。

顔見世場の壁には、プラスチック板に文字を彫った料金表が掲げられている。

御座敷使用料（茶菓サービス）

30分 千円 / 延長15分 4百円

御品書

ビール（中瓶） 3百円

清酒（一合） 3百円

ウイスキー 3百円

コーヒー 3百円

コカコーラ 3百円

おつまみ 3 百円

刺身 品切中 時 価

オールヌード 3 百円

オールヌードが料理の扱いになっているのも傑作だが、刺身の欄には『品切中』の紙が貼りっぱなしになっている。

店を開ける前に勝江は、料金表の下に紙を貼り足した。

特殊衣装（介添あり） 5 百円追加

二名様御座敷使用料 2 千円追加

「これだけじゃわかりにくいだろうけど、あまり露骨なのは駄目だって、オカアサンに叱られちゃったから」

勝江は両親への呼び掛けを使い分けている。女子従業員の理^り非^いとしてはオトウサン、オカアサンを使い、実の娘としては（滅多に口にしないが）父さん、母さんだった。『オ』の有る無しだけでなく抑揚も違う。それはともかく。

明美は暗算をしてみても、怪訝に思った。基本料金が千円で、特殊衣装（緊縛）が五百円。

それは昨日と同じだが。二名様の追加料金が二千円なら、合計で三千五百円になる。一人千五百円よりも割高だ。しかも、時間は二人で三十分。店の側から考えれば、同じ時間で実入りは普通の三倍にもなる。実際には勝江が理^り非^いとして店に出られないのだから、店全体としてはそんなに変わらないだろうが、それにしても、客の側からは暴利に思えるかもしれない。

「映画館だって、アベック席は割増料金を取るでしょ。同じことよ」

それとこれとは違うと思うのだが——些細なことで混ぜ返したくなかった。明美にとっては、裸で縛られて犯される——ではなく接客したり、しかも同時に二人目のお客まで啜えなければならぬという『業務内容』に比べれば、他のすべては些末事だった。

今日も、明美と勝江のコンビは『江楼』に配置された。現代的でちよつとだけ色気を盛り込んだ衣装の『一新』と、往年というよりも江戸時代の遊郭を演出した和装の『縁奇』には、淫美な半裸緊縛はそぐわない。特殊衣装で『ごっこ遊び』を売り物にする限り、明美の持ち場は『江楼』に固定される。

——午後四時に表戸を開けると、じきに『江楼』の前には人垣ができた。

「盛況だねえ。予約しといてよかったよ」

最初の客が暖簾をくぐったのは、明美が顔見世に座ってからきっかり十分後だった。

「時間びつたりに来てねとお願いしといたのに」

「ここは十五分交替だろ」

初老の客はシレッとしている。馴染だから、店の仕組は知り尽くしているのだろう。

「それに、いい宣伝になったんじゃないか」

「あまり宣伝するなって、オカアサンから釘を刺されてるんだよ。まあ、いいさ」

勝江は立ち上がって、貼紙を丁寧に剥がしてから竹尺を手にした。明美の尻をピシヤンと叩く。

「ひい……」

悲鳴は演技だが、昨日より痛かったのも事実だった。

「さあ、地獄の釜の蓋が開いたよ。たっぷり虐めてもらいな」

明美の腰巻をめくって、腰縄を後ろから前にくぐらせて引っ張る。

明美もすっかり慣れて——わざと縄が張るようにして勝江に引っ立てられる。腰の奥にさざ波を立てておいたほうが、すんなりとお芝居にはまれるのだ。

勝江が盆を取りに行っているあいだに、明美は腰巻を剥ぎ取られて。

勝江の手でゼリーを塗り込められて。

「この妓が不始末をしでかさないか、見張っててよござんすか？」

昨日は一人で揚がった客の三人が三人とも勝江に座を外させたのだが、この客は変態度において彼らを上まわっていた。

「見張るだけじゃなくて、指導をしてやってほしいね。この妓、ちゃんと揚羽本手はできるのかい？」

「……………」

自分の源氏名を呼ばれたのかと思ったが、そうではないらしい。明美は、二人のやり取りに耳を澄ました。

「そうですね。始まってからOJTで指導してやります」

「ほう。若いだけに新しい言葉を知ってるね。しかし、儂はご覧のと通りの歳だ。儂の乗艦は特型駆逐艦とくがただったな。次発装填装置は装備しとらんかった」

「え……ああ、連発は無理ってことですね」

勝江はこの男が元海軍士官だとは知っていたが、さすがにそっち方面の知識には疎い。語感と文脈から推測したのだった。

「駆逐艦はアシも短いしな。三十分は燃料が続かん。後半は時雨茶臼で轟沈……させるのかな、させられるのかな」

「そりゃあ、お客さんですよ。最初から沈んでるもの」

話をほとんど理解できなくてポカンとしていた明美だったが、受け身でいればそれでも『お仕事』は務まる。

「わかったね。ぼさっと座ってないで、そこに寝て脚をおっ広げるんだよ」

ぴしゅんと腿を叩かれて、気持ち切り替わる。

もうすっかり、正常位は手の内になっている。仰臥して、挿入のしやすさと縛られた手首への負担軽減とで背中を反らし気味にして腰を浮かし、膝を立てて脚を開く。あとは、黙って目を閉じていればいい——はずだったが。

粘っこいくすぐったさとともに客が（彼流儀の言い方だと）魚雷を射ち込んできて。

「揚羽。両脚をゆっくりと高く上げて。それでね、ふんわりとお客の腰に絡ませて」

言われたとおりにすると、いっそう奥まで魚雷が押し入ってきて、下腹部が密着する。しかし角度がついているので、淫裂の頂点に埋もれている豆への刺激は得られない。

客が腰を動かし始める。上下だけでなく左右にもくねらせる。

「あつ、あつ、あつ……」

喘ぐというよりも、腰の動きでお腹から空気が押し出されるような感じを意識して、明美は小さく声を漏らした。演技といえば演技だったし、自然にそうなるともいえた。

「自分ではわからないだろうけどね。お客さんの動きで揚羽の脚が揺れてるよ。アゲハチヨウミたいにね」

それで揚羽本手というのかと、明美は納得した。

客は五分ばかり同じ動きを繰り返していたが、腰に絡められた明美の脚を肩に担いで、つながったまま上体を起こした。さらに膝立ちになって、両脚を抱えた。そして、腰を前後に衝き動かす。

「この形も知つとるだろうな」

「深山みやまですね。奥の奥まで突かれるから、あたかも好きな体位です」

たしかにさっきよりも深く挿入されている感じだけど、逆立ちさせられてるので落ち着かない——というのが、明美の感想だった。ますます、豆はほったらかしにされる。

やはり五分も経つと客は動きを止めて、今度は完全に抜去した。ごろんとあお向けになる。

「お客様に正面を向いて跨ぎなさい」

客は怒張を左手で支えて垂直に立てている。

「そのまましゃがんで、お客さんを自分の中に挿れるの。できる？」

縛られているから手を突いて身体を支えられないけれど、ウサギ跳びの要領でなんとかなるだろう。

「できると思います」

明美は、そろそろと腰を落としていった。今里に教わったときは、上体を倒し気味にして片手で怒張を握って、その部分を覗き込みながら迎え挿れたけれど、今はまったく様子が見えない。たぶん客が位置と角度を合わせてくれたのだろう。亀頭が淫裂に割り込んできた。ちよつと腰をくねらせると、凸と凹とがすぽつと嵌り合う感触があった。

「はあああ」

深呼吸をしてから膝の力を抜くと――ぬぷつと奥まで突き刺さった。上下が逆になると角度が変わるのか、自分でしているという意識のせいなのか、粘っこいくすぐつたさをあまり感じなかった。それでいて、腰の奥で大きく波が揺れた。はつきりと熱を帯びていた。

しゃがみ込んだ姿勢から足を後ろへ引いて布団に膝を突き、いわゆる『女の子座り』の姿勢になった。しゃがんだままで屈伸運動をするよりも、この形のほうが疲れないし、単純な上下動だけでなく、腰で『の』の字を描いたりもできるから男が悦ぶ。そんなふうにも今里から教えられていた。

いざ腰を動かし始めると――自分で加減が出来るので、わずかな痛みも感じないし内臓を押し上げられる不快感もなかった。

「へえ。最初の男に仕込まれてるみたいね。けど、それじゃただの対面座位よ」

勝江が明美の肩に手を掛けて背を反らせた。

「もつとのけぞって。チンポとマンコが嵌っているところを、お客さんに見てもらうの。こら、動きを止めない」

明美は勝江に肩を預けて屈伸運動を再開した。結合部を客に見られているという羞ずかしさで、腰の奥がいつそう熱くなった。

「まだ時雨になってないね。これなら、どう？」

勝江の右手が結合部に伸びて、淫裂の頂点から豆をほじくり出した。にゅるんと何かが滑る感触とともに、豆から腰の奥に向かって鮮烈な稲妻が奔った。

「ひやあああああつ……あああつ！」

昨日の客に与えられた衝撃よりも、はるかに鋭くて甘美だった。

にゆるん、によるん……豆は薄い莢に包まれているらしい。莢の中で豆が滑って、それが衝撃——いや、凄絶な快感を生んでいる。

「ほら、時雨れてきた」

それまではゼリーで潤滑されていてゴムが軋るのを感じていたのだが、今は——自身
が泥の塊りになって、長靴で掻き回されているみたいだった。腰の奥の波が熔岩のように
熱くドロドロになって滴り落ちている。

「こら。自分ばかり善がってちや駄目。お客さんをちゃんと轟沈させなさい」

きゆるんと、莢が剥き下げられたのがわかった。いっそう鋭敏な豆をつねられて、快感
を二つに引き裂くような激痛が奔った。

「痛いっ……きひいいい」

腰を引くと痛みが薄らいだ。勝江に腰を押されて前に突き出すと、そこに快感がかぶさ
ってきた。そして、また豆をつねられて腰を引く。

いつか明美は勝江の指に操られて、腰を前後左右に激しくくねらせていた。

「こ、これは堪らん……」

明美の下で客の身体が硬直した。射精の瞬間だ——と、明美は直感したのだが。豆への
刺激が不意に消失した。明美は客の腰にべたと尻餅をついて、ふうっと股間が脱力した。

「やめないで……」

頭をのけぞらせて勝江に訴えたと——彼女は、座卓を睨んでいた。正確には、目覚まし
時計を、だろう。まだ十分ほど時間が残っている。

そうか。跡始末をして服を着るのは五分もあればじゅうぶん。時間いっぱいまで引つ張るつもりなのだ。理解した直後に、また豆をつままれた。

「さあ、ラストスパートよ」

股間に甘い稲妻が走って。明美は稲妻に追われているのか追いかけているのか、これまでに以上に大きく淫らな動きで腰を振り始める。

「まあ、さっきのは八合目ってとこかな。あんなのはオーガズムじゃないよ」

とは、客を送り出して控室に戻ってからの勝江の言葉だった。

あれで八合目。オーガズムまで登り詰めたらどうなるんだろうか。男の人の頂上は射精なんだろうけど、その瞬間にも理性を保っているように思える。雲の中に浮かんでいるような心地で明美はそんなふうを考えて——登り詰めるのが怖くなった。『お仕事』にならないといった勝江の言葉が、実感として理解できた。

二十分ほど縛られたままで休憩して。ふたたび見世に座る。勝江が追加料金表を、また貼り足す。

すぐに四人ほどが店の前で足を止めた。明美の裸身をとつくりと眺めて、壁の料金表を一瞥してから遣手婆の席に座っている勝江に尋ねる。

「下の貼紙、他の店では見かけないね」

「それは、この妓こだけの特別メニューさ」

勝江が説明しているうちにも、店の前に人垣ができる。

「おし。ちょうどツレと来てたんだ。揚がるぜ」

「待てよ。俺らが先に来てたんだ」

「誰か、俺とつるんでくれないか。俺が二千円出すからよ」

昨日の口開けほどにも賑わってきた。

「そんじや。最初にはいつてくれたお兄さんたち。揚がつてよ」

「それじゃ、次を予約な」

「ごめん。順番待ちとか予約は組合の規約で御法度なの。他の妓と遊ぶか、一時間くらいしてから、また来てみてね」

組合の規約というのは出まかせだが、そうとでも言わないと納得しない雰囲気だった。

これ以上に野次馬を呼び寄せるのをはばかったのだろう。縄尻を股間に通すような細工はしないで客を先に立たせると、勝江は明美を引き連れてさっさと二階へ上がった。

そして、盆を取りに行く間に腰巻を剥ぎ取られた明美を二人の客の前に引き据えて、いつそう凝った『ごっこ遊び』が始まる。

「さっきは時雨茶臼なんかさせたけど、せっかく縛ってあるんだから、無理矢理ぼくしなぐちやね」

布団の上で明美を膝立ちさせて、上体を前に押し倒す。いつてみれば、膝と肩での四つん這い。

客も膝立ちになって、後ろから挿入する。

「背中を縛ってる縄を持って、その妓を水平まで引き上げてくださる。うん、そんな感じ」
もうひとりの客も、やはり膝立ちで、明美の口へゴムに包まれた怒張を押しつける。

明美は目の前の男性器をじつと眺めた。ゴムに包まれているせいか、生々しさをあまり

感じない。が、獣じみた生臭さは今里よりもきつかった。

「娼婦と客の間では、してはいけないこと」

今里の言葉も思い出した。

（勝江さんは、それほどタブーとは考えてないみたいだけど？）

明美が亀頭とにらめっこをしていたのは数秒だけだったが。

「厭でもなんでも、啞えるんだよ。父親の借金を返すためなんでもしますって言ったのは嘘かい？」

頭を押されて、キスしてしまった。そして理解したと思った。

（やっぱり、タブーなんだ。だから……）

縛られている娘に無理強いするという形にしようとしている。

明美は口を開けて、わざと先端だけを啞えた。予期していたとおり、勝江の声が飛ぶ。

「こらあ。もっと根元まで啞えろ」

ぴしやんと、竹尺で背中を叩かれた。あまり痛くはなかったけれど。

（勝江さんが、いちばん『ごっこ遊び』を楽しんでるみたい）

そんな気がした。そして、自分も——楽しんではいないけれど。この形だと『お仕事』が楽チンというよりも頑張れる気がする。

「後ろのお客さんも、もっとガンガン突いてやってよ。そしたら、この妓の身体が自然に動いて、前のお客さんも愉しめるからさあ」

「お、おう……」

明美が男性器を啞える様を見物していた客が、猛然と抽挿を始めた。勝江の言葉どおり、

明美の身体が前後に揺すぶられて、口中の怒張が勝手に出入りする。

（外から見ていてもわからないだろうから……）

勝江に命令されないのにサービスするのは『ごっこ遊び』からはずれるかなと思いつつ、怒張に舌を絡め、唇をすぼめて亀頭をしごいた。ゴムのせいで、セロハン包装されたソーセージを舐めているような気分だった。

明美の動きだけでは刺激が足りずに、フェラチオをさせている客も腰を使い始める。しかし、後ろから突いている客との動きが噛み合わない。それがもどかしいのか、いっそう乱暴に、まるで口中に杭を打ち込むように荒っぽい動きを繰り返す。

二人とも、『ちよんの間』だろうがトルコ風呂だろうが、他所では絶対にできない体験に興奮して、動きは激しくなるばかり。その被害は明美に集中する。角度が合っていないのか、膣の中をえぐられるような（かすかな）痛みがあった。それはじゅうぶんに我慢できたが、フェラチオは『お仕事』だからと自分に言い聞かせて、それでも苦しくて（物理的な刺激で）涙がにじむ。喉の奥まで突かれて嘔吐えすきそうになる。鼻の穴に淫毛が突き刺さって、どうにかくしやみを堪える。舌での奉仕どころではなくなった。

十分ほどで、後ろに取りついていた客が身を引いて、ようやく明美はフェラチオに専念できるようになったのだが――後ろから縄を引いてくれなくなったので、自分で上体を起こしていなければならず、すぐに腰が痛くなってくる。

「んぶぶ……んふうう……」

息をするたびに、獣じみた臭いが鼻腔を満たすのだが、最初ほどには気にならなくなっている。娼婦よりも卑猥な真似をしている自分にふさわしい臭いだときえ思えてきた。

「口で息をするのよ。啜り込んで。唇を震わせて刺激するの」

づちゅうう……ぶふうう……

今里に仕込まれなかったテクニクまで、教わるままに駆使して。三分ほどフェラチオ奉仕も埒が明いた。

手を使えない明美に替わって、勝江が客の跡始末をする。

「お客さんたち、凄く激しいんだもん。あたいまでムラムラしてきた。まだ時間があるし、お相手してくださらない？」

ええっ？ という顔をしたのは、二人の客だけではない。明美もだった。

「いや。さすがにすぐは……」

客はどちらも三十歳くらい。青年期のような回復力は望むべくもない。

「ちえええ」

不満を漏らして。なにを思ったか、明美の横に仰臥して着物の裾をめくった。

「じゃあ、いいよ。自家発電するから」

脱いでいる右肩の襟をさらに引き下げて乳房を露出して左手で揉みながら、右手を股間に滑らす。

座卓を挟んで座っている二人の客は呆気にとられている。明美にいたっては度肝を抜かれている。明美は男性の自慰についても知識を持ち合わせていない。まして女性は——自慰などしないものと信じている男も少ない。

裾の陰に見え隠れする勝江の指は、せわしく動いている。男よりも乱暴に女性器をこねくり、豆をこすっている。

「あ……いいい。くううんん……」

演技ではなくほんものの喘ぎ声だと、明美は直感した。そうしてようやく、勝江がなにをしているか理解したのだった。

勝江は両脚をピンと伸ばして太腿を意識的に締めつけている。目を閉じて性的快感に没入しているのだが、ときおり薄目を開けて客の様子を観察しているらしい。

「墜ちる。墜ちちゃう……墜ちるよおおお！」

背筋を反りかえらせて、座敷の外までは響かない程度に抑えて絶叫する。

そして。ほうと溜め息を吐いて身を起こすと、束の間の狂態が嘘のように、てきばきと着物の乱れを直した。

「ほんとに揚羽にも手伝ってもらいたかったけど——今日のところは、やめとくよ」

桜紙で指だけを拭って。客の前に三つ指を突いた。

明美もあわてて見習って、布団から下りて正座して。三つ指を突けないので緊縛された身を深く折り曲げた。

「お粗末様でした。ちょうど時間となりました。本日はありがとうございました。下までお見送りさせていただきます」

明美に向き直って。

「揚羽は、裏階段から控室へ戻りな。縄をほどいてやるよ」

また『ごっこ遊び』の口調に戻っていた。

今のは、いったいどういうことだろう。その場に座り込んで考える。

女性でも状況によっては自分からSEXしたくなることもある。その欲求をみずからの

手で満たすこともできる。初めて知ったけれど、『自家発電』なら操を穢すことにならない。操なんて、自分にも勝江さんにも関係のないことだけ。もしかしたら母さんも、父が出稼ぎに行っていたとき『自家発電』をしていたのかもしれない——そこまで考えが及んで、あわてて立ち上がって控室へ駆け下りた。家族の中に男女の交わりが持ち込まれるなんて、生臭すぎて厭だった。もちろん、それがないと自分も弟も生まれてこなかったことくらいはわきまえていられるけれど。ちなみに。処女も性欲を催すことがあるとは、依然として明美の想像の埒外ではあった。

勝江に縄をほどいてもらって、とりあえず普段着に着替えて小一時間。ずっと勝江と顔を突き合わせていた（ケーキとコーラをおごつてもらった）のだが、あの場で『自家発電』をして、わざわざ客に見せつけた意図を尋ねたりはできなかった。

そうして、ふたたび腰巻一枚になって、今度は前で手を縛られて、三回目の顔見世に座る——暇いとまも無く、待ちかまえていた二人組に追い立てられて二階へ上がる。

「初日だから、いろいろと試して今後の参考にしたいからね」

座卓の上に布団をたたんで積み上げて、あお向けに寝かされた。両手両足を座卓の四本の脚に縛りつけられて、腰も頭も宙に浮いている。フェラチオは頭をいっぱいのにけ反らせてなんとか啞え込んだが、喉の奥まで突かれるし、上体を動かせないから苦しくても逃れようがない。

客を送り出すと、明美は意を決して抗議した。

「今のは厭です」

勝江の言いなりになるにしても限度がある。

「わかった。もうやらない。お客もやりづらそうだったし、縛り直すのも意外と手間だからね」

客への受けと自分の都合だけで、明美のことは考えていない。いや、縛り直すのが手間というのは、客の回転を妨げるというふうに解釈すれば——やはり勝江は将来の女将として物事を考えているのだろう。

四回目も、顔見世に座ったのは三十秒くらい。

膝を曲げ後ろに手を突いている客の上に、明美が後ろ向きになって跨る。また後ろ手に縛られている明美に替わって勝江が怒張を淫裂に導いた。

「エロ雑誌なんかには背面騎乗位なんて味気ない言葉で紹介されてるけど、四十八手では『本駒掛け』っていうの。お客さん、揚羽の腰をつかんで、好きに動かしてね」

似たような体位でも、男が前屈みになって腰をつかむと『乱れ牡丹』という名前に変わると、勝江が解説する。

「若いのによく知ってるなあ」

眺めていた二人目の客が感心する。

「どつちが上になるか、四つん這いか立ったままか、それくらいでじゅうぶんだぜ。なんて偉そうなことを言うけど、立ったままなんてしたことはないか」

「じゃあ、挿れ場所は違うけど、立ったままはどうぞ」

こちらの客も勝江にゴムを着けてもらって、明美の前に仁王立ちになった。勝江の『ごっこ遊び』にはつきあわず、さっさと『お仕事』始める明美。

男二人にサンドイッチにされて、明美は『𦵏』の字を思い出した。けれど𦵏られているという雰囲気ではない。明美を貫いている客は腰を両手で抱えて揺すりながら自分でも突き上げている。その動きに合わせて明美は軽く膝を屈伸するだけでいい。その動きである程度は口中の怒張が出入りするし、上体を自由に動かせるので喉の奥を突かれたり頬の内側をえぐられることもない。これは痛くないのだが、無理矢理に百面相をさせられているみたいで、どうにもエッチな気分になれない。エッチな気分になれないと、豆への刺激も痛いかくすぐつたいかで、稲妻が奔ってくれない。せいぜい線香花火だった。『お仕事』のたびにオーガズム（あるいはその手前）に達していたら身体が持たないと勝江は言うけれど――どうせなら愉しく『お仕事』をしないと、それくらいは思うようになっていた。

四回目が終わったときは午後八時をまわっていた。ここで、また一時間の休憩を取る。

「銭湯へ行こうよ。縄痕の上に縄痕を重ねると、最後が大変になると昨日でわかったから」

「またも、縄目がびっしり刻まれた裸身を見知らぬ同性の目に曝さなければならぬ。けれど断わって」

「じゃあ、仕舞い湯に揚羽ひとりで行きなさいよ」なんて言われたら――護ってくれる人がいなくなる。

しぶしぶ勝江の言葉に従う。それなのに、なんとなく心が浮き立ってもいる。

（羞ずかしいけれど、勝江さんがついててくれる）

さらにその奥に、羞ずかしい身体を他人の目に曝す快感がひそんでいるとは、まったく気づいてはいなかった。

火照った肌を三月末の夜気になぶられながら店に戻ると、顔見世には外から通っている

網代が座っていて、トランジスタグラマーの鳴門が順番待ちをしているところだった。

「おや、早上がりしたのかと思ったらお風呂だったの。さすがはオネエサンだわね」

オネエサンというのは、勝江を女将の娘として意識したときの呼び方だった。今日は理非として稼いでいるのではなく営業係（遣手婆）に近いことをしているから、そう呼んだのだろう。ただ、言葉の響きに微妙な棘があった。

それは明美にもわかったのだが、なぜ鳴門が勝江に含むところを持っているのか見当がつかなかった。

網代はじきに客がついたが、次に見世に出た鳴門は十五分座りっぱなしで終わった。

「どいつもこいつも、チラッと覗いて通り過ぎやがる。かと言って、縄目を人に曝すなんて真つ平だもんね」

言葉の棘は明美に向けられていた。

勝江に仕切ってもらえれば楽チンだなんて考えていた自分が恥ずかしくなった。けれど、縄目だなんて意識まではなかった。犯人を縄で縛っていたのは戦時中までだ。じゃあ縄で縛られるのではなく手錠だったら厭だろうかと――座ってすぐに二人客がついて、勝江がそのかしたせいもあって客に後ろからお尻を押されて階段を上がりながら考えてみたけれど。たぶん縄と変わりはないだろうと思った。だって、警察に捕まった犯人が裸で連行されるなんてあり得ない。時代劇でだって覗いたことがない。これは、あくまでも『ごっこ』なのだ。

網代の言葉に勝江も小腹を立てて明美に八つ当たりしたのか、ただ「いろいろと試しているだけなのか。これまででいちばん羞ずかしくて苦しい体位をさせられた。」

客が明美の足首をつかんで肩の高さまで引き上げて開脚させ、斜め横向きになつて脚を交差させて、真上から男性器を杭のように打ち込む——『立ち松葉』だった。しかも明美は縛られているから、両手で突っ張つて身体を安定させることもできない。どころか、二人目が腕立て伏せの要領で明美の口に怒張を押し込む。

二人の客はこれまでにないほど興奮したのだが、どちらも動きづららしく、埒を明けるまでに二十分も掛かった。

「今のは、さっきよりもっと厭です」

当然の抗議だったが。

「おや。縄女郎のくせに、あたいに指図するつもりかい？」

勝江の返事は、まるきり『ごっこ遊び』のものだった。これに素で返すと機嫌を損ねるなととっさに思った。が、遊びにつきあう氣にまではなれない。

「……………」

沈黙してしまい、気まずい空氣が流れた——のは、勝江が振り払った。

「お客も手こずつたようだし、これも封印しちゃうか」

控室に戻るとまだ鳴門は接客中で、網代が顔見世に出ていた。三つの店で女子従業員は日極で出てくる者を含めても十二人。休みを取る者もいるから、一店あたり三人なら多いほうだ。明美に縄休みが必要なので二人では絶対に足りないと思つて、女将が三人体制にしてくれたのだった。

今度はお茶を挽かずに鳴門にも客はついたが、明美のすぐ後に顔見世を始めたのならまるまる三十分間も座つていたことになる。トランジスタグラマーとは男の目から見た評価

で、明美の目にはかなり肥って見える。しかし、器量は悪くないどころか。スッピンでも、若いだけが武器の明美ではタジタジだし、顔見世に出る化粧顔となると――勝江に手助けしてもらっても「まあまあ、化けたかな。尻尾は見えてるけどね」では勝負にならない。

それなのに明美が断トツに客つきがいいのは、やはり『ごっこ遊び』の珍しさだろう。

すこし早いがこれで打ち止めと決めて迎えた二人組は、かなり出来上がっていた。最初は酔っ払いお断わりで勝江が追い出そうとしたのだが

「だって、この子が出てないときは、婆さんに次の予定時刻を聞いて、それまでボケラくとしてるのも面白くないから、ちよつと角打ち（立ち呑み）^{かくう}して、空振りしたりタツチの差で油揚げ^{あぶらげ}とんび^{とんび}だった。やつとの滑り込みセーフじゃねえか。なあ、頼むよ。姉御の御指図にや一から十まで従うからさ」

そこまで頼み込まれては、断わるに断われない。

勝江は縄尻を（股間に通したりはせずに）客に持たせて、自分は茶菓と目覚まし時計と潤滑ゼリーの他にコーラの瓶を二本足した盆を持って、最後尾についた。

「御座敷は十五分後からにします。それまでに、これで酔いを醒ましてください。ご最厚にしてくださいさった御礼です」

地の言葉でしゃべって、コーラを差し出した。

「はい。いただきます」

「さっさと挿れろ、早く出せ、出したら帰れ」これが基本の『ちよんの間』でもてなしを受けるなんて、この客（に限らず）にとって初めての体験だったろう。すっかり畏まってしまつて、それだけで酔いの半分は吹っ飛んだかもしれない。

ともかく、神妙な顔つきで正座してコーラを飲んで。布団の上で横座りしている明美に後ろから抱きつくようにして、腰巻の裾を乱して股間にゼリーを塗り込めている勝江との危ない構図をチラチラと眺めているうちに。

ジリリリリ。

目覚まし時計のけたたましいベル音で——残っている酔いが消し飛んだか、かえってまわってしまったか。

「それじゃ、始めてくださいな」

勝江が目覚まし時計を三十分後にセットし直して、襟首に差していた竹尺を抜き取る。

「最後はちよいと新趣向ってやつでいくね」

縄で縛られて、しかも二人のお客の相手をさせられるだけでも突拍子もない新趣向なのにと、明美は思う。

勝江は二人の客を布団の上に横に並べてあお向けに寝かせた。

「最初は『百閉』でいくよ」

客に脚を閉じさせておいて、対面騎乗位で明美が挿入する。似たような体位を何度かさせられたから、手を使えなくても簡単にできた。

「挿れたまま、もう一人のほうに向きを変えて。この動きは『御所車』っていうんだけど——お客に向かい合ったら、そこで止まって」

勝江は長い縄尻を手にとって天井を見上げた。それから、乳房の下を縛っている縄をほどこいて、手首に結び直す。途中に輪を作って長さを調整して、その端を竹尺に結びつける。と座卓の上に立って、天井板と竿梁（天井板を下から支える梁）との間に竹尺を押し込

だ。縄を竿梁ぎりぎりまで押し込む。

「身体をゆっくり倒してお客さんを咥えな。縄で引っ張ってやるよ」

上体を三十度ほど傾けると前につんのめりそうになるが、手首の縄が引き留めてくれる。しかし手首が引つ張られて、それにつれて乳房の上を巻く縄が胸に食い込んでくる。それでもどうにか身体を倒しきつて、フェラチオの体勢に持ち込んだのだが。このままでは身体を動かせない。客に動いてもらっても、埒が明かないのではないか。

勝江は輪をしごいて縄の長さを調整した。

「尻を上下に動かしてごらん。膝の屈伸じゃなくて、背筋を使って尻を跳ね上げるの」
難しい注文だったが。尻を跳ね上げると上体がつんのめって、口の奥まで怒張が押し込まれる。尻を落とすと逆になる。手首を吊っている縄を支点にしたシーソー運動だった。こんなことをさせるのは、お客が酔っているからに違いない。酔っているときに激しい運動をすれば、さらに酔いがまわる。客に動いてもらわずに埒を明けさせる工夫なのだ。

明美のほうでも。いつもとは違う角度で怒張が抽挿されるから、快感ではないが奇妙な刺激が心地よくなくなかった。尻を突き上げる動作に専念していれば、口のほうも勝手に上下してくれる。もつとも、不自然な姿勢で埒を明けてもらうに足る激しさで腰を振るのは大変だったが。

「姉御はすげえこと考えるなあ」

本番をしているほうの客が呆れたように言った。

「余計なこと言っていないで、気持ちを集めてよね」

勝江はフェラチオをされている客の横に座って、怒張の付け根を軽く握った。明美の動

きから、フェラチオの刺激が足りない判断したのだろう。明美の上下動に合わせて怒張をしごく。

……五分ばかり経った頃。

メリメリボキツと鈍い音がしたかと思うと、明美は支えを失って、フェラチオをしている客の股間に顔を突っ込んだ。鼻先にぐにやつとした感触を受けると同時に眼球に鋭い痛みを感じて目を閉じた。淫叢に突かれたらしい。

バサバサツと、背中に何かが落ちてきた。

「いつけない！」

勝江が弾かれたように立ち上がって——明美の背中に降り落ちている天井板を眺め、へし折れている竿梁を見上げて。ふうと安堵の息を吐いた。客にはまったく危害が及ばず、ただひとりの被害者である明美もペラペラの天井板に引っ搔かれて小さなすり傷を負ったくらいのものであった。もちろん、天井の修理には相応の費用が掛かるが。

「ごめんなさい。あたいが軽はずみなことをしたばかりに」

客に謝りながら明美を助け起こして、大急ぎで縄をほどいた。

「下へ行って雄二さん……でなくて常さんでもいいから呼んできて」

何が起きたのかようやく理解しかけていた明美は、素っ裸で座敷から飛び出し——かけて気づいて引き返して。腰巻ひとつの姿で裏の階段に向かった。そこで勝江が言っていた常さんと鉢合わせをした。いずれ身内になる雄二を除くとただ一人の常雇いだ。

「どうしました。なにか壊れるような音がしたんだが？」

「天井が抜けたんです。誰も怪我はしていません」

「はあ？ どういうこった」

説明するのは難しいし、それ以上に羞ずかしい。口ごもっていると。

「見ればわかるか。とにかく女将さんにも事情を伝えてください」

はあ——内心で溜め息。オトウサンは言っただけに失礼だが飾り物で、実質的に店を仕切っているのオカアサン。それだけにしっかり者で、明美だけでなく女性従業員にとっては頼り甲斐はあるけれど、なんとなく煙たい存在。

いくらなんでも腰巻一枚では失礼だろうと、いったん自分の部屋で普段着に着替えてから奥の間へ行ったのだが、とくに女将は二階へ上がっていて。

「怪我人がいないって、常さんに最初に言ったのは上出来だよ。でも、その足でわたちのそこへ駆けこんで来てほしかったね」

危機に際して5 W 1 Hを整えた報告をしよう、直属の上司が不在のときでもなんとか連絡を取ろうとして、決定権者まで情報上がるのが遅れる。非常時に平時のルールに従って、結果的に災厄を拡大させる典型的なパターンである。それを女将は経験的にわきまえていたのかもしれない。いや、この小説は危機管理のハウツー本ではなかった。

ドタバタは、すぐに治まった。客には代金を返したうえで、つぎに来てくれたときは半額にさせていただくということで、埒を明けないままに引き取っていただいた。部屋数はじゅうぶんにあるから、修繕を急がなくても営業に差し障りはない。

そして、この一件でかえって——座敷が壊れるほどの面白い(?)遊びができると、『縄女郎ごっこ』の評判が高まったのだが。

爪はじき

天井の修理費は勝江が全額負担することになった。明美にはお咎めが無く、きちんと割り戻しを払ってもらえた。

初日の割り戻しは、前借の返済を引くと八百円足らず（初回の客の一万円は半金を返したし、二人目と三人目は全額返金している）。二日目と三日目は割り戻しの三分の一は勝江の取り分だが、それでも明美は千三百円と千八百円。一日百円の寮費（賄付）十日分を先払いして化粧品代とかを清算しても、手元に二千円近い現金が残る。腕の立つ職人の二日分の稼ぎとどっこいどっこいだ、明美にとっては大金だった。

「手元には現金を置かないのが、金を貯めるコツだよ」

女将も勝江も同意見だった。貯金通帳を作るためには認印が必要だ。

「判子屋の店頭で売ってる三文判は駄目よ。同じ印影だからね。通帳を盗まれたら、おしまい」

そう教えてくれたのは勝江だった。自分とはたった二つしか変わらないのに、すごくしゃかりした人だと、明美はあらためて思った。

判子屋へも勝江に連れて行ってもらった。結構な出費にはなったけれど、一週間後には自分専用の印鑑が持てる。男に処女を破られたり娼婦として客を取ったのとは違う、いよいよ社会人になったんだという感慨に浸った。

そんな明美の意気込みは、自分の部屋に戻った途端に打ち砕かれた。部屋の中には布団

ひと揃いと小さな整理箆筥と肘を突くのに便利な小机とが最初から備わっていた。その小机の上に一枚の藁半紙が置かれていた。

なわじょうろう

へんたいおんな

字を覚えてばかりの子供が書いたような下手くそな字で、そう書かれている。わざと左手で書いたのかもしれない。

縄女郎というのは、勝江が言っていた。明るい陽の下で考えれば、『Hなゴッコ遊び』にしても、二人の客を同時に相手するのも、まともではない。

けれど。これを書いたのは先輩の誰かに決まっている。処女だったとき（わずかに五日前だ）の明美なら、夫でもない男性と一緒に寝るのも破廉恥で変態的な行ないだと断じていただろう。まして、見知らぬ男に身体を売る（女将の言い方だと穴を貸す）なんて恥知らずで不道德の極みだ。縄で縛られて口でも男を咥え込むのは、そこからほんの一步だけ踏み出したくらいではないだろうか。目糞、鼻糞を啜う。そんな諺を思い出して、自分を貶めているようで悲しくなった。

先輩たちからそんなふうに思われていた。それはショックだったけれど。僻みではないかとも思った。昨日のことを思い出してみる。自分は顔見世の場に座る暇もないほどに客がついた。でも、鳴門さんなんか三十分くらいもお茶を挽いていた。新人が先輩を差し置いて人気になったら、妬まれたり嫉まれたりしても当然かもしれない。

けれど。だからといって。

弟を上为学校へやって出世させるには、ここで稼がなければならぬ。弟が出世すれば、

両親が年老いても安樂に暮らしていける。それが、自分にできる親孝行だ。

縄女郎の『ごっこ遊び』は半月と決まったばかりだ。舌の根も乾かぬうちに前言を翻すなんて、オカアサンも勝江さんも絶対にしないだろう。あと二つも三つも天井を壊せば、さすがに考え直してくれるかもしれないけれど。

これから何年（たぶん十年以上）も、ここで働くのだ。半月くらい先輩からどう思われようとも、いずれは見直してもらえるときもくるだろう。

すこしくらい嫌がらせをされたって、へこたれるもんか。

腹を括って『お仕事』に臨む。勝江には、藁半紙のことは言わなかった。誰の仕業なのかわからない。女将からしる勝江からしる、全員に面と向かつてはもちろん、それとなく、注意してもらっても、絶対に波風が立つ。全体の和を乱すし、結局は自分に跳ね返ってくる。そんなふう考えたのだった。

その日は、何事も起きなかった。二人ずつで三十分三千五百円は大繁盛、勝江も緊縛のこつをわかってきて、けっして緩くはないのだが八時間ぶつ通しで縛られていても、仕事上がりに銭湯でマッサージをしてもらうと、翌朝まで縄痕が残るようなことはなくなってきた。

明美と勝江のコンビは大車輪で、日曜日は十二時間営業ということもあって中休みを一時間ずつ二度取っても、客は十四回転した。三十分の『ちよんの間』が終わって客を見送るなり、二人を狙っていた次の客が、明美が顔見世の場に座る前から暖簾をくぐっている。勝江の取り分を除いても明美の稼ぎは他の女子従業員の二倍半、一万四千円にも達した。経費を三百円引かれて、納税積立を引かれて、さらに前借の返済に六割を引かれても、手

取は五千八百円。夢のような大金だった。

そして翌日。もうすっかり習慣になっている、仕事が終わってからの勝江と一緒に銭湯通い。場所柄だけに朝風呂もあるし、昼は暇を持て余すから、その時間帯に銭湯へ行く者が多い。住み込みの五人のうち、仕事の後で銭湯を使うのは椋鳥だけだった。椋鳥は金銭への執着が薄いというか、たいていは三十分から一時間早く上がるから、明美たちとはぶつからない。などと、アリバイのようなことを書いたのは。

「ひどい……」

部屋に入って電灯を点けるなり、明美は果然と立ちすくんだ。衣紋掛けで壁に吊るしておいたセーラー服とパジャマとが、ずたずたに切り裂かれていた。銭湯に行く前はなんともなかったのだから——犯人は住込みの五人のうちの一人に決まっている。

廊下に足音が聞こえて、あわてて明美はドアを閉めて、衣紋掛けからボロ布を抜き取ってボストンバッグに押し込んだ。

どうしてそんなことをしたのか、足音が去ってから考えてみた。

やはり、女将にも勝江にも、そして犯人ではない朋輩たちにも知られたくないのだと気づいた。いちばん歳下の新人のくせにいちばん稼いでいるなんて、生意気だと思われて当然だった。

これまでは気後れが先に立って、ろくに挨拶もできなかった。これからは積極的に先輩たちを立てるようにしよう。そんなふうにならなければ、男（とは限らないが）の餌食になるために存在しているように見えるかもしれないが——この時代では模範とされるような性向の少女ではあった。

しかしそうになると。勝江に仕切ってもらうことが悪い方向にはたらいってしまう。勝江以外の誰彼とは朝晩の挨拶はしても、まだ立ち話をするほど気安い仲ではない。たとえば『仕事』についてわからないことを尋ねるにも、まさか勝江をないがしろにして他の誰かに聞くというのも不自然だし、だいいちに勝江の機嫌を損ねかねない。そして、顔見世の場に座るときでも勝江が先に仁義を通してしまう。

「悪いね、ちよいと替わらせてもらうよ。すぐ済むからさ」

明美の繁盛ぶりを妬んでいる者には、つぎもすぐに客がつくと勝江が自慢しているように聞こえるだろう。

翌日には、とうとう現金を盗まれてしまった。悪口の置手紙や服を切り裂かれるのとは違って、これは紛れもない犯罪だった。お金を盗まれたのでは、なんのために働いているかわからない。

「誰かを疑っているとかではないのですけど……」

思い余って明美は、勝江に相談した。ただお金を盗まれたことだけを言うと、犯人は欲得ずくの仕業だと勘違いされかねないので、藁半紙のこともセーラー服のことも打ち明けないければならなかった。

「……わかった。ちよつと考えさせてね」

勝江が考えてとった行動は——明美の出番を減らすことだった。口開けの顔見世は、他の二人に客がついてから。自分の客を送り出したら、かならず縄をほどく。わざと、縛り直す手間を増やした。そしてつぎに順番がまわってきて、控室に誰か残っていれば順番を譲る。他の二人が二回転くらいしてから緊縛に取り掛かる。

三十分で千円と三千五百円の料金の差が軋轢を生んでいると考えるの取り組みだった。他の二人が二回転半するうちに明美が一組だけ客を取るようにすれば、明美の割り前は他の二人と同じくらいになる。

しかし、勝江の目論見は見事にはずれてしまった。肝心の他の二人への客付きが悪くなつてしまったのだ。

揚羽に客がついて、次にB子、その次にC子と出てくれば、次こそ揚羽だと思って、待っていた客が店に飛び込む。ところが顔見世に座るのはB子。

「なんだよ。揚羽はもう出ないのかよ」

「さあねえ。もう三、四十分もすれば来るんじゃないかねえ」

遣手婆が曖昧に返す。それとも、もっと露骨に。

「次の次くらいかしらねえ」

暖簾をくぐつておいて冷やかして帰る客なんか塩を撒いてやりたいところだが。

「なんでだよ。順番を守れよ」

遣手婆に筋の通らない文句をつける者もいた。誰が見世に座るか、女子従業員の勝手だ。長めの休憩を取る者もあるし、早上がりも珍しくはない。

暗黙の決まりを無視して女子従業員に直接悪態を吐く客（ではなく冷やかし）さえ現われた。

「じゃあ、おめえはとつと引つ込めよ」

結局は誰かが義侠心（？）を発露して、お目当て以外の女子従業員で我慢したりするのだが、十五分で次の女子従業員に替わるのを辛抱強く待つ者も多い。ことに二人連れで来

た客にその傾向が強かった。

結局、明美を含めて三人共倒れの結果に終わってしまった。

はつきり不穏とわかる雰囲気で見世は終わった。

翌日まで明美に嫌がらせが起きなかったのは、勝江がさらになにかしらの手を打つのではないかと、それを見定める意味合いもあっただろう。もつとも好ましい変化は、悪趣味な『ごっこ遊び』などやめてしまうことなのだが。あるいは、女将から勝江に注意があったかもしれないが、それは明美も含めて女子従業員にはわからないことだった。

明けて四月八日は新学期の始まりだった。しかし平日の営業は午後四時からだから、ちよつと口開けが遅れるだけのことだ。

だんだん朝寝坊の癖がついてきた明美が目を覚ましたときには、勝江はすでに家を出ていた。敵の真っ只中にひとり取り残された——とまではいわないにしても、なんとなく不安がつつつくる。できるだけ部屋を空けないようにするくらいしか、嫌がらせを封じる手段はない。食事の時間はおおまかにしか決まっていなから、誰かが台所へ行く足音をきいたときにそれを追いかけて。お行儀が悪くても御飯に味噌汁をぶつ掛けて大急ぎで食べて、すぐに部屋へ戻った。そのときには何も起きなかったのだが。

「ちよつと煙草屋までお使いを頼みたいんだけど、いいかな」

十年選手の本駒よりも在籍期間は短い最年長の石清水に声を掛けられて、明美は単純に嬉しくなった。お使いを頼むというのは明美を見下しているからだろうが、それは倍半分も歳が違うのだから仕方がない。むしろ気安くしてくれている証拠だと思った。

煙草代として一万円札を渡されたときは驚いたが、一日に三千円くらいは稼いでいるの

だから持っていて不思議ではない。さすがに煙草屋ではためつすがめつされて、お釣りが困ると文句を言われて時間がかかった。

注記：一万円札が発行されたのは昭和三十三年十二月。この作品から二年半前である。当時の『サザエさん』でも、偽札を見破る勉強にと八百屋がわざわざ銀行で両替してきて、それを近所の人たちも群がって眺めているというエピソードがある。

石清水に『ホープ』の二十箱入りの包みを渡して、お釣りの端数（といっても百円札が二枚）を過分なお駄賃にもらい、なんとなくはしゃいだ気分で部屋に戻って。

「ひどい……」

ボストンバッグの中身が部屋中にぶちまけられていた。買ったばかりで、また嫌がらせをされないようにと畳んで隠しておいた外出着まで切り裂かれていた。

折悪しく、そこに楼主がやって来た。

「揚羽に手紙が……なんじゃ、こりゃあ？」

手紙を小机に置いて、あたふたと引き返していった。すぐに女将も飛んでくる。

「これはひどいね。いさかいは珍しくもないけれど……ここまではねえ」

騒ぎ立てないようと、女将は明美に口止めをした。

「わたちの監督不行き届きだ。被害は弁済してあげる。二度とこんなことが起きないように、それもある。とにかく、今だけは……何事もなかったように振る舞えと言っても、難しいだろうけどねえ」

「いえ。オカアサンを信じています。どうか穏便に取り計らってください」

内心はともかく、明美としてはそう答えるほかはなかった。

ひとり部屋に閉じこもって。散乱したあれこれを片付ける気にもなれず。ふと思い出したのが、楼主が置いていった手紙だった。

手に取ると。弟からの便りだった。

拝啓

こちらでは土づくりが終わり、苗づくりが始まりました。都会では四季の移ろいも感じにくいですが、姉上には如何お過ごしでしょうか。

堅苦しい他人行儀な文章。しかし明美は、自分よりもよほどきちんと書けるようになった弟の成長を頼もしく思い、郷愁まで込み上げる。

いよいよ新学期も近づき、僕は予習に余念がありません。教科書はうんと先まで進めるとともに、より難しい問題集にも取り組むつもりです。こんなに張り切っているのも、新しい奨学金制度のことを先生に（わざわざ家まで尋ねて来てくださって）教えていただいたからです。

奨学金には、卒業後に月賦で返済するものと、返済を免除されるものがあります。

新しい制度は、従来の奨学金よりも多くの額を支給してもらえますが、上乘せ分の返済は免除されるというものです。

この制度に受ければ、都会に出て下宿しながら良い学校に通えます。全国でもとくに優秀な生徒だけに認められる制度ですので、これに合格するよう頑張っています。先生のお話ですと、今の僕の成績なら絶対に確定だそうです。慢心することなく気を引き締めて頑張ります。

合格すれば、姉上に苦勞をお掛けしなくても良くなります。

どうか姉上におかれましても意に染まぬお仕事を無理に続けたりはせず、僕のことよりもご自分のことを第一に考えてください。

生意気なことを申し上げて、ごめんなさい。

昭和三十六年四月三日

敬具

姉上様

秀一 拝

手紙に水滴が落ちて染みが広がった。

「生意気なことを言っちゃって……」

鼻をすすり上げて、手紙を広げたまま小机に置いた。

ふっと、弱気が頭をもたげた。けれど、すぐに。

「ううん」

自分を鼓舞するように頭を横に振った。奨学金が利用できるなら、おおいに活用してくれれば自分も楽になる。けれど、卒業後に働きながら返すのではなく——自分が肩代わりしてやれば、最高学府までも進めるだろう。

つまり。奨学金は「末は博士か大臣か」の野望を実現するためのささやかな踏み台ではない。自分こそが大きな踏み台に……

そこで明美は考えを打ち切った。踏み台という言葉から、四つん這いになっている自分の姿を連想したのだった。連想の中で明美は裸になっていて、二人の客を相手に『お仕事』をしていた。

「今さら堅気になったって……」

他人に対しては過去を隠せるかもしれないが、自分に嘘はつけない。

役割交換

その日の午後三時。店を開ける一時間前。女子従業員が店に呼び集められた。住み込みの者は生理休暇中の鳴門を含めて全員、外住みではアベックで一泊二日の旅行に出ている浮橋と牡丹を除く三人。日極の窓月と鶴は、ほとんど関係がないので外されていた。

半ドンで帰宅した勝江が八人と向かい合う形で座り、その左右にちよつと控えて楼主と女将。さらに両翼に雄二と常さん。全部で四人いる営業係（遣手婆）は、女子従業員の後ろに並んでいる。明美はすこし離れた位置で両者どっちつかずの位置に配された。

いきなり勝江が土下座した。

「あたいが勝手な真似をしたばかりに、皆さんに迷惑を掛けてしまいました。ごめんなさい」

女子従業員たちは驚いた顔をしたが、冷淡が皮膚の下に透けていた。土下座なんて、善がる演技と一緒に形ばかりに過ぎない。

「今夜からは新趣向をやめます。だからこれまでの一週間は無かったことにしてください——などと言っても、皆さんの心にわだかまりを残したままでは、一週間前に戻らない。それはわきまえています。だから、一週間分の償いをお金でさせてもらいます」

「そういう問題じゃ……」

石清水が発した言葉に、勝江が強くかぶせる。

「オカアサンから許しを得ている期間は、ちょうど一週間残っています。その間は、あたいが縛られ役になって、これまでと同じことをします。姉御役は皆さんに回り持ちしていただいて、割り戻しの全額を差し上げたいくらいですが、それはそれで気まずいかも知れませんが、五分の一だけはあたいがもらいます」

「おまえ、いったい何を言い出すんだい」

女将が慌てて口をはさむ。これも勝江の独断だったようだ。

「だって、それくらいはもらわないと、天井の修繕ができないもの」

女将を振り返って、ペろつと舌を出す勝江。

「いきなりでは皆さんも要領がわからないでしょうから、今夜の姉御役は揚羽さんをお願いします。皆さんは順番に隣の空き座敷から覗いて、やり方を覚えてください」

そこで言葉を切って女子従業員を見回してから。

「今夜の稼ぎで、揚羽の被害も埋め合わせがつきます。それで揚羽も水に流してちょうだい」

いいわねと、念を押す。

「それは……オネエサンのおっしゃるとおりにします」

朋輩の前で『勝江さん』はないし、『理非^{リイ}さん』もふさわしくない。将来は店を仕切る人だとみんなに思い出してもらうために、初めて明美はその二人称を使った。

最後に勝江は、左右の両親へ交互に目を向けた。

二人とも困惑の色をあからさまに浮かべていたが、先に腹を括ったのは女将だった。

「目には目を——というのとも違うだろうけど、これがいちばん皆も納得がいくやり方かもしれないね。いいね、みんな」

女将に言われては、いいもへちマもない。それに、姉御役を務めれば『穴休め』ができて、しかもひと晩で一万円以上にもなる。

そしてなんと言つても。オネエサンが汚れ役を務めるといのが、女子従業員たちの琴線に触れた。たとえば——年齢的に無理という現実は差し置いても、腰巻一枚のあられない姿で縛られて顔見世に座り、さらには同時に二人の客に弄ばれる役割など、オカアサンは絶対に引き受けないだろう。

場の空気が、明らかにやわらいだ。

女将が、ふうと溜め息を吐いてから勝江に事実を念押しするような口調で語りかけた。

「転んでも只では起きないね。前に言つてたあれを揚羽で試して、今度は自分でも試してみようってんだろ」

「オカアサンにはお見通しつてわけね」

というのが、勝江の返事だったが。明美にも他の女子従業員たちにも話が見えていない。ただひとり雄二だけは、諦念の末に悟りに達したような顔になっていた。

「いちおう、これを参考にして。あたしも教えるけど、実際に経験した揚羽がいちばん勘所をわかつてると思うよ」

店ごとに仕切った狭い控室ではなく、二階の座敷を使って『緊縛講座』が開かれていた。腰巻一枚の半裸になった勝江が座敷の中央で膝立ちになって、二つ折りにした綿ロープを

持った明美が後ろに立っている。脇に置かれた座卓には、縛る手順を図解したエロ雑誌の見開き。壁に沿って八人の女子従業員が並んで見守っている。男性は立入禁止。女将にも遠慮してもらっている。

勝江が両手を後ろにまわして、腰骨の上で手首を重ねる。

縄の折り返し部分ができるだけ短くなるように手首をひと巻きして、さらに縄が十文字になるようにもうひと巻き。縄尻を折り返しに通して引き絞る。

「あ……」

勝江が呻く。

「ごめんなさい。きついですか？」

勝江が頭を横に振った。

「だいじょうぶ。他人に縛られるのってこんな感じなんだあつて……」

なんだか舌がもつれているような喋り方だった。

「気にしないで続けて」

縄を斜めに引き上げるような感じで乳房の上を巻く。

「もすこし下。おっぱいの根元に食い込ませるくらいに」

勝江が要点を指導する。

「縄を巻いてからすこしだけ引き絞る感じで。途中の縄留めは、しっかりとね」

胸を巻いた縄を手首から伸びる縄に絡ませて軽く引き絞る。勝江の手首が縄に引かれて吊り上がる。いったん縄を片輪結びで留める。その輪に縄尻を通して引っ張ると輪が縮まるが、摩擦がはたらいでそんなにきつくはならない。二の腕の肘に近いあたりから縄を前

へまわして下乳を縛る。こちらは縄で乳房を持ち上げるような感じにする。最後に、手首から伸びる縄に絡めて、これも勝江の指導で、ごく軽く堅結びにする。

「ああああ……」

なまめかしい声で喘いで、勝江が明美の胸に頭をもたせかけた。

（あたしとは、ずいぶん違う）

縄酔いという言葉を明美は知らなかったし、勝江もそこまで知っているのかどうか。

「あの……続けてもいいですか？」

上下の胸縄を腋の下で（適度に）絞らないとすぐ緩んでくるのは、自分の体験でわかっている。

「いいの。お金を返さなかった父が悪いんです。揚羽さんになにをされても文句は言いません」

見世に出る前から、勝江はヒロインに感情移入しきっている。

二人の役どころは入れ替わったが『ごっこ遊び』の設定は同じだった。父の借金の肩代わりをさせられるヒロインと、彼女を客に取り持つ姐御。姉御がヒロインより幼くては筋立てに無理がありそうだが、そこはちゃんと補強してある。組長に男の子はいなくて、いずれば姐御が幹部の誰かを婿に迎えて組を引き継ぐ。どこかで聞いたような話だ。

組長が後見に就くとしても、自分より年長の荒くれ男どもを顎で使えるだけの器量が無ければ組は危うい。この歳上の娘をきっちり仕切ってみる。それが修行の第一歩だ。架空の設定というよりも、勝江の本心の吐露といったほうが当たっているだろう。

そこまでは明美も察して、悪役になりきった。

「文句を言いたければ、いくらでもいいなよ。俺の手に負えなきやあ、親父に折檻してもらうまでのことさ」

「ああつ……それだけは赦してください。鞭は、もう厭です」

「ふたりとも、よくやるわねえ」

勝江が素の表情に戻って、声の主に顔を向けた。

「あら。それじゃ網代さんの善がり声は本気なの？」

隣の座敷まで響き渡ると評判が立っている。それが、むしろ彼女の売りにもなっている。演技を見抜けないほとんどの客には、娼売抜きで乱れまくる妓として好評だった。

「そりやあ……半分以上は本気だけさあ」

「あたいだって、半分は成り切ってるよ。オマンコを食わせてオマンマを食べてるんだからね。チャランポランじゃ駄目よ」

なんだかよくわからない理屈だが、勝江の気組だけは伝わったようだ。

「たしかに、ねえ」

八人がそれぞれにうなづく。

明美は気を取り直して二本目の縄を手にした。脇の下をくぐらせて上下の胸縄を絞り、手首の縄に絡ませて縄尻を長く余した。

「もう四時を十五分も過ぎてるよ。支度はまだかい」

階下からの声で、勝江が立ち上がった。

「それじゃ、揚羽さん。どうかよろしくお引き回しのほどをお願いします」

そして、小声で付け加える。

「遠慮なんかしないで。あたいに虐められた仕返しをするくらいの気持ちでお願いね。物差も思いきり叩いてね」

「え、あ……はい」

自分とは『お仕事』に対する気構えが、まるきり違う。そんなふうに考えた明美だった。

「さあ、たつぷりと稼いでもらうよ」

明美は着物の片肌を脱いだ。まるきり子供の浴衣にしか見えなかった着物姿も、それなりに妖しくなった。わずか一週間だが、明美も男の汁で磨かれて性長を遂げていたということなのだろう。

——いよいよ明美の出番と待ちかまえていた二人組の客が、怪訝な顔をした。

「あれ？ 揚羽ちゃんが営業さん？ その縛られてるのは誰？」

イチゲン客がほとんどの『ちよんの間』だが、馴染客も少しはいる。ことに、この『ごっこ遊び』は、それまで一度もこの界限に足を運んだことはないが噂を聞きつけて訪れた客と、他所ではできない遊びに嵌って二度三度と通う客とが入り混じっている。そして口開けにつくのは馴染客が多い。あけみも、この二人連れの一方には見覚えがあった。

「こいつは理^リ非^イつての。昨日までさんざん俺を虐めてくれたからね。今日はたつぷり仕返しをしてやるんだ」

馴染客を相手に新しい設定を説明するよりも、現実を持ち込んでしまったほうがどっちも演^やりやすいのではないかと、とっさに考えた明美だった。けれど、一人称だけは『ごっこ遊び』でいくことにした。

「お願いします。あたいを買ってください。買ってもらえないと、この場で折檻されるんで

す」

明美の意図を悟って勝江も演出を切り替えたのまではいいけれど、とんでもないことを言い出した。

果たして。客も悪乗りしてしまう。

「へええ。店先で折檻ねえ。こりゃあ、いいや。見せてもらおうじゃないか」
数秒、明美は考えて。

「やだね。こいつを買いいたいってお客は幾らでもいるんだ。冷やかしなら、とつとと帰つてよ」

「ちよつと待てよ」

馴染客のほうが、ズボンに手をつ込んで千円札を取り出した。

「どうも、五百円はキリが悪い。見物料を上乘せして四枚でどうだい？」

予想とは違う展開に、明美は返答に詰まった。

すかさず、勝江が助け舟を出す。

「あたいを素っ裸に引ん剥いて人前で折檻させて、それで五百円だなんて、あんまりです。せめて、総額で五枚にしてください」

「なんだよ。因業なところは、変わってねえなあ」

客は鼻白みながらも、さらに千円札を引つ張り出した。

「これで、文句はねえよな」

戸惑いながらも、明美は五千円を受け取った。

「ああああ、ひどい。人前で、こんな羞ずかしい姿にされるなんて」

明美がなにも言わないうちに、勝江は床に肩を押つけて尻を高く突き上げた。

「ああああ、素っ裸にされて、お尻を物差でぶたれるんだ」

悲嘆にくれた口調で、その実、明美に芝居の振り付けをしている。

（勝江さん、どういふつもりなんだろう）

すこしでもお金をたくさん稼いで——自分にまわしてくれようとしているのだろうか。

そうだとしても、いきなり型から外れたことをしたら、控室で見学している人たちが混乱しないだろうか。

「殊勝な態度だね」

それでも指示されたとおりの芝居をして、勝江の腰巻を剥ぎ取った。背中に差していた二尺の竹尺を右手に握り締める。

「覚悟しな」

中途半端に振りかぶって、勝江の白い尻に向けて振り下ろす。

びしゃ……

「……悔しい」

小さな声でつぶやく勝江。

もつと本気で叩けというふうに、明美には聞こえた。思い切り振りかぶって、腕に力を込めて叩いた——つもりだったが、どうしても委縮してしまう。

ピシヤッ……

「平気だ。借金を返すまでは、どんなにつらくても我慢するんだ」
もつと強く叩けと催促している。

今度こそ明美は、力一杯に竹尺を打ちつけた。

ビッシャアン！

「きひいいいっ……」

勝江がか細い悲鳴をあげた。演技だと、明美は直感する。

（本気で叩いているのに）

悔しくて、それが腕に伝わった。

ビッシャアンン！

「あがつ……」

悲鳴が喉につかえたような苦鳴。演技ができないところまで追い込まれたのだろう。

そのとき。明美の背筋に、冷たい快感とでもいうような衝撃が奔った。じいんと膂奥が熱く疼いた。

ビッシャアアン！

ビッシャアアン！

ビッシャアアン！

立て続けに三発を叩いた。視界の隅に動きを感じて暖簾を振り返ると。十人ほども人の壁ができていた。

これ以上やると收拾がつかなくなる。豆を刺激されたときの忘我の快感と違って、冷静な判断がはたらいた。

「とりあえずは、これくらいで赦してやるよ。もったも、お客さんがお望みなら座敷でもたっぷり折檻してやるからね」

不思議なくらいすらすらと台詞が口を衝いて出た。

勝江が芝居がかって、のろのろと立ち上がる。

「縄尻を前に……」

客に聞こえない声でつぶやいた。

自分がされたのだから仕返して当然。そんなふう to 思いながら、長い縄尻を股間から前へ通して、淫裂に食い込ませて引き上げる。

「さあ、お務めだよ」

縄尻を引いても、勝江は動かない。

今さら何をためらうこともないだろうにと訝しんで。思い当って、グイと縄尻を引いてみた。縄がますます股間に食い込んで。

「あうう……」

雲を踏むような足取りで歩きだした。

まさしく雲を踏んでいるのだと、明美は理解した。縄が股間に食い込んで、痛いのだけれど痺れるような快感がそこに潜んでいる。悦虐という言葉を知らないままに、漠とした理解が生じた。

「お客さん。理非が立ち止まったりしたら、遠慮なくお尻を叩いてやってくださいね」

それは客へのサービスなのか理非へのサービスなのか、明美自身にもわからなくなっていた。

——二人の客を座敷に揚げて。勝江の手順に倣って盆を取りに下へ戻る。隣の座敷の襖がわずかに開いてすぐに閉じたのに気づくだけの心の余裕があった。すでに『一新』と『縁

奇』は最初の客を座敷に揚げているだろうし、顔見世の場にもそれぞれ誰かが就いていれば、隣の座敷で見学をしているのは多くても三人。そう計算したのだが。

他店はともかく『江楼』は、顔見世の場に女性従業員の姿がなかった。遣手婆のマツだけが所在なげに煙草を吹かしていた。

考えてみたら当然かもしれない。浮橋と牡丹が休みで鳴門が生理中だから、明美と勝江のコンビを除くと営業中の女子従業員は七人。『一新』と『縁奇』に三人ずつの配置になっているが、見学にまわる者もいるから、実質的には二人か。『江楼』でふつうに営業しているのは巴だけだから、今は接客の真つ最中なのだろう。

自分たちの『お仕事』を先輩たちに見られていると、あらためて意識して。目覚まし時計とゼリーと茶菓子の三点セットを持って二階に——お客が勝江を鑑賞なり悪戯なりできる時間を計算してゆつくりと戻った。

座敷にはいつて、あらためて挨拶をする。

「このたびは理非^{リイ}をお買い上げいただきありがとうございます。すぐお使いになりますか。それとも、折檻の続きをいたしましょうか」

いつもとは違う流れになったから、挨拶も即興になった。

「すぐでいこうや。時間が余ったら折檻ショーでも見せてもらうか」

十五分なら（童貞が暴発でもさせないかぎり）時間の余りようもないが、三十分ならお義理程度の前戯をする客もいるし、寝物語の真似もできる。たいていの女子従業員は前者を嫌がるが。

「そうですか。では、さっそくに」

布団の上に横座りしてそれらしく顔をうつむけている勝江を押し倒して、指の腹に絞り出したゼリーを塗り込めたのだが。

（勝江さんたら、すごい淫乱なのかしら）

潤滑の必要がないほどに、膣穴はぬかるんでいた。

「それじゃ失礼します」

すでにズボンを脱いでいる客の前にひざまずいてゴムを装着するのだが。ひさしぶりのことなので手間取ってしまった。

「ご所望の形はありますか？」

勝江との打ち合わせでは、座卓に腹這いの姿勢で縛りつけての鶴越え（後背位）と決めてあったが、馴染客となれば前回とかぶるかもしれない。変態的な刺激を求めて通つてくれるのだから、それでは申し訳ない。

「そうだなあ。押し車で尺八てのを考えてたんだけど。できるかな？」

尺八とはフェラチオのことだ。勝江がしばしば口にする四十八手のひとつではない。四十八手は体位を細かく分類したもののだが、尺八は行為そのものを指す。言ってみれば『挿入』と同じ普通名詞だった。しかし『押し車』は知らなかった。『御所車』とは違うのだろうか。

「あの……折檻を赦してくださいでしたら、初めてですけど頑張ってみます」

勝江さんも大変だなあと、明美は感心した。受け身で虐められているように見せかけて、明美に代わって場を仕切っている。

勝江の（それとない）指示で縄をほどいた。縛り直すのが手間だなあと、心の中でぼや

きつつ。

勝江は四つん這いになって、言い出しつぺの客に尻を向けた。

「虐めてください」

可愛がっての反語表現だろうが、『ごっこ遊び』の設定にふさわしい言い方かもしれない。

「お、おう」

客は膝立ちになって勝江を貫いた。

「よし、立つぞ」

両手で太腿を抱えて、客が立ち上がった。勝江は脚を伸ばして客の胴を挟み、両手を突っ張る。

「へえええ。なんか運動会を思い出すなあ」

連れの客が口にした感想で、明美も気づいた。この姿勢（もちろん挿入は無し）で十メートルくらい先の旗まで進んで、Ｕターンして戻って来るリレー競技だ。男女ペアで、そういう必ず女子が押され役だった。男子に人気で女子には不評だった。男子のほうが力があるから仕方ないと思っていたが、もしかしたらオトナはこっちを連想していたのだろうか。とんでもない競技だ。

「揚羽姐さん、ゴム」

小声でうながされて、慌てる明美。

「ごめんなさい。ゴムを着けさせていただきます」

意馬心猿の客に取りついて、大急ぎでゴムを着けた。

「なんだよ。口で妊娠するわけねえだろ」

「いえ……口の中って、けっこうバイ菌がいるんです。尿道炎とかの予防ですから」
こう言えば拒む客はいない。

そうして、押しても引いても動かない『押し車』が始まった。

ぱんぱん、ぱんぱん、ぱんぱん……

淫囊が勝江の淫埠を打つ音が響いて、裸身が前後に揺れる。その動きで、口に咥えている淫茎も勝手に出入りする。

「んん、んん、んん、んんふうう」

鼻声がだんだん艶めかしくなってくる。淫囊が豆をつついていいるのだと、明美が気づく。

(だけど……エロっぽいだけだなあ)

ずっと『ごっこ遊び』ばかりさせられてきた明美には、縄の無い光景が、なんだか物足りなく思える。

しかし、男には具合の良い体位なのかもしれない。女性が自分でしっかり身体を支えているし、男性は立っているだけだから、自由に腰を使える。女性の上半体が前後に揺れるから、抽挿の動きが増幅される。

「んぶうう……」

後ろの客の動きで切迫の度合いがわかるのだろう。ずちゅううと淫茎をすすったり、顔の角度を変えて裏筋をしごいたり。後ろから追い上げられて、前を追い上げる。

明美は部屋の隅に座って、三人の痴態を眺めるばかり。裸の女性を下半身だけ脱いだ二人の男性が前後から『H』の字に挟んで、米搗きバッタみたいに腰を振っている。馬鹿々々しいしつまらない。こんなことに大金を払うなんてなにを考えているんだろうと思う。も

つとも。豆を刺激されて全身を稲妻に貫かれ空中高く翔けるような、あの感覚。まだ瞬間的だし『お仕事』のたびに感じるわけでもない。けれど、あれが癖になったら――むしろ、こっちからお金を払ってでもしてもらいたくなるかもしれない。それくらいには、SEXに対して肯定的になってきていた。

勝江の身体が布団に投げ出されて。客がほとんど同時に埒を明けたのだと、明美は気づいた。目覚まし時計を見ると、あと十五分も残っていた。

(どうしよう)

客が早めに終わるのは、これまでもたびたびあった。その後は勝江がうまく間を持たせていたのだが――雑談で時を稼いだり、明美が指技で追い上げられるところを見せたり、二人の身の上話を（あれこれと脚色して）打ち明けたり。客に応じて違っていたから、いざ参考にしようとしても、どれを選べばいいかわからなかった。

しかし、それも勝江が取り仕切ってくれた。

「ああああん。あたい、まだ逝ってないのにい。揚羽姐さん、なんとかしてください」

勝江の指示は理解したが、『お仕事』を忘れているんじゃないかと疑った。女が女を弄くるところなんか見せても仕方ないのに。たいていの男にとつては、男と女が絡み合う構図より女同士が絡み合う構図に興奮するなど、たとえ教えられても明美には理解できなかっただろう。けれど。それを言えば、女が折檻されるところだって、なにが面白いんだろうとは思うのだけど。代案を思いつかない以上、勝江の判断に従うしかない。

「なんだよ。お客さん二人に可愛がられて、まだ足りないってのかい。とんだ淫乱女だねえ」

役柄に成り切って勝江の口調を真似たのだが、藁半紙に書かれていた悪口を思い出した。せいもあつた。

立ち上がった勝江の横に行き、これも勝江の真似をして、裾をわざと乱して立膝で座つた。

「ゴム……」

ささやかれて、失態に気づく。が、『ごっこ遊び』でつないだ。勝江の股間を指で穿って、ぬめりの混じった分泌物を客に見せつける。

「こんなざまですよ」

勝江に顔を戻して。

「もうちよい待ってな。先にお客さんを片さなくちゃね」

枕元の桜紙をわしゃつとつかんで客ににじり寄り、桜紙で包みながらゴムを抜き取り汚れを拭う。それをまとめて屑籠に捨てて、勝江に向き直ったのだが。

「お豆を思いきりつねって」

また囁かれて面食らった。自分でちよつと触れただけでも腰がぴくんと跳ねるくらいに敏感な部分だ。刺激されたら甘い稲妻に貫かれる。そこをつねったら——どうなるのだろう。乳首だって、強くつまめば痛いものだから……

「なんだよ、こんなに尖らせちゃって。お望みどおりに虐めてやるよ」

半ばは莢から顔を覗かせている豆を親指の腹と人差し指の第一関節とで挟んで——手加減して文句を言われた竹尺を思い出したので、力いっぱいにつねった。コリツとした手ごたえが、くにやつとひしゃげて。

「ぎゃわああああっ！」

聞いたことも、もちろん自分で叫んだこともないような凄絶な悲鳴だった。慌てて手を引つ込めた。

「痛い、痛い痛い……」

勝江は両手で股間をかばって、布団の上で身体を『く』の字に折っている。しかし。その泣き声に陶酔を聞きつけてしまったのは——明美の素質ゆえだったろうか。

（痛いのはほんとうだろうけど……）

激痛に匹敵するほどの快感もあるのではないだろうか。確かめてみたい誘惑に駆られた。「なんだい。お望みどおりに、どうにかしてやったんじゃないか。もっとしてやるよ。あお向けになって、股を開きな」

果たして。勝江は素直に身体を伸ばして脚を開いた。最初の頃の明美のように、両手で顔を隠した。

（絶対に愉しんでる……ううん）

陶酔しているのだと、明美は確信した。

ふたたび豆を指の間に挟んで、今度は半回転ほども力まかせにつねった。

「ひゃぎゃわああああああっ……！」

凄絶な悲鳴が尾を引いて、空中に溶け込んだ。

それでも、つねったまま明美は力を緩めない。

「うああああ……痛い。痛い……」

勝江はうわ言のようにつぶやいて、びくんびくんと腰を震わせた。オーガズムに達した

と、明美にはわかった。が、客はそこまで女の生理にも心理にも通じていない。

「おい、もう赦してやれよ。芝居にしても、やり過ぎだぜ」

客に肩を叩かれて、ようやく明美は指の力を緩めた。

勝江が糸の絡まった操り人形みたいにぎくしゃくと上体を起こした。

「ひさしぶりに気を遣いました。ありがとうございます」

客に向かって頭を下げた。

明美も芝居をやめて、勝江と並んで頭を下げた。

「札を言うのはこっちだよ。この街にもずいぶんと通い詰めたけど、今日みたいなのは初めてだ。五千円分、きっちり愉しませてもらったよ」

「つぎは一万円分なんて言っちゃあ厭ですよ。こっちが壊れちまいます」

アハハハと、毒気を抜かれた笑いが返ってきた。

縄と竹尺は座敷にうつちやつて。勝江が主客に明美はツレ客にしなだれかかって階段を下りた。それを目ざとく見つけた連中が、暖簾の前で足を止めたのだが。

「見世に出るのは、しばらく後だよ。急ぐお人は隣に行っとくれ」

とはいえ、のんびりしては稼ぎにならない。すくなくとも勝江は、そう考えているらしい。明美を急かして奥の間へ行かせ、自分は急いで二階へ上がって縄を持つてくる。

見学をしていた三人もついて来て、二人が控室に戻り、一人が新たに加わる。

今度は最後まで勝江は口を挟まなかった。

「縛られる経験を積むと、縛り方も身体で覚えるみたいね」

初日に勝江が縛ったときよりも、縄目がずっと綺麗だと褒める。褒められても、学校の

テストで平均点を超えたときほども嬉しくはないけれど。

——顔見世に出る前に、勝江が耳打ちしてきた。

「つぎはね。お釜を持ちかけてみて」

前にも聞いた言葉だった。今もって意味がわからない。尋ねると。

「オマンコじゃなくて、お尻の穴を使うの」

「えええーっ!」

ズダダツと派手な音が響いたのは。裏階段から二階へ先回りしようとしていた見学組の誰かが足を踏み外したらしい。

「どうかしたのっ?」

女将が飛んでくる。

「たいしたことじゃないわ。オカアサンも見学する? そしたらわかるから」

「我が子のオマツリを覗き見るなんて、わっちは御免だよ」

さらになにか口の中でぼやきながら引き返していった。

そういうば——と、明美は最初の日に勝子が言っていた言葉を思い出した。『女には穴が三つある』こういうことだったのか。

(あれ……でも?)

最初は、オマツリとフェラチオ。そうも言っていた。『次』が無くて良かったと、今ごろになって思った。

「あの……お尻って……そんなこと、する人がいるんですか?」

「男同士だったら、他にやり様がないでしょ」

勝江の言葉が、明美にはまったくわからない。その意味では、明美も当世風の性道徳に染まっている。江戸時代の娘だったら、衆道という言葉くらいは（具体的にどうするかまではともかく）知っていただろう。

明美がキョトンとしているので、勝江が露骨な言葉を付け足す。

「揚羽だって、男のチンコより太いのをひり出したこと、あるでしょ」

汲取り式の便所だから自分の物を見たことはない。検便のときだって、落とし紙に一部を受けるくらい。けれど、道端の野糞はしょっちゅう見ていた。言われてみると、相当に太かったかもしれない。あまり詳しく思い出したくないので、口を閉ざした。

「男って存外と嫌がるみたいだけど、言うだけは言ってみてよね。お願い」

「……はい」

返事の後に、勝江に聞かれないくらいの小さな溜め息を交えた。

けれど。以前にも『色々と試してみたい』と言っていた。初日というだけではなく、明日からは要領を飲み込んでいない他の者が姐御役にまわるのだから——明美に無理難題（？）を吹っ掛けたくなる気持ちもわかる。そしてなにより。勝江が明美を実験台にするのではない。自分自身の身体を張っている。なぜ、そこまで『色々』にこだわるのかはわからないが。

（わたし以外の誰にも頼めない。わたしじゃなきゃ、できないんだ）

そんな思いも湧いてきた。

縄女郎の変態女は、自分が望んだことではない。勝江さんが仕組んだのだ。それをわかってもらいたいという打算も、すこしは働いていた。先輩たちは、そんなことは百も承知

で、しかし女将の娘で将来の経営者を誹るわけにもいかないから、矛先を明美に向けている――そこまでの機微を察するだけの人生経験は、明美にはなかった。

そういった、それこそ機微は措くとして。

二組目の客はイチゲンさんで、とくに注文がなかったから、最初の打ち合わせどおりに勝江を座卓に縛りつけた。長辺に直角にすると、顔が座卓の向こう側から突き出す形になる。

「お客さん。せっかくお尻を突き出してるんだから、お釜を掘ってみませんか」

「なにが悲しゅうて、ホモの真似をせにやなんのだよ」

二組目、三組目とケンもホロロ。

ところが四組目は、こちらがタジタジとなるくらいに食らいついてきた。

「へええ。まさか、そっちから言い出すとはねえ。願ったり叶ったり晴れたり曇ったりだ」
初めて聞く掛け言葉に、身売りを強いられて悲嘆に暮れているはずの勝江まで嘖きだし
てしまった。

「やだ、もう。真面目にやってくださいよう」

「じやかあしい。舐めた口を利くんじゃねえ」

せいぜい芝居がかって客が返したが、さらにツレ客が混ぜつかえず。

「ゲンちゃん。舐めてくれないと、俺困るよ」

「ストーップ。もう……笑っちゃって、娼売にならないわ。揚羽姐さん。目覚ましを仕掛け直して」

笑いでだぶついてしまったゴムを横目に、目覚ましの針を進める。

「ごめんなさいね。あたいが笑ったばかりに、おかしいことになっちゃって。折檻してください」

客にも聞こえるように言う勝江。

漫才につきあっている場合ではない。『ごっこ遊び』に戻さないと——明美は、背中に差していた竹尺を抜いて右手に握った。

「自分から折檻を望むなんて、殊勝な心掛けだね。でも、手加減はしないからね」

本気で叩けば叩くほど、勝江は悦ぶ。それがわかってきたから、頭の後ろまで腕を振りかぶって、渾身の力で打ち据えた。

ビッシャアアンン！

「ぎひいいいっ……！！」

ビッシャアアンン！

「ぎひいいいっ……！！」

ふと。手放しで喜悦している勝江が羨ましくなった。以前に（これに比べれば）真似事で叩かれたけれど、そんなに痛くもなかったけれど——気持ちしがシャンとしたものだ。これくらい強く叩かれたら、どうなるんだろう。好奇心ではあったが。縛られてお客に罵られるのが、自分であれこれ工夫しなくて楽チンだったように、これも叩くより叩かれる方が楽なのかもしれない。

渾身の力を込めて五発も続けざまに叩くと、腕が疲れて来た。

「これくらいにしといてやるよ。あとは、お客さんたちにたっぷり虐めてもらいな」

見ると、勝江の股間はまたもゼリーが不要なくらいに濡れそぼっている。天啓というと

大仰過ぎるが、ちよつとした考えが閃いた。

淫裂からあふれている汁を指で掬い取って、それを肛門になすりつけた。

「え……？」

勝江が小さく声をあげて、数秒黙り込む。そして、いつそう小さくささやいた。

「やつぱり、ゼリーを塗ってちょうだい」

一方通行の道を反対に進むのだから、よほど潤滑しておかないと苦しいんだろうなど、それは容易に理解できた。イチヂク浣腸のあんなに細い管だって、ちよつと角度が悪かったり肛門を締めていたら、それなりに痛い。

手を伸ばしてチューブを取って、人差し指の第一関節から先くらいの量を絞り出す。

「できれば、奥まで塗ってほしい」

他人のお尻の穴に指を突っ込むのに抵抗はあったが、言われたとおりにする。いざ実行してみると、タブーを犯すスルリが気色の悪さを上まわっていた。

「それじゃ、お客さん。この妓のお釜を掘ってやってください」

晴れたり曇ったり客が、明美を押しつけるようにして勝江の尻を抱え込んだ。ゴムがやぶれそうなほど勃起している。

勝江が、二人目を誘うように大きく口をあけた。

「はああああ……はああああ……」

急いで息を吸っては、ゆっくりと吐き出している。

「はああ、あがっ……!!」

後ろに取りついていていた客が、ぐいと腰を突き出した瞬間——口を大きく開けたまま、勝

江の表情が強張った。

「が……はああああ……きひいいい」

「痛いのか？ やめようか？」

客が心配したのも無理はない。ほとんど一瞬のうちに、勝江の背中に脂汗が吹き出していた。

「やめないで。初めてなので、ちょっと痛いだけです。処女膜を破られたときほどは痛くないです」

「へえええ。若いのに大ベテランかと思ってたら、恐い物知らずか。しかし、せっかくのご要望だ。覚悟しろよ」

苦痛を早く終わらせてやろうという仏心か。ズンツと、客は腰全体を勝江の尻に押し込む勢いで突き出した。

「ぎびひいいい……熱い！ 熱い、痛い……」

激痛を訴えながら、勝江はいっその凌辱を求める。

「口にも……突っ込んでください。お客さんのチンコで、悲鳴をふさいでください」

それは娼売熱心——客を満足させようとしての努力ではない。卒然と、明美は理解した。

（この人は……痛くされることを望んでいる。痛くされればされるほど、オーガズムに近づくんのだ）

それは、外面的には正しい洞察だった。そして、悦虐の内面への理解を欠いてもいた。もっとも。ほとんど性知識の無いままに売春を始めたばかりの少女に、それを求めるのは無理というものだ。外面的な洞察に達しただけでも——明美にも、悦虐に至る素質が秘め

られている証だと考えるべきだろう。

「んぶうう……ぶうう……んん……」

肛門の激痛に耐えようとする呻き声が唇を震わせて、そこに突き立てられている怒張を刺激するのだろう。フェラチオをさせている客のほうは、暴発といってもおかしくない早さで埒を明けてしまった。

肛門を姦おかしているほうの客は、荒腰を使っても使っても射精に至らず、二十分ちかくも悪戦苦闘を重ねて。腰が痛くなつたのか上体を反らせて、それでも抽挿を繰り返す。

「え？ 急に具合が良くなってきた？」

姿勢を変えて一分もしないうちに終わってしまった。

「ああ、そうか……」

勝江が客に負けないくらい荒い息を整えながら、ぼそつとつぶやいた。

「なにが、そうなんだよ？」

「あのさ……オマンコと違って、腸には筋肉がないでしょ。でも、出口に括約筋がある。だから、出口付近で浅くピストンすると刺激が強いらちうなつて、そう思つたの」

「なある、そういうことか」

客が唸つた。

「なかなか、お釜も奥が深い——いや、浅いのか」

苦痛の余韻冷めやらぬ勝江が、盛大に吹き出した。

「一時間ほど銭湯に行つてきます」

皆に断わってから、勝江は明美も誘った。

「揚羽は最初の頃のあたいうまいけど、やっぱり縄の絞り方に難があるわね」

ネオンの明かりにかざした手首には深い痣が刻まれていた。たしかに、明美の肌に刻まれている縄目と比べると、痣の形が崩れているし部分的に鬱血している箇所もあった。

「ごめんなさい。できるだけマッサージさせてもらいます」

「いや……それはもちろん、お願いするけど。銭湯へ行くのは、ちょっと違うの」

すでに表通りからはずれて、銭湯に続く薄暗い道を歩いていた。人通りもほとんどない。それでも勝江はことさらに明美の耳に顔を近づけてささやく。

「中身を掻き出されて、拭いたけど、まだ気持ち悪いの」

ああ———と思った。桜紙に付着していた茶色の汚れを思い出した。

「やっぱり、腸洗滌はしとかなないと駄目ね」

「チョウセンデキ？」

「一リットルくらいの水で浣腸して、中を掃除しておくの」

はああと、明美は溜め息を隠さなかった。多感な少女としては嫌悪の表明ではあるが、娼売女としては称賛でもあった。

「勝江さんて、研究熱心なんですね」

「まあね。でも、こっちも雄二に無理強いでもさせとくんだった。播粉木じゃあ、やっぱり本物とは違うのね」

「え……？」

だんだんと夜道が明るくなってきた。銭湯は目の前だった。

「実はね。前々から播粉木で予行演習してたの。でも、やっぱり細すぎたみたい」

問い返す暇もなく、二人は銭湯の暖簾をくぐった。

——帰り道で、勝江はさらに詳しく打ち明けてくれた。

肛門性交、いわゆるお釜には、男性の一部ではあるにしてもマニアがいる。しかし、晴れたり曇ったり客が言っていたように、娼婦といえども、それを許す女は滅多にいない。仮に妻に持ちかけようものなら、即座に離婚される。

だから、それを新趣向のひとつにしようと思論んでいるらしい。タブーを犯す妖しい愉悦を、すでに明美は知り初めていた。

「そういったのもメニューに加えようって、母さんに提案したこともあったんだけどね、あやうく勘当されるとこだったわよ」

（あ、それで……）

これまで理解できなかった勝江と女将との会話のあれこれが、ひとつにつながった。しかし、まだ釈然としないものが残る。

なぜ、勝江さんは新趣向にこだわるのだろうか。それが疑問だった。それと、もうひとつ。

「あの……理非さんは、他人を縛るのは簡単とおっしゃってましたよね。ご自分を縛ったことはあるんですか？」

「あら。あたい、そんなこと言った？」

「はい。わたしを最初に縛ったときに」

「あちゃあ……」

わざとらしく、おでこを叩いた。

しばらくは黙って歩いてしたが、表通りに出て店が見えてくると。

「女って、強い男に支配されたいっていう願望があるのよね」

「……わかるような気がします」

直感的に、その通りだと思う。歳上の逞しい男性には憧れるけれど、歳下のひよろっこの餓鬼なんか願ひ下げだ。

「それが強くなるとね、すべてを支配されたい。男の欲望のままに弄ばれたいと思うようになる。そんなとき、手足が自由だと、どうしても教え込まれた道徳が邪魔するのよね。実際に抵抗するかもしれないし、そうでなくても内心忸怩ってやつで自分に素直になれない。でも、縛られて抵抗を封じられたら——悪いのは男だ、自分は被害者だって、言い訳できるじゃない。それに、どうせ縛られるんなら、縄で——おっぱいを縊られたり股を縦に割られたりとか、いろいろと辱められたいと思う。あたいつて、変態なのかな？」

「……………」

明美は答えられずに沈黙している。

自分であれこれ段取りしなくても、縛られて勝江さんに仕切られて、お客に身体を弄ばれているほうが楽チンだと思った、そのことと根っ子は同じような気もする。けれど。女性が男性に身体を売る（穴を貸す）のは、実際に自分がしていることだから、今さら善悪を考えても意味は無いけれど。緊縛とかフェラチオとかお釜とかは……大仰に言えば自然の摂理に反しているように思う。だからこそ、タブーを犯す愉悦があるのかもしれないけれど。考えれば考えるほど、わけがわからなくなってくる。

それでも、結論は最初から出ている。

「わたしには、わかりません。でも、勝江さんはわたしの恩人です。どんなことがあつても、ついて行きます。右を向けといわれたら、一日中だつて右を向いてます」

言葉にしてみるといかにも大袈裟に聞こえて——明美は、走つて店の裏口に続く小路に逃げ込んだ。

結局。勝江が明美の歳頃、いやもつと幼い頃から自分で自分を縛つてひとりで『ごっこ遊び』に耽つていたと知るのは、八月になつてもつと親しくなつてからだつた。

その日は平日の八時間営業で中休みに銭湯へ行つたにもかかわらず、十組の客を取つて、売上で三万六千五百円。明美への割り戻しは前借を差し引いても五千百円。

翌日からは『一新』に替わつて、午前中に買つてきたばかりのワンピースを着て普通に娼売。さすがに座る暇もないほどとはいかなかつたが、十五分の持ち時間中には必ず客がついて十回転。売上で一万五千円は、『ごっこ遊び』を別にすればナンバーワンだつた。いつてみればハンデ無しの真剣勝負で勝つたようなものだ。そのせいもあつて、明美への嫌がらせはピタツと止まつた。

日替わりで勝江の姐御役を務めた者は、一万円から一万五千円と、ふだんの稼ぎの三日分を手にして——一週間ではなく、日極の二人を含む全員に番がまわるまで『ごっこ遊び』は続けられた。

こんなに儲かるのなら、自分も縛られてフェラチオも厭わない。そう言つて手を挙げる者まで出たのだが、女将の鶴の一声で打ち切り。

「あまり目立つと御上も黙っちゃいけないし、協業組合でも出る杭は打たれるからね」
復活を要望する客の声も少なくなかったが、七十五日どころか二週間もしないうちに、
すべては以前の落ち着きと適度な繁昌とに戻った。

明美も一人での『お仕事』に慣れ、朋輩にも受け容れられて——平凡なBGや女工よりは
派手で波乱に富んだ生活ではあるが、それなりに日常というものが形作られていった。

S M 風俗

拝啓

今日も一日小雨が降り続いています。稲作農家にとっては恵みの雨ですが、ラジオを聴いていると都会では雨をうつつとしく思っているそうですね。客商売は雨で客足が細るといいますから、姉上も雨はお嫌いになられたでしょうか。でも、物は考えようです。客足の途絶える日には、ゆっくりと骨休めをしてください。

さて。先だつの五月の飛び石連休には、帰省された先輩も少なくありませんでした。石山光男先輩のことを姉上は覚えてらっしゃるでしょうか。姉上の二学年上だったと思います。石山先輩は夜の繁華街で偶然に元同級生の小野和美先輩を見つけられたそうです。そして帰省中に、あちこちで**武勇伝**を吹聴していました。心無い仕業と思います。

もしも姉上が同じような目に遭われたらと、それが心配です。職業に貴賤は無いと云いますが、古い偏見の残る田舎のことです。両親はいたたまれない思いにたまされるのではない

でしょうか。

僕は姉上の志は御立派と思いますし、生涯返せないほどの恩義にも感じています。

しかし、その一方では、身内を犠牲にしてまでの立身出世に何の価値やある。そういう思いも捨て切れません。

先にも書きましたように、特別奨学金に受かる目途はいよいよ確かなものとなってきました。

右を御勘案のうえ、姉上も御自愛ください。

敬具

昭和三十六年六月十一日

秀一 拝

姉上様

「込み入った相談があるんだけど、一、二時間つきあってもらえる？」

勝江の誘いであれば、接客中でもない限り拒めないし、そのつもりもない。

勝江は特飲街の外れにある喫茶店に明美を誘った。向かい合って座って。

「まずは、これを見てほしいの」

光沢のある厚手の紙を表紙に使った角背の雑誌だった。前に見たのとそっくりの印象だが、表紙に印刷されている半裸モデルの構図が違っていた。

葉の挟んであるページを明けると、文通欄（※）だった。

※趣味を同じくする相手との文通を呼びかける掲載料不要の広告。現代では『友達募集』の掲示板に相当するだろうか。たいていは誌面で住所氏名を公開していた大らかな時代ではあったが、一部の慎重な雑誌では初回のみ編集部経由とすることもあった。小さな出版社が片手間に対応できるくらいの規模で、スパムは少

なく炎上とは無縁の牧歌的な時代であつた。

S i n s i M o t o m u

援助希望 三時間三万円 交通費・出張費別途

M女学生。夏休みだけのアルバイト。

売春行為不可 釜・尺八経験有

危険監視に女性一名が付き添います。

連絡先…○△□郵便局留 大和田勝江

「……………」

しばらく文面とにらめっこをしていた。なんとなくわかりそうな、しかし意味不明な内容だった。

「こちらから相手のいる所まで出向いて『ごっこ遊び』をしようってことね。でも、売春行為は禁止。その代わり、お釜や尺八で埒を明けてあげるの。お客が希望するなら手コキもあるけど、それだとS Mっぽくないでしょ」

「あの……エスエムってなんですか？」

冒頭のローマ字で、その二文字だけが強調されていることと関係があるのだろうか。

「相手を虐めて性的に興奮するのをサドと言うの。逆に虐められて興奮するのがマゾ。現に、あたかも明美さんもマゾだよね」

なるほどと、半分だけ思い当たった。勝江さんは縛られて陶然となっていたし、竹尺で

叩かれてあそこが洪水になっていた。でも、わたしは……

同じかもしれない。縛られて相手の言いなりになっていたほうが楽チンだと思っていたけれど、それでまったく興奮していなかったとは言い切れない。

そして男性は……

縛られている明美や勝江を見て、すぐ勃起させていた客を何人も思い出せる。

「アルバイトと書いてるけど、ほんとうはアドバルーンなの。何人もお客が見つかるようなら、卒業後はこれを仕事にしようと思っている。あたいが経営者で、女子従業員第一号も兼ねる。そして……」

勝江が、まっすぐに明美の目を覗き込んだ。

「あなたに共同経営者、そして女子従業員第二号になってもらいたい」

「……………」

明美は、長いこと沈黙していた。いまひとつしっくりこなかった女将と勝江の会話が、ジグソーパズルのようにピッタリ噛み合った。

「女性が付き添うと書いてあるけど、姐御役ではないの。文字通りの監視役。ほら、天井を壊したことがあるでしょ。あれに懲りたから、当分は吊りとか磔は相手が望んでも断るけど。他にもいろいろある。首を絞めるとあそこの締めりが良くなるとか。男は夢中になって、つい……なんてことも実際にあるそうよ。だから冷静な目で観察していて、危ないと思ったらストップを掛けてもらう。そういう役目よ」

勝江の説明は、半ば耳を素通りしている。どう、いう、ことをするのかは、もちろん自分の身に危険が及ぶことだからきちんと確かめておくべきだ。勝江の口ぶりだと、明美がずっ

と監視役ということでもなさそうだった。しかし明美はそれ以上に、そういうことをする（あるいは、しない）という事実について迷っている。

自分が虐められて性的に興奮するかどうか、まだ自信（？）は無かったけれど。売春行為不可の文言に目が吸い寄せられている。SMを『お仕事』にすれば、法の網の目をくぐるようなきわどいことをしないで済む。世間様に後ろ指を差されることもない……だろうか？　きっと、変態女と誹られる。

「お店はどうするんですか？」

それは、迷いの森をどちらへ進もうか考えるための時間稼ぎだったかもしれない。しかし勝江は、即座に答えた。

「雄二さんに任せるわ。いまのオトウサンは飾り物でオカアサンが万事を仕切っているでしょ。代替わりしたら逆にするだけのことよ」

「それで……雄二さんは承知なんですか」

「あいつつてね、こういう世界に棲んでるくせに、それともこういう世界だからかな。すごく義理堅いの。まあ、あたいから夜這いを掛けたんだけどね。娼売を始めるのに生娘じやどうしようもないって、掻き口説いて。でも、あたいの処女を破ったのは雄二。だから責任は取るって約束してくれたの」

実際にはそんな単純な話ではないだろうと、それくらいは明美にも推察できる。大きな遊郭（を分割した三つの店）を引き継ぐ娘を嫁にすれば、金銭的にはなんの不満もない生涯が約束される。

そんな明美の勘繰りを、勝江は否定——したのだろうか。

のは……」

勝江が白封筒から摘まみ出したのは当然だが便箋と——一万円札だった。それも四枚。

「十一通には現金が同封されていたの。こんなふうに交通費込みのもあった」

もしもこれが詐欺なら大儲けできていたねと、勝江が小さく笑った。もちろん、そんなことをすれば——雑誌の編集部には住所まで教えてあるのだから、すぐに捕まってしまう。変態的な広告に騙された恥ずかしさに口をつぐむ者は少なくないだろうけれど。

「このすべてに応じたりはしないわよ。どういうことをするつもりか、文通で確かめて、双方の予定を突き合わせて——条件が合わなければ、このお金は送り返すけど」

半月で三十万円以上、あるいは五十通以上。もしかすると、八月は一日たりとも休めないのではないだろうか。そう考えるくらいには、明美も乗り気になっていた。

娼売女と賤しめられるのと変態女と蔑まれるのと、たいして違いはない。それなら、法律をきちんと守っていると胸を張れるだけ、変態女のほうがましではないだろうか。

それに。明美に竹尺で叩かれてオーガズムへの道を登りかけた勝江を羨ましく思ったというのはいき過ぎにしても、自分も同じ体験を試みたいとは、確かに思っていた。絶対に蔑んではいなかった。そのような言葉を口にはしたが、あれは『ごっこ遊び』のお芝居だった。いや、もっと言えば。自分に向けた言葉だったのかもしれない。

それに。十万円の前借はちょうど返済を終えたところだ。なにも他の店に鞍替えしようというのではない。実の娘が興す新商売を手伝うのだ。オカアサンもこころよく認めてくれるだろう。

不安があるとすれば。播粉木で練習していたという勝江さんでさえ、あんなに泣き叫ん

でいた『お釜』。自分に我慢できるだろうか。我慢できるだけなら、それに越したことはないけれど。もし万一……勝江さんみたいに、痛みの中に快感を見い出してしまったら？ それでもかまわない。すこし軽はずみだった気はしているが、「どんなことがあっても、ついて行きます」とまで誓いを立てている。いまさら、あれは気の迷いでしたなんて言えない。言ったら、勝江さんだけでなく自分自身まで裏切ることになる。

明美は封書の山から目を上げて、勝江に正対した。

「わたし、足手まといになるかもしれませんが、オネエサンにどこまでもついて行きます」
言い切って。なんだか梅雨が明けて青空が広がったような気分になった。

追記

勝江が始めたSM援助交際はじきに拠点を構えた本邦初のSMクラブに発展し、六十年を経た令和の現在まで続いている。リイとアゲハは今なお『現役』として活躍しており、美魔女とも八百比丘尼とも恐れられ、嘆美されている。

ちよんの間…完

女護ヶ島

後半の『女護ヶ島』は製品版でお楽しみください。

2020年11月

著者：濠門長恭

表紙絵：藤間慎三

発行：SMX工房

ブログ：<http://goumonchoukyou.blog.fc2.com/>